里見八犬傳 拾三編 卷廿四

特別
^13
4304
14

曲亭翁編演

八犬傳 第九輯下之帙 上編

N13
4304
14

〈2001-316〉

余性也僻常非同好知音不交也是以微軀生於江門而交遊罕于江門唯遠方有二三子在耶謂和歌山篠齋南海默老松阪挂隠名足久是已約這個三才子每見余戯墨諸編相喜評定寄之于余以問當否為娯樂故郵書来往不為遠千里譬如鶯去雁来春秋不霊今茲逮本傳結局三才子逆聞之或詩或謌各詠所其長祝頌是書有始有終句句皆金玉不但增拙著之光耳褒賞幾過分兵雖慚愧不知耶閣默不可藏秘筐且為蟬窠也即便附載於此以代小序云時戊戌端月蓑笠漁隠

譽庭文庫

頃者聞本傳垂圍圓寔可羨稱也因題短韻一
律以寄于著作堂梧下。　默老半漁

發研新史褒稱周都鄙競需俟速郵繡口錦心優水
滸狗譚貓話壓西遊毫鋒靡敵芳流閣文焰摩空圓
塚丘騷客雅人比拱璧珍篇何徵有朋傳。

里見八犬傳をほむる長歌　小津久足

葦垣海邊の長人おほきみの
文の苑詞をやうとものゝふ
家の名のあらはれ
世々ほまれをつたへ
みやびをあかもおもふ
くれなゐの中みなる事あつ
八の犬ふ氏大のつらなり
申もの年年の初春あきら

うきよの筆すさびに鶴の年手に流るゝ筆の物語すさびの年月に
風にあまたの歳出すいかめしくいまの物語かれこれ書きて
紙帳ともみゆる世の中ともなかぞらにあらはれかひやぐらの
海の市をくすしき物語たへなるたくみの美なり
あはれかゝる思ひを捧く字はかりに文あまた紀波路
まさしき道ありと善を勧め横走る浦の蓋盤あし
紀をたゞし悪しき天命にもとより意ある
筬手にとりて深くも玉詞の玉藻數ならぬ
ほうきめの勝れるはなし犬山に見る梓に

春はなほ待乳丘にさへ雉も待出て以梓にまなこ
中に母足かけて故郷にて志ある祝賀す
安房の洲崎にて光り出し小川の霊玉をもとめ玉
風八行のもじを記す海の濱藻の名残傳
富山に根ざしゝ狗子の八犬を生みたる此の武雄
まぎらはし雉すまして勇み武者の天筆やらぬ
厚きおもひ執つき毎海老の杉文よりなる
八人の傳あらはれ継緒長く巻も九
はるかにて今四十年玉来る數尽堂全丘

讀書自嘆

休向世間許平生狂躁

人情淡未了書中語亦多

浮名過也生

蓑笠漁隱又曰。是詩故兒弱冠時所偶作。曩攟遺篋而得之。雖題詠非犬士之事。然其要似夙知吾意裏而有所志。因錄備遺忘。蓋彼之短命。不見是書結局而逝矣。不得無遺憾也。（盛義）

○

蓑笠漁隱曰。所錄前後錄客歲到來遲速而已。非撰擇以為伯季也。江湖繙閱百君子其熟思之乎

董齋盛義書（中智信圖）

南總里見八犬傳第九輯下帙之下甲號九卷目録

卷第二十六　第百二十六回　政元弄權分正冨使　犬江臨別借忠良僕

卷第二十四　第百二十七回　能辯講軍記薦餅　窮鳥還舊巢巧轉

卷第二十五　第百二十八回　士卒肴防自家　餅書因教告秘密

卷第二十五　第百二十九回　五條頭代四郎啓宿夏　擊劍場親兵衛見武藝

卷第　第百四十回　犬江仁名揚華夏　左京兆恩厚東臣

卷第二十八　第百四十一回　惡報失明変事懺悔　神助因レ妒反成二實罰一

卷第二十七　第百四十二回　誣二兩滅一辰巳貽二誑簡一　尋故事政元疑二名畫一

卷第二十七　第百四十三回　點二虎眼一龔風鬧二公文廳一　斃二衆口一京兆誅二禄齋屋一

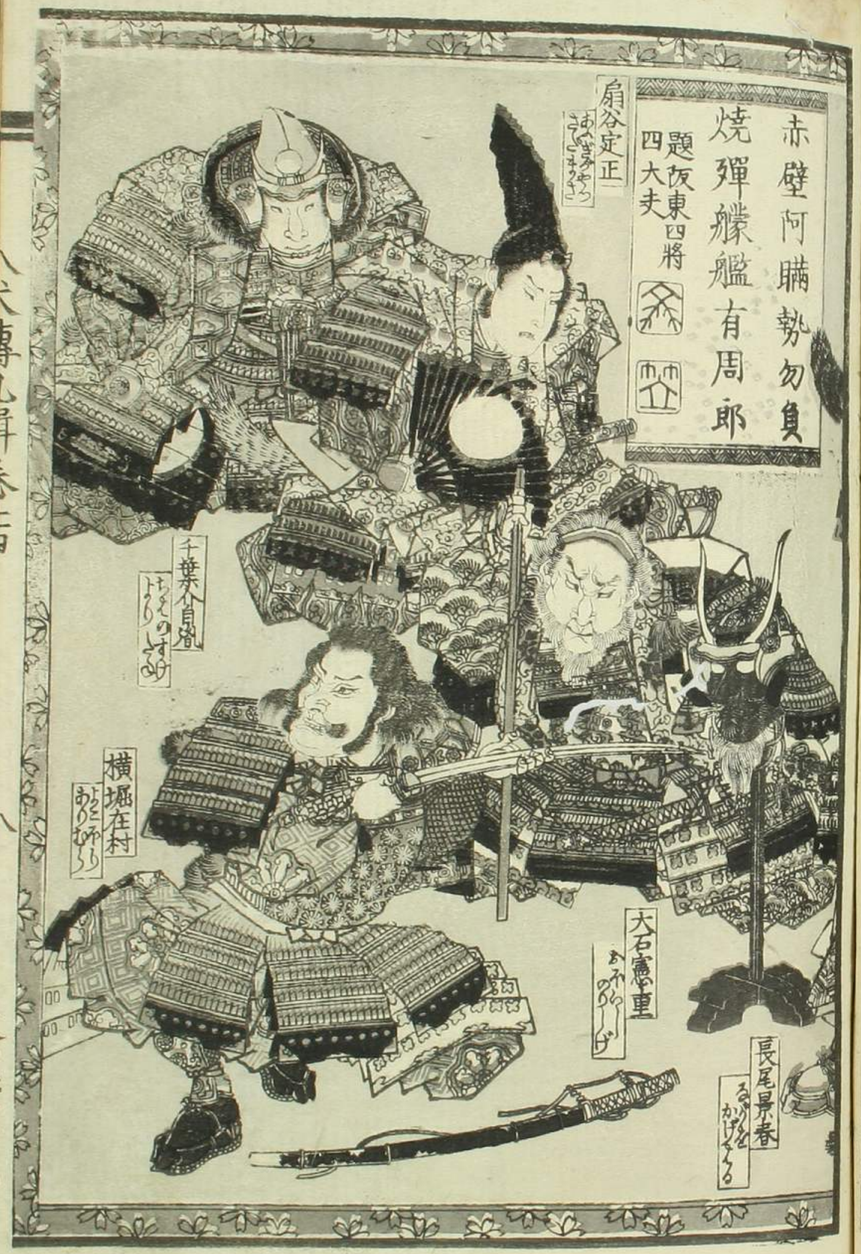
卷第二十八　第百四十四回　犬江前諾請二關符一　澄月一謀殲二五虎一

卷第二十八　第百四十五回　獻二五頭一衆奸卒喪二數頭一　櫃二肺小一惡師徒斷二手足一

文溪堂藏

堀内難波太郎
貞住
田税力助
逸友
高一郎
但し
小林
鍛冶子
再太郎
大刀作ともはたくみの
もゝいそかまくら
打のとをとゞろかす
物ゝあり
半閑人

奇貨忘神祐
諫閉禁使臣
欲擒蛇足過
驚虎魄傷人
題政元及巽風
管領政元
深窓猶有隙
雪吹小姐
竹林賢風
真澄紀三六


赤壁阿瞞勢勿負
焼殫艦艦有周郎
題扳東四將
四大夫
扇谷定正
千葉介自胤
横堀在村
大石憲重
長尾景春

山内顕定
足利成氏
巨田助友

里見後の八犬女の内中五の君濱路
姫の端像ハ既ニ前輯ニ出されバ今略之

女二君靜笹
姫ぎぬのきみ

女三君城之戸
姫おのとのきみ

女七君小波
姫さゞなみひめ

姫小まの月
むさゝ濱ハ
のむえ江雉の

女八君栞
姫しをりひめ

女三君副本
姫そへもとひめ

女四君行野
姫ゆきのひめ

ふそ
月を
賴鳥 府

女八君弟
姫おとひめ

本傳出像の人物に面貌の老したると弱くなるると本文に合ざるあり看官疑ひ思ふべけれど。聊差に論辯せん。譬ば金碗大輔孝徳入道、大法師ハ嘉吉元年辛酉の秋父孝吉の自殺の時彼身ハ甫の五歳也。然而長禄二年に至りて伏姫富山に登あり一日孝徳死刑を宥められ祝髪して行脚の僧になりしハ乃二十二歳の時也。是より年紀ハ第十五回に夙く作者の自注あり今これを以て價れバ文明十年戊戌の夏、大が行徳なる古那屋に来て信乃（時に十九歳）現八（時に二十歳）小文吾（時に二十歳）親兵衛（時に四歳。初名ハ真平。）らと邂逅せし時、大ハ四十二歳になりぬ。是より又六稔を歷て文明十五年癸卯の夏、大が宿望成就の日ハ八犬士と相伴ふて安房へ帰り来にける年四十七の時也。五十未満なるに至るも本文のその折々に年紀を具に誌さゞれども創よりして推考へなば看官紛れあるべくもあらず亦ある第七十二回なる甲斐の指月院の段（前柳川重信画）よりして吾如意なる庵主となりぬ。大の面貌翁備て六旬許の老僧に似たるハ後にこれを画く者其を知らず赤本にせざるもなければ弥老て相應しからず又蟇崎照文ハ長禄

元年にその父蟇武が富山川に溺死せし時ハまだ彼名を知らされども必是少年なるべし。是より二十二年を歷て文明十年戊戌の夏照文行徳に出世の時齢ハ三十有余也、大の弟なるもの是より後光陰ハ五年六稔の程なるに出像の面貌翁髭て五十あまりの人に見ゆ。又八犬士の内中犬田小文吾ハ髫歳より角觝を嗜て大漢なりしハ本文に粗見えたり。かゝるに出像ハ凡庸なく自餘の犬士に殊なるにもあらず。惟第六輯の画工英泉のこの意を知らで第五十八回に小文吾が市河にて依介夫婦に再會の段の出像より全身肥満の大漢に画しゝに看官ハ前々なる出像に眼熟れて妙とせざるもあり只隱るゝ過ろとのみ思はれ。又扇谷定正ハ修理大夫持朝の季子にて其管領ハ享徳年間よりして鎌倉扇谷の館に在しが時の人相稱えて扇谷殿とぞひけりかくて定正鎌倉を退くの後明應三年十月五日に卒りぬ享年五十二歳事実ハ鎌倉管領九代記に詳也因て定正卒去の年明應三年甲寅より溯數れバ本傳第九十二回文明十五癸卯の年道節信乃らが復讎せしハ定正四十二歳の時也然るをその段の出像にハ

定丞面貌最弱ろ。吾一知音の細評ふその弱ろ処を疑て云云と同れよあり。但その差錯のごろく毛人ょ訛へてのあれが不如意ろるのヨろれども就中今論つらよ人々の本傳中ゟ有名ゟ殊ふ尤ゟ着ろれ見巧者ろの疑ふて其をゟも作者の衍ゟありとのぶるべし然りけれども人のうちそふよゟも其齢よろ面貌の老ろあろ弱ゟもあれ只管ふ年歳を數へその面貌の合ざる訂さび反て理評ふゟむ況本傳の画工一筆ふあらぶ各作者の画稿よ據て潤色して善を取まく欲ろるのそ婢妾まそも画ふ美人ゟぬろ。画工と作者の用心の同ゟ知ろふ足ろまじ。三昧ろる。像ふ婦幼の與ふして和漢稗史の花ろれども是ゟ故ふ作者の趣向をゟ知ろるのぶ。ゟむ花を愛ろふ実を思ろむ実を嗜ろふ花をも親ろめろ誠ふ好ろそ善讀者ふ必文を先ふして後よ像を親ろとふ画ふ縁りて事の趣を厭く悟れが讀見ろ時ふ興薄ろむ歟へ現看官ゟも用心あり有ろ中ゟ徒ろ知音ふ世ふ又ヨろ易ろねば漫ふ戯房をち閉て像のよろ自評あろ人の疑難を解くろふ本傳結局大團圓よ遂憾ゟろむ為ゟか。

○出像の差錯ふ猶許せべし。本文ふ至りて看官評り思の誤寫ヨろえ既ふ前板第九輯下帙の中の五巻ゟも校閲老眼ふ届ろて見逃ーろ。發販あ後ふ再校あれべ。○十九の巻六丁ウ左ふ上帙の自序の内作者暗記の失を訂て野中狼之介又野中當ふ云とあろのろう。野中みろ山中の誤ゟく其実ふ品河を山中野中共ふ品河と作るべし。同巻十丁右念佛の念字上の一缺ち。○二十の巻十二丁左長城生の隊ふ云云とある長城ふ誤ゟ當ふ根生の野ふ作るべし。同巻廿六丁右彫職彫ふ顕の誤字ゟ同巻廿六丁左箕そて上の傍訓のそいその誤刀ゟ當ふみふ倣るべし。○二十一の巻九丁右勇猛精進ふ下の傍訓ちの□ち當ふさうーふ倣るべし。同巻十丁左忍困誤寫ゟ困當ふ岡ふ作るべし。同巻廿三丁ウ初行壮介當ふ荘介ふ作るべし。同巻廿七丁左中條弟兄とある中ふ誤寫ゟ中條當ふ條ふ作るべし。○二十二の巻三丁ウ左長挾介の挾ふ狹の誤寫ゟ同巻四行ノ中我ふ銭の誤刀ゟ同巻十三丁左君所ふの傍訓誤寫ゟ中條當ふ十五行百會尤の傍訓誤刀ゟ當ふ

ツブリホ仏るべ〇二十二の巻 初丁ノ右 第百二十四回ホの二十の二をニの誤寫。本回則百二十四回之」同巻 八丁右 棘鬣魚墳元亀八ホの名跡吾一知音の評ホ石亀屋次圀太の初名を鯛の墳源八とのミ。とあるそれ是を同名として訝れり然けれども鯛と棘鬣魚と源と元亀と共ホ音訓い同くて。其字ハ各異之既ホ両個の出来介あり同名も亦作者の用意のミ。矧又源八元亀八現八をも同名ホあるをも。水滸傳の張青と張清の如ミさゞれ同跡紛れ易るべけれ。後ホ棘鬣魚墳の墳を改く骨とも。知音の評ホ従べ之」同巻 廿四丁ノ右 雫雲霍の歌ホ一ヤその都ホ雖べ這の云云是を富永とせい異説ホ紛まてまじ。飯尾彦六左衛門常房の歌ゆく。上の五文字汝や知るとあるも亦知音別人の評ホ心つけらまされ。躰く刊行の書肆ホ誂て重く補刻あれども既ホ數百部揚むれ後ホ今又改ホ大既未を挙ぐ。訂ー漏ありも猶ホ倦べー。

終

第百二十回 犬江親兵衛ホ政元権を弄びて正副使と分ツ

犬江別ホ臨く忠良僕と借る

復説犬江親兵衛ホ。蟇崎照文と共ホ京師の公教と果をーゞ身の暇を賜らんそ。管領政元の邸ホ詣ーて政元即使家の家臣本呂西須衛門をもて。遠路の使その甲斐ありて首尾残る所なを両邸所堂町東嶺大義ホ思召さる。歸國の暇をこゝに稟もの情願介るべくとゝゞ尚侍ホもゞ上の御内意とのまゝ。あんとと親兵衛これを承そ。肚裏ホ思ふやう。書と既ホ遽與せをもーゝ。何ぞの御内意あるやらむ。そうろうて。と訝るのミ。推て問んなどもがホて照文と共ホ言ホ従て稟あり。躰て歌店ホ退て。當晩姥雪代四郎ホ件の一義を

さてやつづ
耳元に告るふ代四郎も亦許りて左もうん右もあらん扨と思ひ難れ照文も心かゝる詞の沙汰推
量果もあるらけの却説其詰朝親兵衛の照文と共保代四郎以下自他の伴當を昨の如
従へ西陣なる政元の邸へ赴きて伺候のよし言入れつゝ客房へとて案内よ立程ふ土圭の聲近く笛そこ聞ゆる姑且して香西復六を親兵衛及照文ふ對面ありつゝ命ふ違ぎ伺候の時刻の早うしを労ひて却ひまう主君今朝をも花の御所へ出仕の留守ふれども程ふく退出ありべし豫吩咐られ其室ふ誘引て准備の酒盃を薦めつゝ別室ふ誘引て准備の酒盃を薦めつゝ畫饌を羞るふ青侍們給侍ら達さ殷勤ふ殺珍奇菜の種々ある歎待叮寧ふうければ親兵衛と照文はいふく詫る胸安ふぞ今更何ふの故ぞと這盛饌を賜ふやうと思ふのうち問難て強ひて舒恩を拜して只得ふの體就ては青侍們ふ迭代ふ盃を薦め餚を添且晝飯を羞る程ふ秋の日ふれがち托も甚ふ未の剋近くる時候郷食饍ふ移ふ果しふ香西復六出て参つ親兵衛ふよふち向ふく

主君ふ方僅退ふれふ然ぞ告ふ不娯ふ思ひ給ふ對面ありべしと仰ふ誘ふのまゝ安ふ内へ
親兵衛と照文ふ郷食饍ふ強ひ畫て後ふ立てふれて正廳ふ赴けば既ふて管領政元ふ有司並ふ
近習們を侍ふて出ふ儲の上座ふ在り當下復六拜謁て東使見參のよふ申れば政元
隨即親兵衛ふ間近く招ふ慰ふ席を與へてふ東使の歸國を抑留ふく今日ふ
逮ぶと是私の一誂ふあるぞ仄ふ聞ふ大江親兵衛ふ少年ふして武藝智勇力関ふ八箇國ふ敵
なふ一然ふ角を折ふ膝を抗る膂力ふ義秀親衛ふ兄と共ふ且殺ふ劍白打ふ馬の精妙牛
孺丸ふも猶優ふまふとて身單ふ那館山ふ城を降ふ逆將草叢甲素藤ふ二たび
まで虜ふあける大功偉ふと云ふその事ふ當家枝葉の君ふれべ千
ふ當將軍家ふ義尚ふ尚青年ふまりゆゑども大武備ふ御盛德當家枝葉の君ふれべ千
食宵衣今事敏ふ世ふまれども攻伐軍旅ふ暇ふ折ふ合ふ要れ方ふ志ふ奥ふ且和漢ふ
博士ふ課て史傳ふ開講ふる要ふ在て聽ふ召ふべとふふ時ふ馬ふ

○文溪堂藏

故実を考訂させて。笠懸犬追物を御覧あり。便是絶たるを継ぎ。廃れたるを興さまく欲すゆゑに。
大江が本事箇様々々と人の稟せしを聞食て。卒然が其親兵衛を権且這里に住在して。その餘へ
都て外へ遣されず。我暇あらん折必件の武藝を見ばやと思ひて其義を相計ひねと仰合されたれば。政
元奉りて相傳ふる御諚の趣右の如し。有侍れば蟹崎十一郎は宣旨御教書を相携て東へ退
まで其旨を房州なる義成に傳へ遣すべし。這挙は親兵衛その身単の一期の面目のみならず。里見の
光を増すよしあらば房州父子の幸ひならんと宣れて。親兵衛額衝たる頭を抬げ席を避て。
謹て稟すやう。御諚恭くは候へども御内意は恐れながら傳聞の謬りにて候ふ。武藝は
武士の家業なれば。小臣も亦人並に弓の本末。大刀抜く術を学ざるにはあらねども。いかで上ざまの
高覧に備べき才のあらばこそ。然ぞろの技ひとつもなし。且義に素藤征伐に微功ありとあるは都人の辟傳へ
老虎の威を借る狐に似たる僥幸えけるを好も思ひ故にそれのみの実を推せば。那一挙は順をもて
逆を討つ。主にて候ふ義成の寛仁大度の武徳にて。臣等が功にはあらずと辞ひと。敢元なくも謙遜

辞譲は然ることながら。世の風聲は左まれ右まれ。里見に家臣多かるに。今番大事の京師使に少
年なるが撰れしは。その俊傑なりと問ずして知るに足れり。然ば近属武蔵なる将次貝入道道灌が
上洛あつて参内の折。文武の達人なりとて。詠歌やあると問れまつりて。我宿は松原つづき海近く富士の
高峰を軒端にぞ見ると稟しかば。叡感特に浅からず。時の面目世の稱賞。那身一期の栄とせし
歌は搢紳の風流にて。武士の家業にあらねども。人口碑に傳ぜざるはなし。況や和郎は武藝をもて将軍
家の御賞翫に遇なることあらば。其身一個の幸のみならず。里見の武備を赫赤させる。主従一致の名誉
ならんに。其義を情思ひねやと解れて。親兵衛阿容たる色なく。其義は寔に過分なれ。冥幸では候へども
小臣今番の正使にて。宣旨御教書を賜りし所。更に御遊の故ならず。京師に抑られ。副使の照文に
のみ身の暇を賜らば。正使たる甲斐もなし。時の不便を争何はせむ。自由の事には候へども。武藝御覧を
幾日とも定めさせ給はらば。這回帰国の暇を賜り。使の役誼を果して。それ亦復参のほど
ぬべからで。是等のよしを執成て。願しくそれのみといはせも果ず。政元は眼を瞋らし。聲苛立て黙れ親兵衛

過言之同輩語譚の私誡ゃらば已が随るとも、いわ将軍家の台命と固辞まるこう大不敬その身一箇の罪ゃる義成の上ゃるべきを覚期あって秋の水流れもあへず濃紅淡と顔ふ丹楓い主客の勢に脱る。路いるりけり登時本西復六ゃ勝と找めう主ふ朝そおそるく稟ゃもう目今親兵衛が不慮の過言ふ京師のう態ふ熟ざりける甲斐ら児ぺ少年ゃれいって許さゆるう臣ゃ主ふ又諭ってお親兵衛ふうち向いて犬江生ぁ義遅滞いふ是千慮の一失欤いでもあるべと今番安房殿のあん願ひい死されぐ筋ゃり。我主君の提撕稟あーふう両御所室町・格另のあ仁旨とりく異誠るく執奏まりくげれば日ゃぞ救許の欽びあり。和殿們君臣上下の面目世ふ得りる況を汲せあられい寛券者の好意と将軍家の御洪恩ゃるめぞ非如一年二箇月。這地ふ留めゆえとも固辞稟ゃる義ふあぐぞ忠もあーで自滅ぞ招ぐ世の胡慮ふそんのう蛮嶋生ゃ甚麼ぞと問れて照文然ぃい。親兵衛ぶ云云と渋り稟ゃ主ふ職分と人ふ譲らぐと思ふ在り并も理アふいへども。台命の最も惶ぶ教誡の外いゆぞ。在下則宣旨を護まり御教書を相棒て安房へ退ぞて徒々と返命仕ぐべ義成必欽びて美なり。親兵衛が淹留を疑ふべくもいわぞと答ぐ傭を見うぞて犬江生。听ぐぐく事既ふあるよ逮ぐりぐ美勿論るらんかーとのられて親兵衛頭を抬げて然ぐ我不肖る。京師の変態ぐるを知らぬ田舎児ぞて天子将軍ゃる迩を思いぎるふあーねども。人各その主の與ふも昔漢の蒯徹が韓信の與ふ啓を取て跖が狗吠ぐ吠るとのられーい宴ふ以あるる然べぞ今只管ふ志ぐ立すくまれば主君の上ふ妙るこぞ進退惟谷アゐ杜て仰ふ従ふべーおのう稟さゆるとふ照文欽びて香西主親兵衛ふ既ふ美服仕の過言ふ罪ぐ恩免ゆぐ在下ゃまぐ車ぐるんと陪話るぐ復六ぐら听て幷ぐぐかしあり珍重々々あるろてぞれと答て馳ぐ主ふ身邊ふ膝ぐ找めう両ぐぐ働て稟上ぐる。親兵衛ぐ云云と解醒ぁいーま他ふ正使ぐるぐりて返命ぐ副使ふ任せんとのぐと惜ぎふ一旦御詫ふ悖アーぐ後悔美服仕の恩不敬の罪ぐ醸ぁーふ田舎児の疎忽ぞ。且少年ふいへふ因忍免ぐ

願ひけれと勸解れが政元點頭て。ふらば親兵衛先非を悔て。禀せ台忌状ゐ相違る処。十一郎も同意多秩と問へば親兵衛找ら少く。遅鈍の本性ゑ發くゐ御諚兼り伝ぬ只ゐん指揮よ依るべれと。心をもれば照文も倶ゐ喜りて。ふゑ復異説もる。十一郎ハ歸國ま。總ての事ゐ趣を房州へ義成へ傳へよか。又親兵衛へ今よりま。将軍家の召入多ゐ市中の旅宿ハ宜ゝらも明日の歌宿を我郎よ徙て異日の御沙汰ゑもよ。その義ハ香西復六ゐ豫ゑろもゑたれば退て宜く談ぜべ。と宣ホー言果て扇を拿て身を起せば近習們前後ゐ従て。倶ゐ奥ゑ去ける。徳而香西復六を二四個の有司と倶ゐ親兵衛並ゐ照文を誘引立て。客房へ退りて倶ゐ坐を占て。今日の公裁危ゝ事ゐ及て安ゐ至の母欽びを演てゐる。剛才寡欲君の仰あざく大江生ハ本郎ゐ旅亭を究ゐれば。明日ハ風起て移りゐね然がそ伴當を多く留んハ益よ似ゝう大江生の給侍ゐハ本郎の僮僕さへゐ隷ゐ不自由ゑゝあよとある君命よハ従来の伴當のゐの地ゐ残り住る者ハ另ゐ旅宿を賜よべ。ゐ開ゐ初のごく客店ゐ逗留もともけゝうぞゑの義をもろゐ汚ゆへかゝと生宮を親兵衛うち听て給達のゐ上日兼り伝ゐ身ゑ隨ゑ伴當ハ若黨雑色奴隷と倶よ十餘名ゐ過ぎれども僮僕さへゐ隷ゆゝべ逗留の中。要ゑ紀者ゑ旅宿ハ他仏情願ゐ儘もべやゐむと。心をもれば照文も復六ゐうち向て執成ゐより首尾好ゝりける歓びをのべゐうゆゝ。演且有司們も一個ゝゐ別を告て。親兵衛と共倶ゐ退りて外面ゐ立出ハ代四郎以下の伴當ハ安ゐ至ゑ着て倶ゝて歇店ゐ逐る程景ハ既ゐ敬紀て下晡ゑゐふけり。却説親兵衛と照文ハ心をゝく歇店ゐ逐ると即て頃者居る園ゑ貸坐席へ代四郎を招ゐ安ゝ。鄭ゐ政元ゐ倩へられる。ム戸命の事の趣箇様々々と生宮知れハ代四郎听々眉を顰めて。幷ゑ最不便のゐゑりをとハ思へども和子の武勇のゑ。ゑく莽洛ゐゆゑハ徳孤ゑゑ隣ある。听以ゐもやゐんとゐを親兵衛推禁めそ。否とよ。我身再世ゐ生ゐ里見殿ゐ仕ゝほゐゑの。春よりのゑゐゑ。素藤征伐を除くの外屢軍陣よ敵と屠りそ名を顕ゝーゐゐる紀ゐ何人が伝禀ーて。

将軍家ハ知食けん是疑ふべ𠮟の一ツ〳〵且當將軍家ハ文武の徳をつゝしませ給ひ笠掛狗追物の故
式さへ再興あらせて亦内ミなると世の風聲ハ皆近屬六角高
頼が叛𠮟をうて朝參の不絶これば將軍みづから觀音寺の城を攻伐ゆんとて軍勢催
促あるとふの美も亦都人の風聲ハ粗ゞえさう実ハ尚然ル折ふし珎しけなる馬の枝を
御覽ぜんとて東の使を抑留よと仰まるハやうなる〳〵是疑ふべ𠮟の二ツと知又我旅宿を轉ぜ
管領の邸ハ召置れ那内人と給侍よ隷て我伴當と一緒よせぜと掟らるゝハ弥訝しかくの如きの
敵の降人狄罪ある武士を御内人ハ預置る法則ハ相似う是疑ふべ𠮟の三ツうけり此を思ひ
彼ハあるハ約莫今番の淹留ハ凶ヨくして吉少かんなしと思いぞと悄語けば照文も亦聲を
悄ぞ咽ぶも亦始より疑ざるあねども狄然まで深く思ひ設ざりし什麼いふあそよろこん
ぞと困て頭を病れば代四郎听〳〵剣く悟りて眼を睜り氣を凝らし〳〵さてもくとざりふ又ハふ
うもあらじ〳〵と親兵衛微笑を慰ぜ慶よ然なり思ひる屈し七非如那説ハ所以もて我身を
抑置るとも折を窺ひ親ハ説を被ゼて後易く安房へ逃んと螢崎主歸國の旨両舘ハ意を示し慰ハ
ももはら義兄弟ハも大母妙龍尼を以て這意を以ぞよとの文を照文披果ゼ开ハられぜともろ〳〵
由ハ宜旨御教書あるを爭何ハ我和殿ハ萬事ハ神々もて知仁勇の三徳あれば縦利ぞそ
誘引るとも義ハ背く惑ひるほゞ〳〵火水も中ハ措るとも恙あるべうの思ひなどハ猶千金の
身を愛ゝ一日も早く士信を喪せぬと慰れば親兵衛連りハ咲笑嘆て我心ハ石ハあらぬ栄
爵高禄甲あれ利をもて誘ハれ意ハ我義兄弟七名ゐ
各々ゞ別院あり一折九死を出て一生を得る日までの艱難憂苦を偕ふくだハ毛骨竦つハ
咽ぶハ皇裏ハ妙椿が妖術ハよりあん疑ひを稟て他郷へ遣される开も須臾の程ハて舘のあん
疑ひを解け反て功名両ぶる義兄弟等ハ抜萃る心の徹りあらせとて今帰路ハ柵
楯て又窮厄ハ遇〳〵ぬ狄ハ姫神の神謨りを曩ハ苛子崎の水難ハ救ひる我為

ふらんと悟れば後易き紀二六が志や。智者の主張然もあるべし。偖りとて那邦ホ逗留の程相従ふ伴當一名もあらざるべき事ぞ。便ち小可が那里までも隨ふべけれと悩れば親兵衛頭を掉て。否も亦要ある擬勢ぞ。便ち那邦を郎ホ在るとも。咱等と一処ホ密直れば又何の益らある。否後悔あらんと諭せば代四郎沈吟して然らば折々那郎へ往て安否を問べけれとうを。一緒ホ密直れば我伴當の詰來て安否を問べきぞ。推て示も意見も代四郎が困じて一雫妾時默然。浩処ホ蛮崎の伴若黨某ぞ遽あく這奥坐席ホ来ぬるを照文が見て。否別義あらじと。蛮崎より女圉許へ遣される紀二六ぞ所要を果し。乞迹を慕ふて目今まあるホと。照文點頭てそも亦奇特のまうらう。他ぞ今来れるとも。敵ふるようもなし。只両館の御安否を伺ひ知んのみとうを。親兵衛咳ホ紛ら。禁めて否延蛮崎主今日紀二六が志や。是究竟の便宜ぞの故ホ箇様くの徒の密談あり。是等の計ひ好らぬと。耳ホ入れば代四郎も倶ホ額と駢々。听々只顧歎賞して赤片一笑局ホ入る程ホ點燭時候ふるくぞ。店小婢が引提来る行燈坐席ホ措居て。偖練ホ運ぶ夕餉ぞ三個の容ホ莚れば立まくもある若黨ぞ照文やや。喚禁めて。そこそこ今已ホ口腹のそぐくるわち這夕飯ぞ果して。そ紀二六ホ對面せん。店小二ホ吩咐て他ホも飯ぞ先食さして喫果るが這里ホこれ咎よろくと急せば若黨かの。る程果て已が歇りの外亘る貸坐席ぞ退ける。ホ程ホ親兵衛と照文が代四郎ぞ相飯ぞ。ま安く夕餉ぞ過一囲坐して。各件の密策ぞ云云と相譚ひら。俱ホ紀二六をもち程ホ姑且しそ紀二六ぞ行装の儘被折ぞの裳ぞ解降して刀ぞ引提げ這里ホ来て。咳ぐるぐる内へ入らむ。次の間の際ぞ敷居の邊ホふるぞ衝て刀孙達着もしほさぬ紀二六ぞひとホ照文先登て思ひよらぬと早かり先両館の御安否ぞ伺ひまるべく且談ぜんともあれ咎ぞ這方へ找

てる文
代吃弄

げらよ
あんべゑ
親兵衛
機ふ臨く
意見を
密談も

ねんごろに招けば親兵衛代四郎も共侶ふ労ひて今自他留別の折ふ荘て和郎ぐ来ねるの便宜を因て談る密談もあるふ間遠くてふ耳うぎ次ふ坐の照文と親兵衛ふうち向ひて又嶺傳つ聲を低めて却言上ちる姥雪主も聞召れよ小可是義ふ苛子崎よりふん圀許へ返され折波の上ふ障りふく舘の御沙汰も好首尾なりける始よりふの圀様々ふ終ふ又徒々ふ然がも姥雪主ふ衍ふの折老舘の御仁慈を俯よく仰られ和ふうの始ふうて稲村もそふ反て奇特ふ思食ふ先老舘ふ告まのそ悄地ふ在旦と伺ひめぐよ又徒々のあん計ひを注進状の別輪の稲村へ披露ふ及れぞ。さんとそ舘ふ姥雪主の水陸二箇所の武功を殊ふ称言さをぬんで三三士倶ふ歸圀の後宜く御沙汰あるべ。と仰られぬと雪ふうち然バ一両日ふうんと思ふうち身の暇と禀賜り今番ふ呉我身単ふ港口ふ歌めー苛子崎の兵船ふ又うち乗りそ西へ投て赴く折有司奉り犬士ふ倚ふて小可ふ路費を賜り剰那央船の截領笹高工

らん仰まで銭ヨヌく取せのこりから誰ら欲ひ男ざるべそあ折も市順風ふ日ろべ苛子崎ふ船と返され那地の領主隣尾殿の家臣と雪える錦織主の宿所へ赴て犬士達の謝書を届けまゐせ且小可ら情願と箇様々々と告ーらべ錦織主欣べて感じて随即主君ふ啓そ上げ内命よりふ小可と宿所ふ留めそ便船と那辺へ開ふ載られて銭と費さともろく亦復日毎ふ順風ふて湊歌とヨヌくせそ昨日晡時の左側ふその船尼之崎ふ果ーらべ恰て浪速ふ赴さて歌揩せあひる。ん船の鍼師笠高工役夫らん仰ふん宿所へ詣る程ふ既ふて日の暮れぬ秋の日ろれぐ十二重と砺う安ふ走の果て方僅着到仕の如ん圀許ふ両舘と初ふうて熟もさもぐさん家の内亳も差ほーまきべふの餅のふも犬士達の消息ふそいめと詞せうく来意を報て携さうける書翰亜より道節小文吾らぐ回報二通と出ー膝と我めて照文と親兵衛ふ遮與もを俱ふ受含て鈬ふ特ふ浅くぐ先両侯の恩を拝て旦紀二六ぐ恩

ろ。あるじ。ねぎらひ。くんろのそらさく。感涙坐ぬ吐むまぞ。身の錦ぶ堪ざるけん席と避つ東ぉ向いて。只両侯の洪恩徳誰と。俯ぅ仰ぶうち念ぃ。果れぃ親兵衛ぃ又代四郎と。身邊ぁ招ぶて。便先ぶ見ゆぺく。我義兄弟七名の連署の回翰ぉ載られ。其事の趣ぃ今紀二六ぶ報すると。然だら精疎みけれども。よく見て思ぃ意味深ろ。先听めと。件の書翰と二ど開いて。微音ぉ讀むぺ。代四郎倩听果て。貌を更め額ぺ衝ぺ。小可何らぬ。きの過世ありて。狭而館の御慈愛恩澤寔ぁ餘るのみるぺ。故王道節の庇ぁ。七箇の犬士達の愛顧ぉよりそぁの幸ある。驥尾の蒼蝿虎前の野狐兎もなりも。我徳ぁ思へ。僥幸ぺける。天ぉそろぺくぃと。托ると。親兵衛ぁあぉぞ。ぁの弟の獨嗅のみるぺ。ぁ咀ぢも。亦両館の。慈恩愛顧と。今爰ぉ千萬言ぉ謝ーまろるとも。いふぁるぺ。盡ぃぬん。願ぉ念ぺく。幾まぞも。夢ぺ日ぺく。報恩の時と。ぞろうそよろめれと。諭ぺ。傍ぺとぺぺそ。喃蟹崎王本性急

敬ぁ那説ぉ在ち。快紀二六ぉ耳ぺに示しぺぁろぺぺ。心屬れぃ照ぃ文ぁ然ぃ迎ぺぺぺと紀二六を。召ぃも身邊へ召侍ぺぺ。悄地ぁ示ぉぁの地の顛末箇様々々と。逆もろく。鮮くと約莫半晌許。解果て又ぁの。管領漫ぁ公意と借て。犬江を抑るのみるぺ。旅宿と邸ぉ移さまるぉ。伴當と一緒ぉせざれと。掟らぺぃ故ぺぁろぁ。今更主僕を分られてぁの客店ぉ。残る者。姥雪野兵甲まれ。ぁれぁの犬江主の安否と訊ねぺ。市中の風聲と。悄地ぉ告まぺく。欲さぬとも。輒く對面と允さるべぺぞ。推量果ぁて違ぃぞ。屡を隔て癬を掻ぺ。心焦燥と増ものみて。事ぉ益るを爭何ぃせむ。有徒れぃ我も倶ぉ居て。憂を分ち朋友の信義をあぉ盡さんとぁ素より望む所なれども。然ぃてぁの宣旨と御教書と捧げて安房へ立かへぺ。両館ぁ返命を。仕る日を幾日とも知ぎやるぺむ。并ぁ不忠ぁ臣る者の本意ぉあぺ。ねぃ。首自然両端ぉ決難る事最難義の折るぉ。汝ぐ来ぬるぺぇ幸ぃ。因て犬江主のぁ計ひあぺ。汝ぁ西家ぉ做代てぞぁの地ぉ留ち。馹ぁ歌店と異ぉ。経紀児るぐぉ打扮て那邸ぉ出

入せば方便と以大江主の旅宿ゆ立入ぐ。那隷僕們ゆ親くうぐば。王ゆ逢今日もみぐるぎも然るとぞ那里の動靜を。姥雪吏們ゆ報知せ。又巷談街説と那家中の秘事をいち知るよりあるうべ大江主ゆ密ゆ告ぐ。後の便宜ゆるとあるんゆる洒家ゆ代てぬる和郎ゆ過ぎ彦大役ぐよくせよかと悄話けば。親兵衛もゆ紀二六和郎ゆ東人のかへさの伴ゆ立んとそ。千里の水行を遠しとせで。今日も這里ゆ来みけんを我が故をそ。其の地ゆ留めて又一役と課するへその忠誠の志を思ざるゆ似れども。其の議ゆ但我上のこうぐ。第一館の忠節ぞ。則その忠節ゆ依ぐ東人蚤崎主の志ゆ代るをぞ。其主の與ゆも忠ある義ぐその義をる思ひ我心へ因て再以るゆ汝經紀児ゆ打扮て那郎ゆ入ぐまくまるも。人の汲引ゆ據るゆあるねば門子們訝ぐそ入ることを允さでばべ。其頭の為ゆ究竟の東西あり。量裏ゆ調貢の金銀諸色を浪速の浦より運送の折。杳西が心と屬て。非常の備ゆせよかとぞ。遽與ぬ那家の水牌あゆあり。紀二六異日那里ゆ打

入ぐ。ぬる折木牌を出ぐ門子們ゆ示さば障りもあべくばぐ傷ぐそ。門子們ゆ量裏ゆ頂けるゆ那牌あるんとぐ出ねぐ聲悄まくまるも。人の汲引ゆ據るゆあるねば。代四郎ゆ有ぐと答ゆ果ぐ身を起ぐそ行李の内より件の木牌を出ぐ遽與ぬ紀二六ぐ受戴ぐ。懐へ突ゆて些ト身を退ぐて恭ぐく照文と親兵衛ゆ。詞徐ゆ答ぐ。宴ゆ御暇査ゆ毫も違ぐ。ぬん國許の首尾宜ぐを一日も早ぐ告稟ぐて。王の帰路の伴ゆ立んと思ぐのこそ。其ゆも増て両館忠節郎ゆ。仰示さぬ。御教諭の言の趣惶うゆ赤ぐも鄙語ゆ云瘦馬ゆ重荷過さる。今一番の大役心許ぐ。ひとゞも猶ゆ指揮ゆ従ひもてくんぐそ。代四郎ゆ欽ひぐ。今より後の交加ゆ誄一合さえそ相譚ふと親兵衛急ぎ喚禁ゆそ。吏よその義をいそぐとう紀二六ぐ今宵より別店ゆ逗留て我當黒ぐう。人ゆ知られぎの事成ら。且經紀児ゆ打扮ぐつとも本銭あぐぎ何を賣ぐ。先其金を取せんぎとぐゆを紀二六ぐまへぎ不ゆん國許を

退る折館樣より賜せ〻ん金のいへ〳〵その爰も忘ひ易うそん倘亦足こぶるもあらば姥雪
主ふ乞ひんと辭よを照文うち守て仰こび汝の深夜間ふ安く退るそ歌店を討よ
倘伴當們が那里舍くと問ひ我所要ふよりそ
の人共へて快よと諭せば紀二ふろる果て照文親兵衛及代四郎ふも告別こ是旦
契りて外面投て出ける是ふよる仕四郎ハ伴當們ふ明日の事照文ふの地と辭し去
親兵衛ハ將軍家の台命よる管領邸ふ旅宿と移を事の由と告て准備を
走べかれそ推續紀こ伴當の雜居の貸屋へ赴くべ親兵衛ふ赤果を贈呵要ふ心
のそれて獨燈の下ふ立退た客所をうち啓こ両家老東荒川〈晉達ぞ〉呈書一通
と七個の義兄弟へ回翰又犬毋妙真を尉ろ消息と共ふ都こ通を一要時の程ふ寫
果て一個々々ふ封皮と較奚是と照文ふ遞與して
憑こまもけこ両館へ義兄弟ら我上ふ疑べくもあらぬれと大毋ら女

流の智陝くてさる甚労ふ思られ又姥雪ハ知ろこぞ小紅郎ふ拇ら女性ふまべ
起ろ折宅着ふも告ぎり〻を惹ろとく今更ふ消息と寄をべくもあらば音音
老媼曳る單節もの意こるさをめくりと漏心めば照文點頭てそいるまぐも
る〻對面の折ふ老婦連を術よ慰めりんそ
事復も障尋のるた内ふ咱们ハ早天ふ立出て浪速へ赴て風待せん寢まのあひ寢
まべ〻とふ親兵衛再誂ふ及ぶ堂を連りおろ
儲こるそがこ倶ふ枕を就〻かど照文ハるも睡
るふ夥兵十名を半分ろこ親兵衛ふ隷んとらひ
くとも皆徒ふの処ふ日を弥らるこ事ふ益る〻強ふ
の〻非常の備を設くまべ咱们の姥雪ふ紀二六ろこの餘ハ錦奴鞋奴及柳笠鎧
櫃を持る着甲乙五七名を要ろ人足れり夥兵を要ろ〻と辭よを照文推返こそろ

とも這回の伴ふ十個の騎兵を肄られ〻ハ両館の御意ふかの期ふ及びく一人ざつの和殿の與ふ留措ぎハ那ゐ旨ふ違ふそれあり且正使の伴當のご至下ふ寡くうつぶ両館のゑ為ふ這頭の外聞宜ーからぎ今ごそ要る紀騎兵ごも後ふ用るとあらん歟是も亦知るべらぎ杜てその誌ふ任せあと詞を盤ー理と舒て騎兵五名をつふ留め我伴當と騎兵雑色要る紀奴隷を相従へく星斑る秘伝明時晨ふ親兵衛代四郎と袂を分ちく浪速を投ていそだーうぐの旦下晡よ速びて曇ふ歇て這浦ふ在せく舩ふち無るこ戒ねくけら然ば這海舶あ始よりーく残される奴隷と役夫數十名在ら折くら順風る下けれ〻鍼師笛ご仁欤び勇ごそ躯く鮮纜の准備とあっそ詰朝帆を揚ら東を投さ走ーまる末迥る大洋ふ平ふて看れども地上の風波定め争く始ゐ倶ふ来ーー人ゞ抑留られて獨立ち甘ら屋の松も遠離ら待ってゆ今一日も千年を過を心地せる照文へ只云ゞと慰難ー舫篷の離合時ある愛哀苦海ふ不娯ーち涯りるくりけり。

第百三十七回

能辯軍記を講じく餅を薦む
窮鳥舊巣ふ還りく巧ふ轉活

却説其詰朝已牌時候ふ犬江親兵衛主僕の住り居る客店へ管領左京大夫政元の士卒一十餘名鞍措さる馬ご牽ーー来て杳西主の指揮ふよろ大江殿ご迎ん為参りと喚ゐ〻執接の若黨ふ有司の書翰を遞與ま一ふ親兵衛是ご披ひ見て隨即代四郎を召てふそう管領家より迎の與ふ目今士卒ごおとされ〻ハ我伴當の要る紀も然ーーらうよび我居る那里の宿所を相届けぞい皆遅憾るらむ因て豊ご若黨騎兵ご五七名ハ那里まで送るともけーうあらー。遮莫思ふよりもあれハ鎗鎧櫃ハ持せぎーて急ぐの歌店ふ残し措くべ。何とそれが敷ふ武器ご推乃て那里ふ造らぶ今の世の人心我ふ用心あるふ似て忌む者もあん疑ひもせんごの装をそろゑるのひと諭ーふ衣裳ご更めそ歩く迎接の士卒ご労ひ那意ふ任ーて狗て来ー馬ご牽ごをさせて乗る程ふ代四郎若黨騎兵多ハ准備ふ果て奴隷の女ふ親

べる 兵衛の柵皆と約束を駈ふ。相従よて西陣多改元の郎ふ来よけれべ親兵衛ハ門前ゟ馬ど駐め降立て引れて内ふ找ど入りぬと奥まりて重屏ある儲の宿所ふ伴ほ登時ゟふ隷られる僮僕ハ遽く茶ど薦る程ふ両個の小吏ど前よりゟ歩つありけるが親兵衛ふ對面して姓名ど告り移居の速ろーど労ぶ在下ハ君命ふより宿所の預りふハべ何まれ欲しのとあらべ兼のみむ。況伴當ハいふぞやと問れて親兵衛然ハ他ハ猶舊のごく市店ふ別れ在まく欲ど要ふ況者毎ふハべ返ー遣ゟべうもとのふふ小吏ゟハ異説もふくそのゟも豫下知ありて旅宿ハ這里まれ那里まれ伴當ハの隨意せよと命せられてハべ便宜ふ任せゆとらられふより親兵衛ハ獨代四郎ど召登りて件のごと告示ゟふ代四郎ハ豫より有悳るべーとハ知りぬら快ら気思ふゟ却往るべふあら雨ハ兼りぬと應ハべ退りて若黨歩兵ハと共侶ハ三條ふ飯店へ還りけり然ハ件の小吏ゟハ日毎ふまゐり親兵衛ど慇懃ふ訪ひ慰めく寡君ゟ目ふ懸ゟる況よ観音寺の城郭征伐の軍談ふよりて

いまぶその暇ふくまも去の故ふ香西復六も倶ふ勤めくハべ疎濶ふてハひの何まれ欲りーゆの東西あくべ兼りハむ。ハ意ふく仰ぜられよとらのど詞敵ふるべくもあるねど程もふく身ど起して其ら頭どうち検西ろく隷僕の当忌れるど諜くあく罵徴ろーて。就の程ふら歩てもくめろ親兵衛ハ憶ぢも這里ふ歇宿ど穆ふーよろ那客店ふハ似るべくもあらぬ三飡の儲ハべ佗ろど茶ハ盧仝ゞ七碗ど薦て足れりとせど酒ハ酔中の八仙も知ざるど上昔とせる日毎の歓待ふゟ閑ふも及て改元の意衷の好ゟ料り知るべうもふ倒ふ欄踞々として楽まぢ那燕丹ゞ山鶏頭白くるまでとも我還る元時も日も豈あらんやと日莫春ふ祈るめろ慰難く單徒然ふ堪ざりけり。ハ程ふ代四郎ハ自餘の伴當と共侶ど親兵衛ど送着て故の歇店ふ還ろーよろ。只顧那里のゟそのふふくと恩難て纔ふ三四日ど過々。伴當ハ談ゟ中ろ天江王の権量錯ハて今更對面ど許されぞとも我先那里へ赴ねとそろ多人数ふて疑れて事の障りふらむ。咱ゟふ瀬踏ど任ーねとそろ多親ふ悄語ねて其の日政元の郎ふ赴ね

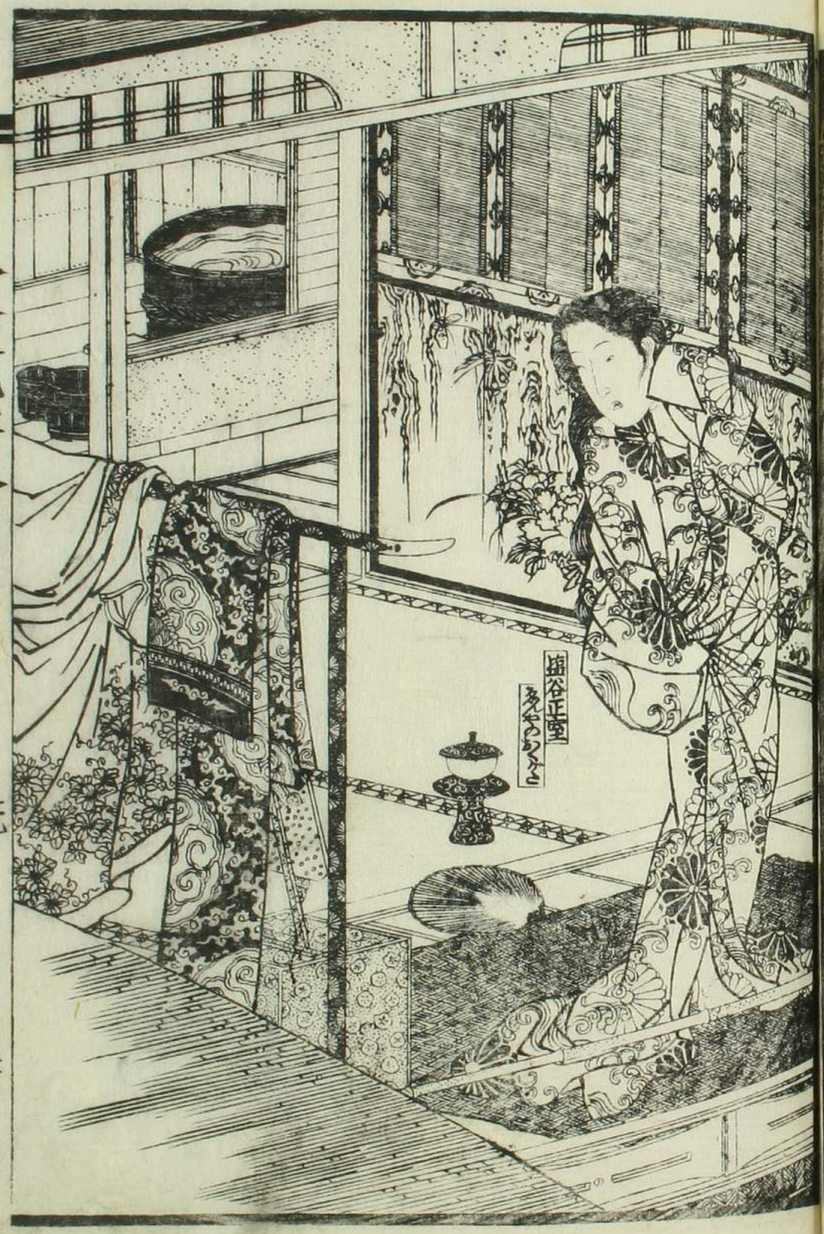
これら○門子們ふうち向ひて。咱ら○當所ゐ召置る○里見の家臣犬江親兵衛の伴當ぺ王の空舍を知まく欲しさふまありけと答ふ。そ儘找ぇ入らんとせしを門子急ゐ推禁めて。舍畸殿の伴當あれ本郎ゐ家法あり。親疎ゐ依らず木牌ゐ先着ゐ入まくまるこそ決して入れ參らまくまるとも。敢ゐさを木牌あらべと。く參ねと詞敬ゑく制ぇ代四郎听ゐ眼と睜りて。否ゐ咱ゐ東の行客ゐれゐ御家の法度をのまざる知ぇ縱ゐ其牌あらぎとも。往日親兵衛ゐ倶せられて。西三番當門内へ出入ぇ者ゐ。各位も然なりの面善ゐぞあるむぎろん。然とそも猶許しかくまも早く人を走らそよと。親廷衛ゐ告ゐ紛れあるべうもいぼと。口説くを門子冷笑ひて。烏許我們ゐ當所を守る是要路の職分ゐ。人の與ゐ提接を。充暇ゐ絶て。発めぐや已ねくと。嘗めて後去ぬ。応もせばりき代四郎ゐ困ぢ果て。今そ知りぬ犬江腋子の推量東して違ひが他の上のふく心許ゐ。いふまぢぇとなりゐ和田合戰の義秀うねべ破難けるその門の掟ゐ得横臆の下ゐ立つ王半晌許。只その上ゐ紀二六の做ぇ事あらんを。なるあまりぢ。とう殺く思ひえてても他ゐ那里ゐ歌求めけん。それもう尚

知るようもう。死事の不便ゐ立つ腹と。獻士て遂る二條ゐ旅歌ゐ路の川障りう。托ゐ而果しるかりけり。そのおきて。ひさうさぢろく。さ院てるまをとうえ。まろうゐ。宗下不題直塚紀二六ゐ。鄭高ゐ照文の教諭ゐ従ひ且親兵衛ゐ計ぇ受ぇその宵う五條頭の客店ゐ在り。二三日と經ぬる程ゐ准備既ゐ整ぇうゐ。小經紀児の摸様ゐ打扮て。肱嚢ぇ着脚絆ぇ穿ぇ。尺四五寸許ゐ販樞ゐ。館餅をヨく。雜貯て。搭駝ぇう。躰て改元の郎ゐ後門ゐ赴ぇ。門子們ゐ告ゐう。小可ゐ香西大人の老僕達ゐ由縁ある小經紀児でゐ。今番鋪倉ゐう移り来つ。いつでも郎へ立入りく。糖霜餅子ぇ賣まく欲ぇ因て賜りくる木牌のゐ在り。今よりぐ日毎々々ゐ出入の仕ぇべぬれゐ。乞目永くそれまうんとぇのぇ。尚ひなる。とのひく遠ぐく懐よう。木牌を出ぇそ門子們の身邊ゐ。遣ゐ。又遠ぐく果子盒ゐ餅を堆高く裝登ぐ。旦折乾と寫ぐる。一分許の金一裹ぇ。又懐よう。含ゐ出ぇ。悄地ゐ是を推薦めゐ。その笑ひゐ歎ぺ伝る悼りう。小可ゐ心祝ひゐぺとうゐ。門子們ぢ。笑ぇ含笑ぇう。木牌をそう。又金ぇ見ぐ。左右ゐく含ぇうぇ。ゐ中ゐ老る一人ゐ。紀二六ゐう向ひて。汝ゐ香西殿の内人ゐ由縁ありとそ。木牌さへ持るをいふぐそ。誰う拒

いれざるべからず。然るを某の人情の宜を要ずるを以て。柱て姑且預り置ん。木牌の沙の腰を佩て。
あらば。
賣買を果て退る折歩して。それば障るべし。餅の袋門よりも。内へ入ずして。門卒等が遮與ねかし。
餅の袋を。門卒に與ねと尊大げの頤で誨る方言。四國訛の抜けねども。脱歯を洩す聲敬て。柘榴の露欤。水
洟の落るを知らぬ風。當坐の免許。紀二六を阿唯々々と応を待。先木牌を受るより。腰の
佩て又遽く。脇を伸して。餅の盒をさし揚て。卸し。販樞又肩へ。登つるを揖く
腰を折めつ歩早ふ守屋の背へ赴けり。尒程ふ紀二六を計策既ふ成て。門戸の歩入自由を
得られば。則ち其日を初めて。足軽雑色奴隷毎の其隊ふよりて合居せる。大部屋小部屋を
うち巡りて。糖餅を勧賣るふ素より生活の為ぜざれば。殊ふ價を儉くして。本を減せども
數多く。銭をとる者あり。賒をして債りもせざるべく。誰も愛欽ざるは。日毎ふ他が来泊屋を
等て買まく思よもヨ。それば。一箇月も及ぎずして。親愛年来歩入毎ふ経紀児ふ弥増で。
ある時ふ晝飯の餘るを食歩く食せ。又あの時ふ茶を煮て薦め買る。他が餅を分ち食
ら。て。四表八表の空談ふ。林暇の徒然を慰るも勘るも。そ。中ふ一個の走卒の日諏説
經を好るあり。紀二六ふうち向て。和郎が近屢鎌倉より這地へ徙り来るとは。今那里ぞ
弄離を流る曲子と知らむ。什麼詞ふく吟せぞ。とのふを一個の走卒が推禁ゆ。不々。
咱們の曲子より。物の本を好れ。軍記を見ぞ。珍説いるぞや。何まれ語じるふ。語の字一
ね吟なほ。と詰れて。紀二六頭を擡て。否。小可ば俗骨ぞ。風流の技ふ疎ければ。曲子をンどもも
ぞ。只總角の比より。軍記を嗜て寝食と。思ふまでふありーけ。今の世ふ珍つる。
太平記ふ幾番も讀るかふ。それねども。近屢蜀ば。太平記讀と嘆傚ぞ。乞児さへあるぞれが歌ー
げるくかむ。とふ大家笑局ふ入りそ。开の真あるむ得意の條を讀ねくと促ぞ。件の走卒推
禁ぞ。我先ふ。あり。餅師。太平記ふ載られる。歌ヨりれども洒家々覚ぞ。
和郎詳ふそれを知るや。と問れて。紀二六然ン。那軍記ふ見えたる歌の先第二の巻の首ふ津
守國香ぞ一歌あり。是より下同巻ふ七歌資朝俊基の辞世の歌。この中ふあり。又五の巻ふ

五歌後醍醐天皇の笠置の御制裘の中ゟ在り又四の巻ゟ十一歌この餘備後三郎高徳が天莫空勾践云云の五言二句ゟ六の巻ゟ五歌七の巻ゟ落須一歌又東軍長崎工藤が連歌あり十の巻ゟ四歌十一の巻ゟ一歌十三の巻ゟ二歌十四の巻ゟ落須一歌十五の巻ゟ四歌十八の巻ゟ二歌二十一の巻ゟ新田左中将の恋の歌あり二十二の巻も一歌二十三二十四の巻ゟ各二歌二十六の巻ゟ四歌楠正行の辞世の歌後村上天皇の述懐の御制裘この中ゟ在り二十七の巻ゟ三歌二十九の巻ゟ五歌三十三の巻ゟ二歌あり三十五の巻ゟ五歌三十六の巻ゟ一歌三十八の巻ゟ二歌三十九の巻ゟ二歌四十の巻ゟ二歌あり通計八十有二歌欤ゟ他詩句四首と連歌あり。とゝ思へども暗記也。傲漏あーもいろむ。とのひつもゝその歌を曲々ゟ首より聲朗ゟ誦一示せゟ大家ひとゝく駭くまでゟ且感一旦愛反覆そ人いうもゝゟ却も這漢子の記臆のいと好さよ。然らば孰の巻ゝとも諳讀しそ妙甘ぎやとへ一個の後生がろゝ貌ゟ找ゝ出て爰ゟ

餅師よ我も亦太平記を讀て知りぬと艶るゝ師直が塩冶の妻ゟ揆想しそ那出浴姿倫見る條ゝそ堪られね覚てそゝむ甚麼ぞやと問れて紀二六然ゝゟ那高師直が色を好ゝく且驕恣る那里親紀苑女房を責威一姉ゟあゝ塩谷高貞の嫡室の浴一果る立姿を倫見ゐる條の文ゟ倣ゝそあり是ゟ妙刀自せとのひゝく高く唉ゐて只今ゟの女房妻ゝ塩谷が湯よりあがりけりと見えそ紅梅の色殊るゟ氷の如くゝる練貫の小袖のまゝりくとあるを極取く濡髪の四く〳〵長くかゝるを袖の下ゟ焼をさゝゐる虚焼の煙殻香ふぐりゟ残りて其人ゟ何處ゟ在らんと心ざゝくゝあゝ成ぬが巫女廟の花ゟ夢の中ゟ残り昭君村の柳ゟ雨の外ゟ疎る心地しそ云云と讀程ゟ這部屋の小頭児るべ一羊ゟ五十許ゟ髪斑ゟ白く童束束面皮るゞ故ゝる白章の草袴の裾伸るを下短ゟ穿做て涅染の布の外套ゟ大ゝゟゝ孤化騙ゐるゝそゝ被の腰ゟ藤柄の両刀を跨へゐゟ細竹の杖を曳ゝ遽一げゟかゝ来て四下ゝ見かゝ聲音ゟ兵毎るゞそ鍬そ磨ゞ敗吊腿の緒そ綴らゞ戯言ゟ日そ銷もそゝゟ笏ゟ上様義尚をらゟ。



太平記巻の第二十二高師直塩谷高貞の正室の出浴を偷見る處

○文溪堂藏

かう觀音寺の高頼主を御征伐の風聲あるゆゑ武具足ども爭ひ求めそと窘る鶴の一
唳喈々たる雀躍る竹牖の簫すの下人皆退屈く快樂忽地醒ゆけり然がの日の佐れども
紀二六を件の毎ゆ漸々ゆ親くる隨ゆ罕くとなるゆ秘事洩れて這回政元が俘りく將
軍家の台命とそ犬江親兵衛を安房へ遣さむ賸伴當と歇宿とりそ那身一個を
這西陣る邸ゆ抑めて久く做れるまゝ是叶はあるまじと向で具ゆ知りけり幷とのゆゑ
と原るゆ曩ゆ結城を追放せられ逆正寺の悪住持徳用ハ則是政元の姆母子ゑ父ハ
香西復六ゟけり初故管領勝元の獨子る政元の生れ時復六が妻初乳ゆ召れて遂ゆ
姆母ゆなりーゞ政元と徳用ハ俗ゆ云乳兄弟ゆて當初他ゞ乳名を二六郎と喚做ら具政
元と同庚ゆて五箇月許の兄なれば其子二六郎ゆ再乳母とゆ者を隷て母の子ゑ子類
る隨ゆ二六郎ハ主君の後堂の局ゆて公子と同樣ゆ成長りぬる果報あれゞ稚ゑ時より心
驕りそ人を人とも世ゝ癖ゆ十一三歳ゆ及びてハ膂力衆ゆ抜出て武芸藝を好と酒と嗜て醉
時ハ猛く勇めるそゝと主るけ勝元も他ハ必萬夫ゑ當の勇士ゆそなるべ
けれどゝ最憑ーく思ひゞ外日ゆ懲ものとゑ忌憚らで己ゞ醜る
進止ヨヌるその故ゆ同從潘る近習外樣の充當黨若黨雑色奴隷婢女炊婦ゑ雲悟
るまもるゆ誡るもヨくて悄地ゆ歸けて悪少年とのゝ者ゑ召るける有徒一程ゆ二六郎ゑ羊
十四ゟ一春二月の時候主君勝元の公子政元ゆ俱せられて山嵐山の花觀ゆ出ける折大
堰川の上ゆ憶らく時の関白藤原持通公の清涼寺へ詣ゑゆ御車ゆ撞見なり頻細る
る母よりそゝと伴の母と聞諍ゆ逮びゞ政元の俘當ゟけ老當黨の敵ゑ憚ら士辛制
そこ其里を外そ公子を諫め路次をのそで早く歸館ゆ赴ゝよ獨徳用の二六のゑ主親の威勢ゑや
負をけんその身の武藝勇力を顕さんとゑ思ひけん踏住の連ゆ找そ狼籍ゆ及ぶ程ゆ矢庭ゆ
摸家の人々を或ゆ蹴仆ー殿伏せ雜掌二名ゆ痍を負をる程ゆ猶且一個の牛飼仝ゑ人ゆ斃る
れて即死あるゟけりあれば玉二六郎ゆ外の援の兵召けれゞ卒ゆヨ勢ゆ捉籠られ筋力衰へ勢ゆ窮

二六郎醉狂
桃家の從者
と力戰を

二六郎

○文溪堂藏

其の子の與市の勝元が歎訴に依て既に死刑に定められしを他の牛飼舍人の宅に着ゐ〻く黄白を餽りて他の死罪に宥められ出家に做し死者の菩提を弔ふと約束をして解き計策をもて勝元も亦二六郎が其子政元と乳兄弟の因あるとて愛する心淺からねば室町殿義政に密訴して他が命乞の詞を被さゞるやう願稟けり現千金を子が市の葉られを借る内外の郎助ふより二六が年十五未滿の若く宜く出家を遂させて死罪を免あべしと公武一攬の裁許をもて二六を宥めされて祝髮して度牒を賜り法名を德用と喚做せ權且父の香華院に在り然けれども阿容々と京師の寺院に住るべき親の與ふ外聞宜あらざれ且公家を憚りあれば父復六計ひて法緣に就ん下總の結城の遠正寺へ遣して住持未得の徒弟ふあそけり是よりして復六が德用が衣料坊料盤纏其の母の餽り遣

賄と匿しかば德用が沙弥なる時より師兄弟の方外酒茶の友ゝかり有徒一程ふ故當國の守護代結城氏の滅亡とこの年まうち歎く舊臣殘黨計誅を旋ふ心二の乱離ふ時を待て先君氏朝の子なる成朝を冊立て復城ふ據ら地を略し再興の功成りかが室町殿義政へ告まうそ用ふ京都の管領勝元の家の權宰なる香西復六時長が愛子を勝元の嫡子政元と乳兄弟の因ありこの年今參室町殿へまゐる使ふ這僧ふ優ふ似者ふ衆誅既ふ一決と隨即德用ふ結城の舊臣二両名相副ゑ東西ゝ京師ふ遣ふ果して德用を捕父を室町殿許容ありて即使成朝君臣の舊罪悉免の御教書を德用ふ渡し賜り其家再興障りなく君臣素懷を遂ふ成朝則その賞として遠正寺の寺格を推登し別ふ德用ふ坊料を取せ且金銀ヨゝく與る其後住持未得が老を告て退院せまく欲ふ折德用ふ寺主ろ兒器ふあるねども前功ふよりて羽振宜しければ等順清白の守えの景西等を退けて德用卒ふ逆定

寺の住持ゝ做りーまゝ以來萬事已ゞ隨ゝせざることなく、或ゝ武を講ー力技を好ゝ行狀出家ゝ似ず相応ーかぬゞえれども成朝君臣自餘の檀越も他ゞ前功ゝ思ひ易て許ー年來ゞ歷る程ゝ今茲四月中旬、大法師ゞ宿願ゞ果さんとて結城ゝ赴く喜ばしさ古の古戰場ゝ先亡ゞ追薦の大念佛ゝ供養ーて結願ゝ了まる日德用是ゝ醋く思ひ、同惡の衆徒ゝ招聚へ、剩結城の二騎臣長城端利堅名經稜根生野素頼們ゞ浮ー立ゝ出ゝ、大並ゝ七大士ゞ擒捕まく欲ゝーゝて那身ゞ生拘られて破戒の罪免るゝ方なく成朝主の沙汰ーてオ命ゞ助けー、彼ゞ徒弟堅削們幾名ゞ兇徒と俱ゝ結城ゞ追放せられける這一條ゞ既ゝ前冥具ゝ記ゝ看官通て知れるべーゝ介程ゝ德用ゞ投て往方ゞ舊里なる親よりゝ外ゝ住る時世ゝ憑ーと思へ、同憂相憐む堅削をのゞ伴ふて日ゝ歩ゞ夜ゝ宿り辛くして京師ゞ至ー親香西復六ゞ宿所ゞ造ー對面ゞ請て已ゞ上ゞ報知まゐるゝ、眞實ゞ六ゝ思ひけるゞ我ゞ訪れて訴りゝ、躯ゝ閑室ゞ召入れーゝ來意ゞ委ゝ聞ゝ德用ゞ

然ゝ兒徒ゞ妻ゝ、一個ゞ徒弟さへ伴ゝまて物ゞ思せまじきゞ、況ゝ德用ゞ、あゝ抑我寺ゞ大檀那結城ゞ總の新判官成朝ゞ傲慢短處ゞ猶好ゝ、ゝて那家再興ゞ創ゝ亂政非法ゞ勘ゝ、剩近屬ゞ安房ゞ里見ゞ世ー合ーゝ、謀反ゞ企ゝ、故ゞ今茲ゞ春ゝ、大ゝ吸做ゞ一個ゞ賣僧ゞ里見方ゝ赴ゝ、嘉吉ゞ古戰場ゞ葬ゝ締ゞ先亡ゞ菩提ゝ唱て百日ゞ念佛ゞ執り行ふ程ゞ里見ゞ士卒二三百名來會ーて是ゞ資けゞ結願ゞ朝ゝ、米錢許ゞ施行ゝ、ゝて貧民ゞ哄誘ー我寺ゞ奪取ゝ、大ゞ住持ゞ做ゝ欲ゝ他們ゞ奸詐虎狼心ゞ天知ゝ地知ゝ人ゝ知ゝ世ゞ風聲ゞ隱れなけれゞ兒ゞ、ゝ弓ゞ、ゝて歎ゝ、ゝて城主ゞ許ゝ道理ゞ演ゝ、ゝて諷諫ゞ詞ゞ盡ゝ、かゞも成朝ゞ怒ゝ信容れゞ、越ゞ結城ゞ三忠臣長城堅名根生野ゞ、ゝて諫難ゝ已ゞ、ゝて、ゝ隊ゞ做ゝ、ゝ者俱ゞ、ゝ主君ゞ、ゝて諫難ゝ已ゞ、ゝて、ゝ大並ゞ里見ゞ士卒ゞ搦捕まく欲ゝ程ゞ我寺ゞ屬ゞ蜀院ゞ法師們ゞ、ゝ法緣ゞ、ゝ、ゝ催促せられて共ゝ向ゝ、ゝ守ゝ、ゝ兒ゞ、ゝ、ゝ衆徒ゞ制ゝ為ゞ、ゝ這堅削ゞ、ゝ

東都 曲亭主人編次

第百二十回

士卒弔眉ーて自家を防ぐ
餅書教ふ因て秘密を告ぐ

登時亦堅削も徳用が詭譎の逆まるを拾ひ足ざる補んとそ勝を找めて復六ふうち向ひて目今師父の稟され如く結城が非道乱政ふる暴虐ふ師父の庇ふ倚て那家再興の欺びあるーの恩を受て恩を思ふ惟成朝のまうぞ家の長ふる朝重ぞが心鳥ゆも獣ゆも劣まると爭何ぞ其縦追放せられぞとも危邦ふも居るべうぞ寔ふ浮世の栄枯廉辱今ふ創ぬとふが是も菩提の種ぞれいでや深林幽谷ふ芥ふを締びり汚ーて二ど塵ふ染ふまじと思ふまうふ師恩を外ふ倦ふ時憂を分ふで身單の往方を定むべきあるねが銭ふて路遥ふ逆旅艱苦の伴ふ連て送届けまあらせんそ身の暇を賜るべー

伴ふて只得後より赶々ぬるーふ、大ふ左道の幻術あり且那里見の士卒の内中ふ大ぞうそ氏と做ふ七八個の勇士ありて幻術力戦両ふぐーふ人意の表ふ出ーらば憐むべーと忠臣長城堅名根生野ふ隊兵と共ふ命を殞ーて我寺の衆徒勇僧も或ふ斃され或ふ赤生拘られーもヨヌるふ成朝及家の家臣小山朝重もい尚醒ざよくこと大ふ尊信ー那大士ふ罪ふぐで反て我身と堅削衆徒ふ破戒ふ慙の罪人ふそ惨酷牢獄ふ斃ふぐーかども曇裏ふ那家再興ふ舊功あれば殺ーもうせざ法衣を剥奪り笞ふ中て竟ふ追放せられう昔法然及親ふ鳥日蓮の三名僧もう弘法の為ふ罪ふらぬ罪人ふぐーよう或ふ白刃の下ふ命危く或ふ配所の起居ふ艱苦を凌ぶひて志誠を照ふ天津日の光と倶ふ厄解て末世の祖師と崇らる今の我身も似ぐうえんと詞巧ふ非ふ飾ふ良将名僧智勇の殿員士ふ証言涯りふらけふ畢竟徳用が詭譎ふ欺ふれて後の話説甚麼ぞや开ふ又復下の回ふ解分るふ聴ねかー

南總里見八犬傳第九輯巻之二十四終

とらひら胡意歎息して理のさる虚言も時ふ取てふ此糸の朱そ奪又可るそよくも思へ
ば復六を叱ら忽地悖然さる奴心面ふ顕れて开ふ安らぬるふとそあれ結城里見ふ謀反の椿
事ふ口世の風聲のそふーて正ふ証据あるふあらびふ許まりさけれども氏朝季基以下の
先亡その士卒ふ至るまで皆是嘉吉の逆徒ふれば羊歴ふるとも追薦供類ふ是慚るへ況
や多ふ何ぞや隣國の僧俗を招ふ取合てその堂ふの施物を羞ぢ反て那家の香華院
る住持を逐ふく欲せーふ京鎌倉の少そを思ふ成朝さふ傲慢非礼の底意も推て
知るふ足ねり好らその誤ふ且く措て徳用ど田舎法師の做果さるの惜ねーふ罪るくく那
里を逐れふ是物怪の幸ひと我眼の黒ねん程洛中洛外一二の名高無る大刹の住持ふ
做て紫衣僧綱の顕職ふ推登され玄田舎院る逸足寺ふ勝らぶふ是ふ就ても感ふ思へ
堅削御坊の老実る徳用が法眷のさぶる結城ふヨヲりけんよ今の時ふ従ふ者うくロハ
是和僧のそふく孝順賞るふ餘りあり山居の樂ひい然るとうぶる倶ふ這里ふ住て
栄えその師と同くせぶ陰徳あるく陽報玄ん後の恨るふべ然けれども事情えるく知る故
京人の口ふ絶て戸も鎖れぬ権且倶ふ屏居て外聞ふ避るふあり。ふの芝をあろるあひと叮
嚀ふ慰めて在奥る離亭ふ徳用と堅削ぶ子舎と一定め并里ふ居ーて新紀衣の相応
あへをヨヌく含ふ出く分ち取せ日毎の郷食饌好をふ儘ーて管待賓客ふ似れども一家児る
る奴婢ども徳用師弟の噂をまるとふ特ふ緊く敬言これば是を知る者稀るけり。ふるふとの
時徳用が母ふ世を去りく既ふ年来ふるりるく父優ふ両個の側室あり又徳用が弟もあり。ふる
父復六の妾腹の三男ふて。香西再六改景と喚做さるぶ君命ふよろ宅着ふ称て本貫阿波ふ赴
く。年来京師ふ在ざれふの玄ふ知ざりけり現人の親として其子の玄を知ざるふ通てふ世の
習俗ふれば復六を口管ふ徳用が佯誰の片言を信容て送恨遣る方ふ隨ふ次の日玄の改
元ふ件の事ふ顛末ふ箇様々々と密訴をそゆけるに隨ふ告ーらば改元敬駕ふ且訴りて余らぶ我
徳用ふ對面てふれも具ふ听くぶ玄ん白晝真ふ憚らふ玄ふあるねば日暮て相伴ひまあのねといねて

復六怡悦ゝ堪ず。宿所ゝ退て件の便宜を徳用ゝ耳打ス。當晩俱して參りべく改元則徳用を閑室ゝ召入れて先茶を賜ふ。果子を賜ふ。徳用ゝ父ゝ告る那伴誰かある再按の趣を畫一ありとふその事の顛末を云云と問ふゝ徳用ゝ父ゝ演て結城里見を諮ふと酷く言果て又ふ曰ふ他ゝ逆謀ゝ偽ありそらぎ證據を以ざれども天ゝ口なし人をして言ふ古語あるべ相違あるべくもいざ倘二葉ゆて斷ざるべ斧を用ゐの患ひあり。鎌倉の両管領へ征伐の弓を命せられるべ御後悔多ふべし。その甚だ麼と哄誘せば政元一霎時沈吟して和僧の意見も所以あるかなれど応仁以來諸國乱れて陵夷皇都ゝ逮びゐ干戈ゐ倥偬く理のて都鄙皆安堵の今ゝ至れり幷ゐ只風聲ゐ據るのみて結城里見を征伐せば東國是より又乱れて民復塗炭ゝ陷む。倘ゝ征伐の一條へ他ゝ旗を建るゐ及びて是を伐ども遲ふらざ姑且度外ゝ措たのみ和僧の上を我が與ゐ乳兄弟の因もあればいざ皇都の大剌へ移轉の便宜を計りて入時を窺ふこそよろめれと慰られて徳用の心ゝ諫ん実事をうねば陽ゐ寛仁大度と稱を餘談ゐ短夜深ふけり是より後も政元ゝ時々悄地ゝ徳用を召よせて下總上總の風俗人氣の好ゃと尋問ふゝ徳用是ゝ又便りを泊ていふ結城里見の両君臣を識ると酷く具堅削が已ゝ従ふてよの地ゝ歩を移すとの心ゝ做ていうでも有ゝけさせぬへと只管落め悪ゐべよの後又政元ゝ堅削を召近着て夜話の陪堂あぐをりけり抑政元が法師そもそも陪堂ゐまうへ年来外法を修ぢれべよの故ゐ政元の敢女色ゐ親ぢ然べそもそれ啓事ようる妻をもうる子もあれば政務の暇ある折の樂種ゐ做もべーとそ今出川亞相入道義視卿の縁ゝの妾服の姫上の其名を雪吹と喚れのよゐ母いと賤ーかれべ妾ゝ御子の内ゝ數多入られのでその母の里方ゝ寓ゐ寄て在ゐーを政元聽て養ひとりて己が女児ゐ做ーまゐらせ光若の女房数名扶冊傳て深窓の下ゝも鞠類せようけるが今茲ゝ十六歳ゐるりのひけら然べ這姫上ゝ容止の美ーを二月の花ゐ擬ふべく又肌膚の清ゐるゝ仲秋の月ゐ似ちゝ一さび笑べ城を傾けつべ笑べ

文溪堂藏

糸 くすし ひと 医を傾ると唐山人の物を寫あーも 倦 おこたり と思ふ 惜むべし ヨヲ病 やまひ 老 おい 帯 おび お 重積 かさなり の患 うれへ あるうち 臥 ふし と 来 きた あ 日 ひ も 屏居 へいきょ て の 在 あ ーク 改元 かいげん 半 なかば が與 くみ の甲乙 こうおつ と 對 むか を 擇 えら なかれ 意 こころ 稱 しょう ふもあ ーぐ 且 かつ ヨヲ病 やまひ る 故 ゆえ ふ 痊可 なおり の 析 せき を もちる べ 有 あ 徳 とく ー程 ほど お 雪吹媛 ゆきふきひめ ふ 給事 きゅうじ も 女房 にょうぼう ら 們 ども の 頃者 このごろ 徳用 とくよう 堅削 けんさく が夜々 よなよな 君侯 くんこう の陪堂 ばいどう お 召 めし れて 加持 かじ 法験 ほうけん の 灼然 しゃくぜん 言 こと の趣 おもむき を 知 しり そ うち 聚合 つどい て 商量 しょうりょう もそ ー く 那 あの 師 し の坊 ぼう と 言 いう 乳兄弟 ちきょうだい る 因 ちなみ あ ー う ー へ 姫上 ひめうえ の病着 やまいつき お 加持 かじ を 憑 たの まば 験 しるし あ ーん と 云女流 うんにょりゅう の衆議 しゅうぎ 一決 いっけつ あれば 冊傳 さくでん の老女房 ろうにょうぼう 件 くだん の衆議 しゅうぎ の趣 おもむき を 復六 ふくろく お 告 つげ て 願 ねがい 亭 ちょう お 改元 かいげん 素 もと より 修法 しゅほう を 好 この 者 もの 多 おお べ ーと 許 ゆる ーけり そ て 徳用 とくよう の雪吹媛 ゆきふきひめ の持病 じびょう の發 おこ る 毎 ごと お 堅 けん 前 ぜん を 領 りょう 寝所 しんじょ お 近づ 寄 よ て 加持 かじ し て 徒夜 よもすがら と 守 まも る の 験 しるし あ べ くもあ ーざめれ ど 咒法 じゅほう の暇 ひま ある 析 せき お 堅 けん 前 ぜん が 江湖 こうこ の浮談 うきだん ー そ 女房 にょうぼう 們 ども の笑 えみ を 取 とる 辰 たつ の 日 ひ の 夕 ゆうべ と 薄 うす けれ 雪吹媛 ゆきふきひめ さ へ 慰 なぐさ められ て 保養 ほよう の一助 いちじょ 為 ため の 音 おと もあれ が 女房 にょうぼう 們 ども の 感信 かんしん ー く 只是 ただこれ 徳用 とくよう 堅 けん

削 けず が法験 ほうけん を 見 み とい ふ 名 な の 改元 かいげん も 亦 また 欽 うやま び て 隨即 ずいそく 件 くだん の 咒僧師徒 じゅそうしと の布施 ふせ 多 おお く 取 とり ちら く 信 しん あ 愛 あい そ うけ ける 分程 ぶんてい お 秋八月 あきはちがつ お 至 いた り て 安房 あわ の里見 さとみ の使者 ししゃ 犬江親兵衛仁 いぬえしんべえまさし 蚕崎十一郎照文 かいこざきじゅういちろうてるふみ と 喚 よば る 做 なぞら ふ 貢調 こうちょう の金銀 きんぎん と土宜 どぎ を 載 のせ 韓樓 からふね 挽 ひき 齎 もたら し て 水路 すいろ 泝 さかのぼ り 京都 きょうと お 詣 もう で 里見義成 さとみよしなり の 家 いえ の勇臣 ゆうしん 八個 やつ の犬士 けんし の氏 うじ と 姓 せい と を 請 こう ける と 守 もり 冨 とみ 義 よし 実 まこと 我 わが 結城 ゆうき お 那犬士 かのけんし 們 ら 虜 とりこ せ られ て 能化 のうげ 廢院 はいいん お 在 あり ー 時他 ときた 們 がら 衆議 しゅうぎ 門談 もんだん ふ ようそ の 姓名 せいめい さ へ 人 ひと と 為 な の さ へ 側聞 そくぶん し て 具 つぶさ お 知 しり の 我身 わがみ 一旦 いったん 生 いけ 拘 とら られ る 寃家 えんか の犬塚信乃 いぬづかしの 戌孝 もりたか 犬江 いぬえ 當 あたる 敵 かたき ねど も 那奴 あやつ 左右川 さうかわ の上 うえ を 長城 ながき 枕之介 まくらのすけ と 艘 ふね を 拯 すく ひ 孤 こ 孩児 がいじ 俱 とも に 那奴 あやつ 等 ら の 今我 いまわれ が 這里 しゃり お 在 あり る を 知 しり ら ず 死地 しち お 入 いり ー へ 妙 たえ なる 哉 かな 天 てん 意 い 衷 ちゅう を 示 しめ ー て そ の 後父 ちち お 密談 ひそかにだん あ ー 有一宵 ある よい 悄地 ひそか お 改元 かいげん 件 くだん の意趣 いしゅ を 告 つげ ら れ ば 召 めし ぬ や 今番 こんばん 里見 さとみ が使 つかい お 達 たっ て 参上 さんじょう の 那犬江 かのいぬえ 親兵衛 しんべえ 猿勇 えんゆう 宇宙 うちゅう お 倚 よ 罕 まれ なる 悪少 わるがき 年 とし そ め 抑里見 そもそもさとみ の勇臣 ゆうしん お 犬 いぬ と 呼 よ そ 氏 うじ ら せ 者 もの 甲乙都 こうおつすべ て八名 やたな あ り 就中那親兵衛 なかんずくかのしんべえ 年 とし

ぶ者ら。あれんまそう。者ども。
ちく武術ふ老。る修煉至妙のる段あり。そとそ。
今茲の夏四月結城よう程遠くる左石
川の上ゑ城主の忠臣長城惴利ク一隊の士卒と。
叙ふて。剰へ人馬共倡ふ擒抓て川へ放
下ちー本事ハ拙僧見て知り。然バ里見が叛逆の計較ハ則是ハ太士の郎助あるよう之
寧今那親兵衛を計て罪ふ隋れ。結果けめ。
勢ひ是より挽むべーよ。毋く計ーせあゑ。御後悔のやいうでくと。悄ゑて連り。蓼ゑて已
ざりーを改元吁ん。頭を掉て和僧の意見然いもあべ。ふ。ゑ。里見の謀叛ハ倡ふ。ふ。ーく證
據る。今見る所。聞所忠臣ふ。七上を敬ひ禁裡並将軍家及我ハ。ゑ。貢進の礼
漏ふる者ら。生の姓氏を請ちるを許さざーてそ。その使ふ罪ふ負ーて。誅殺せバ東國の諸侯
解體ーてなく武命ふ従べうバ是と思ひ。ふ。
仁御大度然もそふ思召ゑべ姓氏の一義を許
抑置て京師の王ふ做ーあらバそれ将里見ふ折損ある虎を放ち山へ返ゑ婦人の仁ふ似べ
改元沈吟ー且領ゑく我ふ亦那大江親兵衛ハ少年ふーて大事の使ふ遣られしをのく必是後傑
るべーと猜せざるふもあねども然いもそふ武芸勇力の千萬人の敵ゑるとふ本事ハ信ー易うぎ。
卒然ーバ将軍家の台命と唱哄ーく他を我邸ふ招ー留め這頭ふ名無ふ武人力士と試験ゑ成
ふーその勝劣ふ儘ーて後の進退せ然バ親兵衛ふ本事ふ如くふ衆敵を
須ーゑバ只是自業自得ゑ里見も死ふ由ふる係べ。倘亦親兵衛が本事ふ如くふ衆敵を
折ふ足ら。実ふ蓋世の豪傑ゑ。ふらん。我里見ふて高禄ふふく家宝ふ其。孰の方ふも損ふる。
枉てふの説ふ儘せふかーと解れて徳用尚飽ども用ひ。ふ。ゑ。
感服仕ふ然ーバその試験ふの敵ふ。ふ拙僧ふも加ゑゆ。ふ。ゑ。
人ふ譲るべうの思ひふゑ。と誇れバ改元笑顔ふて。開ふそ。
晩の密談ふ果けふ。偖而改元計ふて親兵衛ゑ安房へ還さゑ他ふ宿所ふ徒ふ。ふ。

ひとまづさり當を遠離ゝへ伴當もまた勇卒智者あそ這方の機密を洩さゞる主を資助て脱去るゝもあらむと陥そ僕のどふ計ふ程ふ子們ふも悄地ふ下知あ。親兵衛が伴當の市店ふ在る代四郎なふ主の安否を問んそ來ぬるを緊ふく制めさせて決して内へ入れざりしも是皆この密意あれゞ這時侯又德用獨悄地ふ思ふやう我ゝ主君をゞふ蔑め凛して那犬江親兵衛奴を厭く結果んと欲ふ主君愁ふ遠慮あそその事思ふ如くふらざれども試撃の計ひ是切ての喜ふそ那奴が命を断んの人ともせ我を裏ふ在ゝ怨を復ゝまゝこの時ゝとみづから負そ父復ゝふ告て猛可京師の鐵匠ふ鐵の鹿杖の重六十斤ゝ作りまさそ准備巫ふ整ふ程ふ亦復思ひ旋りせば京家の武士ふ武藝勇悍親兵衛が敵ゝふ足る者五六名ゝ易ゝて是ふ加ゝれ我あまた萬ふ一も失ふじと思ふゝ氣味好ゝふ曇裏ふ左右川を那奴が挿遠目ふ相てふ目覚かしふ況能化院の三門ゝ隻ゝを推倒さんとする勁力ゝ給と云侮ふからず敵を勝負ふ時ゝ氣運ふ在ゝ倘試撃ゝの折御ゝの諸勇士我ゝさへ不測の失あば主君必親兵衛ゝ

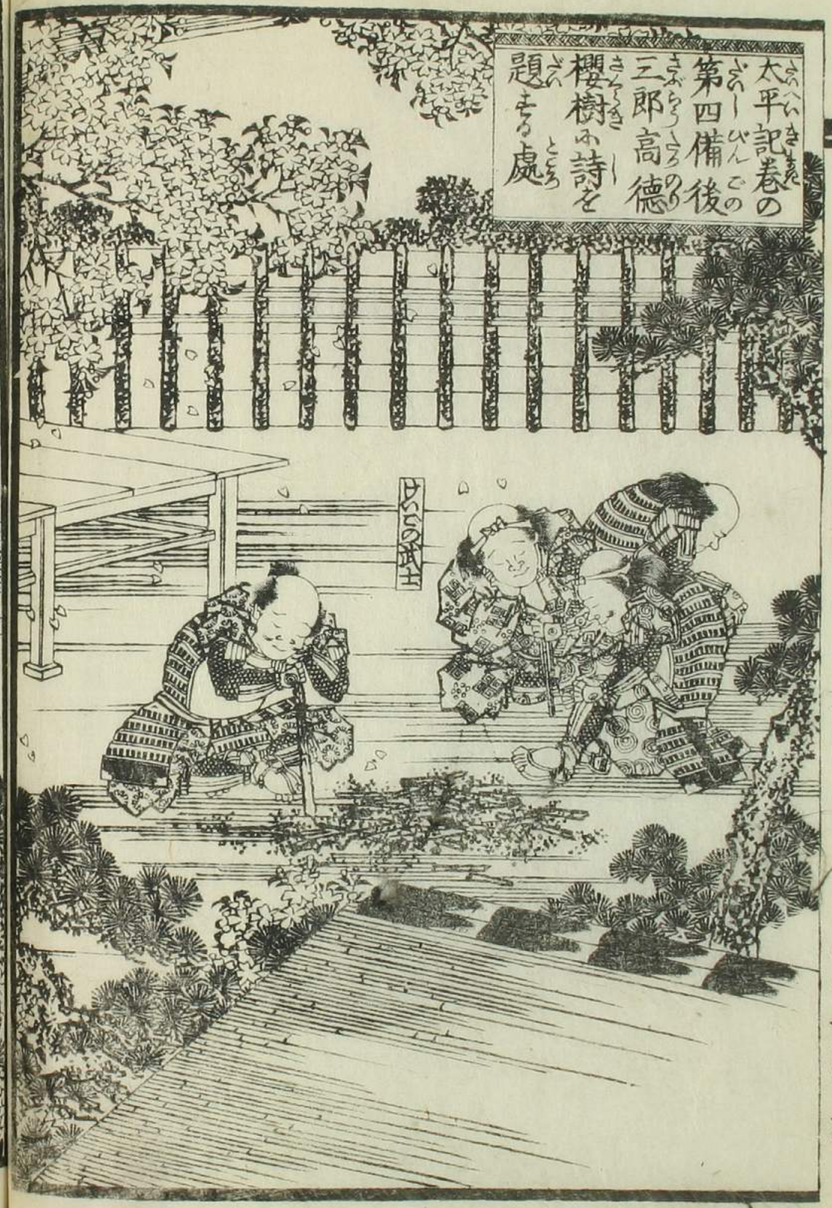
惜ゝ命放さで高禄ゝもて家臣ふせんと倘その田地ふ造ゝ部語ふふ賊ふ糧を亦則を一期のふくられ不覚何の目ふ怨を復ゝ危を試撃ゝの目をゝんとゝふ刀ふ結果ゝ是第一の捷徑ゝ後の患を除くふ同ちまゝころどゝも父復ゝふの秘ゝて告ゞ堅削ふのゝ書恩束ゝと示ゝそ其次の夜更闌時侯堅削を伴ふく情地ゝ親兵衛ゝ宿所へ赴くふ各掩膊脛衣ふ身を固めそ戒刀を腰ふ跨ゝ鳥ゝ覆巾ふ面ゝ裹て雙眼ゝのゝ曽ふ頭ゝ布の縞附ゝ戦鞋を穿ゝ做ゝ准備ゝ毫も透あらず既ゝて親兵衛ゝ宿所ふ近ゝ塀を踰ゝ庭門ゝより潜び入ゝそ壁を穿ゝ隙隙ゝと房ふ那里をんと思ゝへ左右ゝく找難て坐席の障子すふ告ゝそ濡ゝて細小ゝ孔ゝ敫を穿ゝて奥の方ゝを窺覘ゝふ豈憶ゝらや親兵衛ゝが臥房とおぼ仏隔亮の這方ふ究竟の士卒十五六名ゝ各器械ゝ側ふ引着ゝて端然ゝとゝ夜ゝを戒ゝそ在ゝ。あの呆ゝ德用堅削ゝがゝまゞ知らざる所ふ改元ハ蜂ゝと倘親兵衛ゝが機密ゝを悟ゝそ脱れ去る宵のあゝんとゝそ悄地ふ究竟の精兵十五六

名を夜毎ゝ他が宿所ゝ遣ゝ他が枕ゝ就くゝゝ及びゝ臥房の邊を成すこと一宵も間斷あらざれば天の明るんとする比及ゝ悄地ゝ出ゝくゝ親兵衛をゝ是を知らざる況德用堅削をゝ思ひかけざる事の光景ゝ呆れて頭を擡ぐまでゝ計較虛ゝあるべけんや。その夜口ゝ退去りゝが猶幾番も來て張つゝ戍兵の隙ゝうかゞひ窺ふと思ふて又虛負して兩夕を經て又潛ゝ忍ゝ陰戍の士卒ゝいかの朝親兵衛が宿所の庭の板扉ゝ人の泥脚の跡印して壁さへ毀ちゝ去りぬれば必是大江が伴當ゝ同兒の術を以ゝる者主を幇助て今ま來れるぞと潛び考ふるまでもなくゝゝ倘奪れざる我々が後難孰ゝ免るべけん今宵とゝ人を增て外面とゝ戍るべしと大家風ゝ商量ゝ乘てその戍の地を易られども親兵衛ゝ知れりとゝ憚りて物の音もせず咳ゝをもゝ袖ゝ包こゝ悄々地ゝ宿所の四下を窺ゝ時ゝうち更ゝ夜ゝも闌ゝとき竊ゝ忍ゝ出ゝ何ぞ射ば射方の與ゝ倦まで妨げざるやは是も亦世の常言ゝ云ゝ難言ゝ又ゝ借ゝ似ゝ鈍や朽惜ゝ使ゝ一とゝ嘆くのこゝ術なければ又阿容

阿容とかゝ去程ゝ德用が其ゝ曉ゝ今けゝ思へゝ刺客の術ゝ心得たる所ゝ於ゝて勇者の本意ゝあらざれゝ權且他ゝ命を貸て試載の折ゝ我一棒を喫して往生させゝ今宵ゝ限るとゝのゝ堅削點頭て然ゝ師父の勍力武藝ゝ過ゝ親兵衛の上ゝ出ゝ旦最晴ゝ多ゝ試載の折ゝ我一棒を喫して往生させゝ今宵ゝ限るとゝのゝ復ゝ潛ゝて潛び寄て寢首を捕るとゝ猶愉快くゝゝと悄ゝゝ慰めゝて德用ゝ命ゝ勿論々々世の常言ゝ云ゝ脚ゝ疲らして已ゝ宿所ゝ遂ゝけゝ抑ゝ這裏條の顚末ゝ秘密の中の極秘ゝあるべゝ人の知るべきにあらざるゝ入りゝけん誠ゝ古語ゝ云ゝ隱ゝるゝ明ゝるゝ微ゝるゝ明ゝるゝ顯れぬゝ何ぞ洩れて下司の耳ゝあるべき聲外ゝ聽え雪ゝ路鳶ゝ鷲を庚て飛ぶ時ゝ柵鴉鵄を隱時ゝ其機ゝ先動くゝ現隱曖ゝ洩易ゝ怕るべく愼むべくゝ間話休題然ゝ紀二六ゝ大部屋ゝ部屋ゝ毎ゝ噂ゝ因てゝ知りるゝ件ゝ秘密ゝ言ゝ趣ゝ詳ゝ竣ゝまゝ至ゝるゝ其崖略ゝるゝゝゝ心悄地ゝ敬鳶ゝ憑ひていゝで這裏を犬江ゝ告る便ゝ欲得ゝ念ゝ程ゝ親

兵衛の隷僕們は。夜も人の出入に憚りあれ。晝ハ忌べき者なし。頃者来ぬる餅師が軍書の諳讀妙なりと人の噂に耳知りて。その餅の價いと廉くて。然も一藝さへあるなるが。我も買ふべし。皆買ねとて来ぬるを。招よせて餅を買ふのみならず。然而太平記を听んとて大家請ひ已ざりけり。登時紀二六ハ。這里で親兵衛が抑留らる。宿所なりと豫より知らざるにあらざれど。非如對面の便宜をなきとも。切て今我来にけるを知させまうらす為に便り好と思へば。毫も辞ひずして。太平記巻の四に。正慶元年の春。笠置山の官軍敗れて。後醍醐天皇隠岐國へ遷されませる時。備後三郎高徳が。行在所の櫻の幹へ。詩句を寫せし一段を。聲爽に諳讀しぬると。大家ひとしく聞くに。その書に道らく。其比。（正慶元年春三月）備後國に。兒嶋備後三郎高徳と云者あり。主上（後醍醐天皇）笠置に御座ありし時。御方に参りて。揚義兵しが。事未成先に。笠置も被落。くと聞えしかバ。力を失て。黙止けるが。主上隠岐國へ被遷させ給と聞て。無貳一族共を集めて。評定しけるハ。志士仁人無求生以害仁。有殺身以為仁と云へり。然れバ臨幸の路次に参り。會君を奪取奉りて。大軍を起し。縦尸を戦場に曝すとも名を子孫に傳んと申ければ。心ある一族共皆此義に同じけり。路次の難所に相待て其隙を伺ふとて。備前と播磨との境なる舩坂山の巓に隠れ臥て。今や／＼と待ける。臨幸餘りに遅かりければ。人を走らかして是を見せるに。警固の武士山陽道を不經播磨の今宿より山陰道へかゝり遷幸成奉りける間。高徳が支度相違してけり。ゆくゑ美作の杉坂こそ究竟の深山なれ。此にて待奉らんとて。三石山より直違に道もなき山の雲を凌ぎて杉坂へ着たりければ。主上ハはや院の莊へ入せ給ぬと申ける間。無力此より散々に成にけるが。せめても此所存を上聞に達せばやと思ける間。微服潜行して時分を伺けれども可然隙もなかりければ。君の御坐ある御宿の庭に大なる櫻木有けるを押削て。天莫空勾践。時非無范蠡。御警固の武士共朝に是を見付て何事をいかなる者が書たるやらんとて讀かねて。則上聞に達しけり。主上ハ躬て詩の心を御覚り有て。龍顔殊に

太平記巻の第四備後三郎高徳櫻樹の詩を題する處



文溪堂藏

御快く笑せ給ける。（以上幸記）と一字も差ず誦こそ流る水の委多如く聲高やかに誦けれぞ大家堪ずやと喝采て一霎時徒然を慰めけり有徳はれども親兵衛は静然として奥の在ち連帝戸隔て餅師が讀む太平記をうち听ぞおの經紀児は紀二六なるむと厭くも聲を猜一ぐ他が心を推量る我今這里ぶ柳留られて禁囚の異るを懸念の最も惶絵昔後醍醐天皇の隠岐の離宮ぶ屏居られてをりまける御悃苦を恵ひ比べ〳〵と知なと高徳が楼ぶ寫ぬ。詩句の一段を讀るを聞ぶおのれ那身を高徳の孤忠ぶみづらう擬へ歎くれるを取敢ずおの人うけまへ讀果一折一個の若黨の這宿所ぶ連られて悄と身を起して倫見るぶ果てその人うけまへ讀果一折一個の若黨の這宿所ぶ連られて

ること召よせて却ぬ今来て在る餅師欤思ぶも似ず記憶の好さよ我も亦憶うる事希戸隔ようち听く倶ぶ徒然を慰めち然る經紀児の餅るらそれ将後の話柄ぶ嘲べ試ち思ぶ却味い甚麼ぞやと問へば隷若黨微笑て然〳〵餅ハ則餡餡ぞ味ハ尤庸るれども價極めて廉けれぱ鄙語ぶも得要東西あの上やいざとうち笑へば親兵衛を亦うち矢て仏ら我ぶ好まる餡を五十八買まく欲を然ともその餡或ぶ微く或ぶ又尤庸ぬ笑をあるてよく做ぎるべ明日ぬそ来よと誂ちを待ぎ紀二六も既ぶ親兵衛ぶ誂てよヨヾくぶ要ぎー五枚でよりとぶ隷若黨微笑ろるて退歩て躰て紀二六ぶ親兵衛が誂ち餅ぶ明日ぶ必ずそ来よりと諭ちを待ぎ紀二六も既ぶ親兵衛ぶ誂てよヨヾくぶ要ぎー五枚でよりとぶ隷若安房の里見の正使ぞ犬江と喚做ぎ後生ぶ你ぶ記憶ぬ記憶ぬ忘れぬ東へ還て話柄ぬせぬとて買ぎ餅ぶ明日ぶ必ずそ来よりと諭ちを待ぎ紀二六も既ぶ親兵衛ぶ隷若黨ぶ吩咐る折聲洩れてまちそろそろ一ぱ可唯々々と応ぐ声喝ーる販棧ぞ搭駝で還る通途左さま右さる思惟るぶ今日犬江主の誂ぬり餅い必所以あべーと心ぶてもその所以ぞ早ぶ悟るぶオ足ぐも那隣涙碑ぶあるねども考べ〳〵幾町欤もくとも覚ぎ五條る客店近くまー時そう経く思ひ出てけれぱ心悄地ぶ歩勇ぐぞ儘例の向へ走る声ぶて徒々と件の餅を誂て亜と奨ぐて歇店ぶ還りぞ陽ぶ浴る夕飯を喫果ぐる同歇る客經紀们ぶ手枕ぶ就けれぱ單紀云ら

孤燈の下に墨斗の筆を抜出して最細小なる紙に徳用堅削がる密𢚩謊言の事の趣且政元が将軍家の台命と偽りて親兵衛を返さずせける奸詐邪謀の顛末と近日京家の勇士們と試撃あるべしとの風聲までも漏すことなく細書する者五枚可卅と猶小く畳分く准備既に整ひしかば燈火弗と吹滅して躯て枕に就しかど明日の便宜を思ふの故にその通宵寐も睡られず次の朝は毎よりも夙く例の販子賣買ある餡餅の向丸許赴きて昨詭へたる巨餅と毎に謬つて餡餅をヨヲく買合せり販櫃に蔵ていそぎく這里を立去て人なき地方に赴きて自刹の為に貯へたる剃刀をもて巨餅を都て両箇に裁劊て内なる餡を会棄て准備の細書を一箇々々に竹籠て斫口を合するに搗栫へて程もあらず尚煖なる餅なれば斫口愈て迹見えず噫我ながらよくあてたりと思へば獨うち笑れて又販櫃に蔵め復搭駝て政元の邸に來。親兵衛が宿所に赴く程に秋の日なれば短くて巳牌まであらざりける登時紀二六は背門より高く呼内て隷僕們に報るやう昨日東の御客様の仰付させ給へる餅を持参仕りぬるを誤より知食けん近曽の新製にて米饅頭と喚做すを殊に大好け仕りぬ餡は仰に從ひつ。実に心を用ひしかば薄皮にて其味妙なりとて餘人に取らしめず自ら鼓しめたまふべし骨折甲斐もありぬべきのみ稟しぬといふに隷若黨ありて卒然ば其餅を是へとて果子碟を出して拭ふ濡布巾埃目残る漆盆に載て遞与せば紀二六は菜箸をもて米饅頭を碟子に装る者才に五枚その偶に凡庸なる餡餅を装添て是を隷若黨に示していふやう這餡餅は麁物なり御用の外にはへども喫べ比べのためなれば米饅頭の意味深さを安定に知せまゐらせんとて進らせてあそび候といふに隷若黨點頭て件の漆盆を抗げて儘奥へゆくめく程に親兵衛は庵温の次の間なる縁頰に站て庭を長視て在りしが今紀二六がいふよしの夙く具に洩聞えて既にあつらへたりしかば隷若黨が告るを待ずして求めるぞやへ隣より好き餅師が口状は這里へも詳に聞えたり。いでくとおもひても常居る坐席に返りて坐あて先餅を見て含笑て現大によく為れるなるよ侍衆隷若黨我思ふよしあれば今日

那經紀児がのて来た餅を餘さず買食て後
若黨欽び羨て退出く甲乙お告て餅を買食る程お親五衛悄地お指そて来饅
頭を推試るお果して内の堅けれが東西有りけりと猜一る肚裏お思安ち昨日紀二六が
よく〳〵来て太平記を誦讀あける備後三郎高徳が桜お寫す一詩の一段を必是悄地お
我お告まく欲まことあるを知せとての所為ならん鯉魚を鮮くその腹より一書を獲ちー故
事を思い出つそれとなう餅の内お密書を
竝龍る計策を誨えお他よく悟りて我あろを給
隷若黨が遠一く又来て親五衛お報るを待う方僅仰られーど餡餅を乞旨買食て其
價を問いひーお来饅頭の價と共お五百文おいへば金ホして貳分ことのみまおるホヨヌくいい
ぎそとのを親五衛守あむ否とよ我憶もも這里お止宿を穀されて各の尼會お做ると
既お久一けれぞその徒然を慰る為ぬぐるとと思おだらお進らまる東西るホヨヌれ決して數

ちらまと宜く分ちく茶消ゆまの我も午後のふせんとうち件の米饅頭お祓児をうて後
方る紙袋戸開て藏措く却容硯の下布る小紙裏を合ち一封ー儘お推試て好々
行裏を開のぞとも這金ちよ貳分あれば躓即餅の價お足れりとうち筆を極含て餅の
價金貳分と寫着て若黨お辛とく遊與して又うち徒いぐ何と平ちん教員言お似ると
ども各軍記を听んとて日毎お銭を費ーて餅を買んへ要るだるを知る如く将軍家も各命お
より抑置る我宿所まで遊戯お廃て娯樂の慢心の所
以ぞれも然ぐとく餅を各の上ちまで我が謹慎の所
欲ー紀旨もあるむ両三日と隔て来よと吩咐の外又餅の
諭兼りの如現堂當介小吏ぞらお両個のお胸挟くて然ーもる紀ちまでも罵敬言めんへら其
頭お小心仕ちむと心て躰く退紀て却紀二六お件のよと告示して餅の價ち還せば紀
二六受含てうち戴ちく販桜へ緊と藏く答ちう御諭ーの言の趣おろるくそれ

乃然らば今より隔日又ここへ参りなんぞ御用をもくと諄返して販梔と脊ふやそう駝
做さ御庇因てお御一所ぬて壱貫買ほ為く做果これが退りそ休足仕らむ吁忝のようと
宜く稟一ありひと腰と屈めつ人々ぬ告別しつ私ぬ
脱落ちくて光実るとを誉ほけつ分程ぬ紀二六るその日散店ぬかつ来て親兵衛が取せる。
金子の裏と開てみんと思ふ心のいそがれて販梔の蓋撮合まて見れば餅の湯気龍りて内湿
やする梔これが裏一金子の紙濡れさ并を破らーとそ。膚近き火盤の埋火梔起しく裏
紙をそが儘ぬ火ぬ翳しつうち返しつ炙るまおくく乾ける裏紙を解け開けばその金弐分
より外ぬ方角両個つ出ぬる包とそ一両ぬ。加之その紙ぬ寫ー数行の文字あそ。
炙画の像く顕れけり何おもあらんと訝りながら押へ伸あてよくそれが直塚ぬ示せ事ぬが諳
讀の太平記高徳が詩句の支我ぬ告まく思ふよりある呼以ちんと猜あらば我ぬ鯉書の
故事ぬ擬へて餅書の秘策と教えをを悟らば必ず做ものあべー。ふとて屢せば竟ぬ為

脚を露ーて人ぬ知らる禍あらむ。小事ぬ我ぬ告ぎもあれ大事ぬ餅書の密策も猶又一
度ぬ允せべー。且娘雪ぬ告まくもとも他が歇店ぬ行くべくぎ汝が主ぬ従ぬぎその地ぬ在ると
野兵伴當の疑ひ向つ恁々と告ざるとなるざるべー。支計ぬ密ふるとを善とを躬方とふ
とも少知る人のヨるふとぬ洩易ふ。慎えくく古歌ぬ云ぎもあふのを阿漕の嶋ぬ
ひく鯛の。ぴちぴちるべ人も知りなんとありーと紀二六屢讀復しく。且鉄ひ且感ふる心の
敬服大くるふぎ先その金子と合ぎ蔵め又その書と推開ぬ火盤ぬ投煙ぬ做そのて
又紀ふ思ぬ告ち犬江壬の神々まれぬ今ぬ剣ぬのぐふ昨ぬ餅書の計策それとふーよ我ぬ
誨えく秘密と告る便宜るさー先今ぬ赤酒をりく意見を寫しく敬ふる現素
紙ぬ酒とりく画まれ文字まれ寫とれも尚素紙ぬくえかさふ并を火ぬ翳ーぞるぬ
逮びく寫る限ふ顕るぎち世の人の知るのもく新奇とさるぬ足らねども時ぬ取てぬ遠
虚精妙生年九歳の童ぬーてよくその田地ぬ至らむ。実ぬ資る神在さぎへ誰ふ企及

ぶべ況今こそ倭の心もはけ。我が這酒書こるりーと兎毛だるも悟ぐぞ知らぎ。只這紙の濡
たるを怒るぶ及びて憶ぎも文字顕れい自然の感応是も亦護ら母のぶ神の真助欤人力
人智の及ばぬまでぶ奇之妙之是ぶ就ても犬江主の餅書と酒書と互ぶあるる。餅酒の照對
新奇まて人意の表ぶ出るとらいまー。矧亦餅の價ごまぐ公くうとも知るよう。死時先金壹両
裏措てその実寡貳分と咤くぶ及て。貳分と寫あて壹両金とそ。儘ぶ遽與され。臨機応変智慧
廣天世ぶ八犬士と稱られて。約和漢ぶ抜萃するへ以あるると一唱三歎らく憑ーく思けり。

第百三十九回

五條の頭ぶ代四郎宿憂と啓く
艘る剣の場よ親兵衛武藝を見も

去の日紀二六が賣買ぎ果て。五條の歌店へ還りーへ毎よりもと早くて。尚未牌時候ろりけ
ま。同歌店ろ客經紀们も生活ぶ出て四下ぶ人ろー。紀二六を是も亦折ふうの便宜を窃され。
架ろ木枕舎下あく臥り思旋らぎぶ犬江主ぶ仇做も兇僧那徳用们が誤詐。幷計ひ

顛末と既ぶ主ぶ告ぐれ。ぞさく小心せらぬー然るをも嬈雪三王ぶ有倍る椿事と知る
ようぎれが那上へあとへふくと思難く在うんぎうぶ。然がらく那人達の歌店へとそ出ぶて。
三條五條の程遠ふ同一河原ぶ在ろぶら我這歌店と知らぎ。便ろ序ぞ薄情
けれと思ぶのこそ術ろけれ。次の日ぶ亦夙く改元の邸ぶ赴て大部屋小部屋の毎ぶ餅を
賣れども軍書を講ぜぎ強て求る者あらぎも事ぶ假托け免れて。只江湖上の雑譚ぶ
聊笑ひを取れるのこ。親兵衛の宿所へ二日ぶ一ど赴て。隷僕们ぶ餅を薦めて賣
る日も買れぬ日もあるけり。紀二六が倍猛ぶ賣買の趣を易ー事情ぶ鄭ぶ親兵衛が驚を
思ぶおぢ死のへ听果ろ告ぐれ。告るぶ故の儘ぶて慎ぎぎい餅師ぶ相応ーかろ兎軍
書の諳讀ぶあるとの。噂ぶく高ろんぶ。智ある者い疑ぶて後の障らぶるらのやせと
酤む遠慮あれば是よりー又三四日經く。紀二六ろ例の如く餅を賣竣ーてかるぶ。
五條の橋の頭ぎ料ぎも代四郎が前面よろ来ぬるぶ逢ひけり。迭ぶあるを什麼とだろふ。

先四下を見廻すに這時下輔更路行人の稀なる柳あれば倶に其樹
蔭に立寄りて土坐を恙なきを祝ふ代四郎が恨ある面色にて直塚和郎が思
ふも似ず心つきなき人かな曩に咱們が大江主の安否を向きく思ひつゝ那邸へ赴かんと門
子們が推禁めて木牌を借んと尋ねしを許さゞりしとて和郎を索ねて那木牌を借んと尋思ふさ
きどもの歌店を那里と知されば思ひのまゝに行も果さゞ今日は音耗せざる欤明日を
待て那里の動静を報らせ欤と曽不娯然て秋も九月中旬まで早く暮ぬ蟲影悒
然そと査一玉を慫ふ餘りの胸の休めなれば和郎の歌店を那里とは今ぞ知るよしもがな洛
中洛外二三里より遠くあらず卒然ら索ねて又尋思あぐるとも今ま
三日ふるめらう亳も便りを得ざりしかば又徒ら三條の歌店を投てかのまく這里に逢
ひし幸ひ多れ和郎の歌店が那里ぞや和子の安危を知れ欤いかゞやくと急迫く
思ひ已ざりしが紀二六禁めぞ且曽つゝ四下を見うかゞひて聲を低めて狄ばかり曲文の
恨ある理りを思ざるまゝねども今日まで音耗せざりしが秘密山の事由あれど知小可ら
ず曩に大江主の教を受しその宵よりこの川の前面なる某甲と云飯店が在り餅師が打
扮て那木牌をもて那邸へ出入自由をなりしが大部屋小部屋の毎が隔なきまでふるまひ
よう大部屋の那里の秘密を探り得て大江主が告さる事有を
ば尾ひ又倍々そと、徳用堅削が事詮訴の事改元の心術千計試駁あ
るべしとの風聲且親兵衛が誣る餅書の事その要歟の顛末を具が告よ
又のまう小可ら曽の秘事を更が告まく思ひつゝども憖が宿所を造らば覊兵伴當が怪
れん躬方とがとも要ある毎が知まるとれば漏易ろ姑且自狄が任せよとある大江主の酒書の
誨の理りなれば默止ち愛よや深くも恨をもひ
隷僕們が疎らねど王が對面を許されぎ非如今ぢ那木牌を更が借まるも
とも事が益あるのみそ小可既が大江主の宿所は立入ることを泡く
許りそ木牌の出処を問賀さば赤禍の端と做りて

せまく欲まる故ふ弥勒の世までも放ちく安房へ返吉あるべくもあらず。癪一癪の境ぞ弁もまきのち亦後の障ふるゝんとへべ紀二六含笑てかの音音をうへんさえともに応変の才匿しかれば縦其頭の情慾ありとても試験の沙汰あれども大江主の本事をもく失ふ房べらもいかゞせん今只料らぬ遭際の長談俗話ぞ憶ぎる日の暮れば宿所へ伴ひまゐらせく餘談を談さまく思ふともいふせん我歌店へ客経紀们の合歌るまべ側ふ憚りいとヨヌろ倘又異日小可ふ逢まく欲ーのひるべ朝まれタまれ這橋畫処ふ鳴立く我賣買ふ勞毎の去向帰路をなる対面輒ち庶べれと諭せば代四郎點頭て好々その気もあろ沼ち嘻和郎い陪臣の若黨ふ惜ひ才子ゝ开と大江主の見ゑ出して今番の大事ふ使まさる那眼力も亦沼くて和郎倘ふの地ふまで在くぎべ我豈那里の風聲秘密を慥く偵まで具ふ听くとゝ沼んや寔ふ珍重々々と誉言れば紀二六頭を擡く低りて今ゝふ面正ー

かの中きらでへ便宜を失ふべーとく思ふぎい後悔あらんと諭をを代四郎つらくと听て憶ぎ太息を吻く原来這回の禍鬼い那徳用ぎが所為ぎり称幸ひあるゝ犬江主へ今猶差ゐーとへども他们ぎ毒計已とゑすくい嗚呼危紀かも弥ゝ多ふべー乍座いふーて可らやと向へべ紀二六沈吟あて事情を思惟ふ徳用が譎詐毒計施さぎとふとゑも幸ふーて改元王い試験をを宗とーてその餘い徳用が薦る邪計をヨヌく取らぎと噂ふ少けが那人の底意犬江主の人柄とその武勇を少知りて悄地ふ愛まる故ふらんふ大害を加るといあるべくべ仏らぎ反て安ふ似くと解れて代四郎點頭てそれも思ひ合まるらーあり始我船浪速津ふ着ぬーぎつ折犬江主の指揮ふより咱们先這地ふ来く世の風聲を拐听ーふ京師を殊ふ男色の弘いるとと女色ふ勝まち且政元主の厚くとろ悄地ふ外法を行ふ故ふ正室側室あるとゝと豫ゞ仕けども弘法以降龍陽調戯い法師まち許もとへべ木犀花をのゝ改元主も忌ざるべーふらんあ哉まるも犬江腋子と抑措て頑童ふ

と
もゐ言ゐぐう小可ゞ親へ常陸ゐ鹿嶋の郷士ゐうけゐ家酷く衰へ二親ともく世を
去りう胞弟兄もゐく憑ゐ親族もゐ孤獨今の東人蜑崎照文へ我外戚の小父
ゑれへ小可年十二の時迎ゐ那里へ身ゞ寄さ厄會ゐ做りーう。翌日武藝も人並
その師ゐ就ーく教られ近屬猛可ゐ引立て若黨ゐーて使ゐ。那洪恩ゐ答へべき
ようゐゐーゐ這回の大役東人ゐ代れとある。教諭ゐ辭ふとゞゐ左ゆう右ゆう仕りね
ゐも秘言ゐのへべ人ゐ噂をゐゐひそとそ創く諦を那身の素生ゐ代四郎ゞ顧感
嘆ーて然べてゞ降より出処卑ゞ人の子ゐゆゑ。蜑崎主の猶子ゐ
らむとゐ知らぞ無礼を致ーう許ーゐゞ卒然ゞ復てゞ這里ゞ逢ゞれとゞゞう躰て身を
起せべ紀二六も共倡ゐ異日ゞ契る望月の鑑へ人の信と信曇雲ゐ心潛ぶ宵の那壷盧の
宿ゐーてゞ五條頭の杣枯ゐ寒けゞ衾を分ちう。遂ゐ左右へ別れけう。安下不題犬江親
兵衛へ那日紀二六ゐ教諭ーる餅書の計策成りーべ。傍ゐ人のゐゞ折ゐ餅を披ゞて。

内ゐ細書ゞ一箇ゐゐ會ゞ出ーゞ懐ゐーてゞ皮のゞゐ
拘児ゞ投與へう。餡餅をゐゞ奴隷ゐ取らせてゞ當晩雯閨人定りー後單枕上ゐる行
燈の光りゞて件の細書ゞ披ゞ見て。徳用ゞ詭く詐政元の佯誕の事情ゞ知うーゐゞ
その書ゞてゞ焼盡ーて枕ゐ就ゐ思ゐ廻ゐ管領陽ゞ台命ゞ唱く咱們ゞ柳めーゞ別ゐ
故ゐゞとうゐむと思ひーのゞゞ。思ひ纔ゞ結城の悪僧徳用へ香西復六ゞ愛子ゞ改元
ゐ主ゞ乳兄弟の因ゐ者ゐんとゞ非如那奴ゞ毒計ゞ薦て我ゞ揣ゞとも那ゐ是正ゐ
勝ようゐれへ試數ゐの勝負ゐゞゞ我還るゞ路ゐ開けゞ又只自然ゐ任せのゞと思慮
ゐう倒ゐゐの夜ゞ安く睡りけゞ経く秋ゐ絶ゐうーゞ時候香西復六ゞ
奉書ゞりく親兵衛へ示ゞ送ゐゐその書ゐ略ゐ寡君ゐうゐく改教ゐ暇ゞゐゐ
まべ明日對面せと仰ゐ見參已牌ゐべーとゐりけれへ親兵衛隨即美書ゞ寫ー
使ゐ遞與ーて疏く准備ゞ整ゐゐ必是明日ゐ見參へ試數ゐ事ゐべーと思へ

さて けしき
ども諜ぐ氣色るく。その詰朝公服を着け。両刀を腰ゐて。徐ろ宿所を出る程ゐ那堂曾ゐ
両個の小吏ハ先ゐ立て案内を致ー。両個の隷若黨ハ左右ゐ従ふ且奴隷ハ鞋奴あり。柳
笥ゑ持るあり。都て後方ゐ跟てもくめり。既ゐて親兵衛ハ副玄関ようち登れば。青侍案
内ゐ立て正聽ゐ造らあり。香西復六それを迎てよの日の上昔を傳達せ。當下青侍皆左右
より徐々と立蒐りて。間る隔亮を。廣く開くをそれば。政元ハ長袴小刀ゐて。正廳の
上座ゐ在り。有司ハ左右ゐ四雉列れる。开ゞ中ゐ又五個の武士あり。或ハ眼圓ゐ髭再の迹蒼く。
或ハ身材高く骨逞ゞ。或ハ飾磨紺或ハ褐色の袒衣の肩狹く下短ゐ綸縅の小
袖の緯足らで。肘の見る可るを一樣ゐ被て。二尺九六寸もあらんと覚る腋袴の刀を各腰ば
跨へて肩を尖らー臂を張り存々として有司の上坐ゐ在り。又政元の後方ゐ侍る一個の
法師あり。年歳ハ三十八九多べー身材高く。肥高盈て面皮淺黒く。眼ハ蜥蜴ゐ似く。
鼻ハ複猴の像くる。鼠色の光絹の小袖二領可襲被て。烏紋紗の法衣の両袖を
巻抗て。身柱の上ゐく締納ね。袈裟ゞハ胡意揆ゼーて。置て扇子ゐうち乗く。右の
傭ゐ措ゐる。是則別人るゞ刑餘の凸凡僧徳用ゞ親兵衛と杏ゐ見る。眼光凄ー。
勢ひ盤で和そう。登時香西復六を親兵衛と領て找を入り。政元ゐ向ひ額ゞ衝く。犬
江親兵衛召ゐ因く参上と。哮え上れば。政元則親兵衛ゞ間近く找ーて。詞徐ゐ示もう。
犬江仁義れ豫より傳達る。汝の武藝御覽の事。上ハ御ヨヌ教カゐ御坐はべ。まゞその
日ゞトめかう。政元先試検あらー。毎く雌雄を亶示上よと。昨日仰出されう。是ゐより今日
ゐも我邸中ゐ。咱们実検もべゞ者う。武芸藝の次第を第一ゐ白打。第二ゐ擊劍。第三ゐ
鎗。第四ゐ弓。第五ゐ火銃。第六ゐ棒さるべー。敵ゐ対て勇士或ハ又将軍家武林虎賁の英臣と北面の武士も是あり。復六其六々其兵毎ゞ汲
會せよと。諜れば件の武士多ろ。ゐ倶ゐ膝ゞそ找めける。當下香西復六を親兵
衛ふうち向ひ。犬江生是るハ白打。緝捕の名家と雖ー。二階松山城介允可の第

こまろうち ちふらうゑ○さうけ つろうどら ー
子。則ち其の地の浮浪人當家の壯佼們が師と憑めば月俸數口賜はる。無敵齋經緯
これ つづ けんまあ まえん
是ん次ハ數る術の師範とて云も亦當家ゟ客待さる鞍馬海僧真賢是ん又その次ハ鎗
りふぎえんのせうごけ ゆうまえ
法の達人將軍家の勇臣まで澄月香車介直道是ん又その次ハ騎馬砲自得至妙て名
ふろ まさたうけ ゑい ー ゑいこー まちろく まさのこれ
高けるも亦當家の英士まで種子嶋中太正吾是ん又その次ハ射術の名家昔
ごへいでんちう ときの うえでんちう
後醍醐天皇のお ん時ゟ南殿近く飛び去し怪鳥を射て墜して名を揚さる隱岐
おらうさまんのぞういろあり ろくせのまごまあちうさぎえやくゆ
次郎左衛門尉廣有が六世孫。則ち當今北面の武士さる秋篠將曹廣當是ん
ひとう ぶー えとも まこいめ
と一個々ゟ汲會され五個の武士さろゐて俱ゟ找出く親兵衛ゟ名對面をあさけり姑
らく まきの よび えんべ ゑ
且ら〻改元ハ從よ親兵衛と喚けく今我後方ゟ侍る異法師ハ是東國の客僧そ。
そくえん さけけ そうう ま
素ゟ當家ゟ俗緣あり。介ゟゟの僧生れ乍らその膂力の剛ふ事又那辨慶ゟ弥
うせつあ てるこ
增て重六十餘斤ある鐵の鹿杖を自由ゟ使ふ本事あり。矧又數る劍槊姚ゟ長ふ
やきう べんけいちち
ゟ。前砍の但馬和田新發智と云へども屑ともせざる者んぞ。他を汝の敵
ふ加えゝ。其本事と見ゟく欲もこの〻儕を
うち向して送ゟ默礼あるのこ件の武士さるの上ゟ坐ゟ。
てゟゟ立べ。兵毎も皆叫ね試數べゟ木刀ゟて鎗
所を數るまて命と殞もあるべ。欤是も亦知るべ
自得ん送ゟ送恨ふーと云拉言書とまゐらせべ。但ー真劍をのそ廿と請ふまも
これあるど并ハ又時宜ゟ依ふゟ輒く許ーかさけれども神文ゟハ載さる。皆この旨と
かー。と宣示を詞と共ゟ有司件の拉言文をあて歩。聲爽やうふ讀聽され親兵衛並ゟ
敵るの武士們と德用も言兼ーて各その名字の下ゟ花押を書寫ー指を破り血を
戰ぶーと有司則ち令を揚くそゟ儘主君ゟ呈閱を改元倩あれを見て有徒れば且別席ゟ
退ぢて各〻准備をせよ亭午の時候より我も亦歩ゟ勝負と實撿廿什麼親兵衛
能做まやと問れて親兵衛然ーゐ弱冠未熟の身ゟーあやと敷ふもん見歩ーゟ預のまうりて

免ぞ路ゐ。左ゝも右ても勇士達ゐ及ばくいなり。然ばとて武士ゐる者ゞ敵ゐを怕れて今更ゐ云云と辭ひ辱さゞ即坐ゐ頭髮ゐ剪ぎ前刃ゐ棄て高野ゐ入るゟ外ゐ術ゐ只ゐ笑ひゐ備人のこと容ゐ徳用を尻目ゐかけゐる真實ゐ魂氣色ゐ見れゝを改元然そと苦笑て卒然ゝべ准備をいそぎねゐ又後ゐそこだゐゐ身を起ゝゐ奥ゐ入るゟ徳用一霎時見送ゐて敵對ゐる方向ゐてゐやう洒家法師ゐ相応ゝから一ゐ武勇の守えあるこそ各位ゐ加ゑられゝと傷く思ゐれんあれども三四百年来叡山の衆徒奈良法師ゐ武勇れ誉もある勘うぎ。猫児も鞭氏も推並ゝ皆是國家の民ゞべ義ゐ仗てハ弥陀の利劍斌振ざるこそなぎ非如真劍ゝゐもゝ我一棒を喫ん者。孰ゝ往生せざるべ然ば死ゝそ恕ゐ神文ゐ載のひる舘の賢慮脫落ゐ。実ゐ敬服々々と誇ゐ復ハ推禁めて要ゐ死宏言せぎも在れ卒犬江生諸勇士達且別席ゐ退ゐて儲の饌ゐと賜ゐて准備とそといそぐ青侍ゐ々ゐる。親兵衛と徳用を分ちゝ両室ゐ安ゐ内ゝゐの餘敵

自の武士ハ一席ゐ。皆共侶ゐ安ゐ外ゐ就てその席ゐ起ける。小間ゐ時程りそ。響く正午の土圭と共ゐ試數ゐと促ゐ大鼓音數々と雪えけり。登時犬江親兵衛ハ身甲ゐ脇甲脛宿ゐ袴を高く結ゐ伏姫神授の短刀を腰ゐ帯び小月形の名刀を右ゐ引提ゝ青侍ゐ々ゐ安ゐ内ゐをせられ徐ゐ庭ゟ外ゐ出ゐる。儲の場ゐ赴く程ゐ那五個の敵の武士ゐ敵齋經緯骸馬海鴎真賢浴月杳車介直道種子嶋中太正吾秋篠將曹廣當ゐ各一二の弟子ゐ木刀槍棒弓ゝ前烏銃。銃丸數梢を持せ。出て試數ゐの場ゐ聚ゝの。中ゐ徳用ゐ南蛮錬の鎖衫の上ゐ白綾の小袖ゝ被下烏紋紗の腰衣を高く褰げて縛紉りゝ結び納ね聖柄の飛刀ゝ腰ゐ跨ゞ銀の鋏打る細鎖の釘十王頭の踝纓ゐ身を固め緋色る光絹の鬘巾ゐ金の左纏の顱纏ゐ眼宥ゐ戴ゐ勢染の綿紗の三幅袴合一る褌を揉るゐハ那新制衣の鐵の鹿杖ゝ六十斤るゝと腋挟ゝ足ゐ白苧の戔革の單鞋の重底るゝと弄做て隨従の徒弟陸釋坊堅削

發児を執ると乃ち誤張歩する而魂苛めく一人當千の威風あり。その他五個の武士毎
も或ハ鎗杉或ハ身甲衣の下ゟ透間もなく武具せざる者もなく小袖袴ゟ綺羅を
盡して緋紹の袢一樣ゟあの日と晴と打紛ふめり。徳用が華丽ゟ四下を拂ふ勢ひ
ゟ及ぶべくもあらざりけり然ばその処ゟ素是走馬場頭ゟして五十間ゟ八間の平坦ゟ左右ゟ
結繚草生の小塘堤あり。并ゟ二十間ゟ九間の際ゟ袖搦可の四目ゟ離笆ゟ締遠らしる。
四方ゟ両折戸の小門あり則這里ゟ試藝ゟの場として南の塘堤ゟ高く假廠閣ゟ構
ゑる。その作りざま勾欄ゟ似て檐下ゟ些糸の天幕ゟ張亘。後方ゟあり五六間ゟの金屏ゟ
建続らして肱掛の榻ゟ程々緋の氈幾ともなく掛列ゐ四下も赫奕可ゟ吉野龍
田の春花秋葉ゟ一度ゟ長観る心地もぢ。這假廠閣ゟ堤塘の下ゟ縁道ゟ席ゟ
布き執筆の有司二三名小机ゟ列ゐ硯の里堅ゟ磨るどしも各ゟ合の次第簿ゟ開き
見て將ゟ雌雄ゟ録さんとも又北ゟ堤塘の這方四目ゟ離笆の内ゟ羅紗の打列ゐ分会

純子の野袴空牙。數柄の両刀ゟ帯ゐる両個の実検使発児ゟ尻ゟ掛て在り。その餘
介添の武士五武師の門人職役ゐる者數ゟ人ゟ敬言固の走卒一百名ゟ余ゟ捍棒を衛
立ゟ塀の四方ゟ守りゟ又鞍措ゐる色々の馬數十頭各鑣奴ゟ牽ゐ来てゐも
赤堤塘の下ゟ在り。今日の儲ゟあるべくもその數ゟ多ゟ武備ゟ示さ為ゐる狄勝
者ゟ牽出物の准備ゟそと人食思ゐ却試藝ゟの時ゟ臨ゟ大鼓ゟ鳴らしそれゟ促
ゟ鉦ゟ叩ゟ退く暗歸とも有司ゟその数ゟ固條と死しても処当しとゟ拡言書ゟ神
文ゟ親兵衛と敵ゟの武士ゟと徳用ゟ復讀示し改元の命ゟ傳ゟ有徒一程ゟ改元ゟ
華美ゐ衣紋袴ゟ小刀ゟのゟ帯ゐ大刀ゟ胡意近習ゟ執らして既ゟ假廠閣ゟ
中英ゟあり。その日扈従の先當黨若當黨香西復六ゟ首ゐ有司近臣二三十名都て公
服の肩ゟ比べ袖ゟ列ねて齊整と左右二側ゟ侍しゐ姑且ゟ又試藝ゟ促ゐ大鼓ゟ
早めて打鳴せば東の方ゟ小門ゟ試藝ゟの荘絶ゟ入る者ハ是則別人ゐ。犬江親兵衛

仁なり。袴の稜とり括をしたる。身装上に寫たりしが。先政元の假廐閣に向ひて。跪居て低頭揖譲の礼正しくして阿容たる色なく更に又西に向ひて徐に敵と見る程に介添の武士長たる。棒木刀を携て。親兵衛の後にあり。隊より第一番は白打槍棒と定められしに。鞍馬海傳真賢は惴雄の猛者なれば。怺へずして絶内に找入り両個の実検使にうち向ひて。大刀は是戦場にて第一の器械なれば。即これを短兵といへり白打は近来の武藝にて。或は巷路軍組鬪に要あるのみ。在下御免を蒙りて第一番に找むべしと詞せはしく断り演て。答を竢ず。親兵衛の身邊近く造りて相距ること五六尺の程に在り。跪居て迭に黙礼せし。海傳が介添は則允可の弟子にて従ふて後方に在り携たる赤樫の木刀の長二三尺許なるを。對坐の間に措く程に親兵衛の介添も亦携さへたる木刀を出せしを。親兵衛急に推禁めて。否晩生は手熟たる這鐵扇あり。とて手海傳が外目めく。原来酒家を敵とするに足らずと和主の思ひ侮る歟然らずば黠く輸る折器械短きが故なれど分説種にせん為欲。烏滸許救をせず木刀を合さねど詰れば親兵衛莞尓と笑て。否とよ闘戦の利は器械の長短によるものならず或は敵の多寡に縁りその場の廣陝に擄りて甲も乙も倶に要ある長きは鬪ふに利あれども刺まくするに不便なり豈徒長きを利とのみせんやといひつゝ腰なる鐵扇を抜出し右手に拿て這鐵扇は我為に活人殺人二剣に勝まさる要あるを。膝言を前人より卒て本事を試めんと窘られて海傳は性起り満面火のごとく憎き小猴子が似而非廣言思ひ知せて覚期をせよと罵る武者聲昔めかしく木刀を隼く搔拿て衝と身を起し耶と聲かけて眉間を菇く丁と鬪るを。親兵衛閃りと身を反して鐵扇をもて丁々と托地と受流し打拂ふ修煉精妙神出鬼没電光石火の眼にも見えぬ又只陽焔飛禽の形と影に見る如く身にも合されず鬪ふに鬪はれぬ海傳は秘術を盡せども只是数千の鐵扇をめぐらし柵搆て八葉二千葉に那身を圍ふに異ならず然ば這鞍馬海傳真賢は手熟なる

第一戦親兵衛海傳を懲す

よそおそろ みのう
四十許。身材五尺八九寸。烏髪を束ねて。背も赤く。色淺黒く。皆列をなして。聲は銅鑼を
ならす。如く。鳴もの仗ら。數馬八流數る劍の妙奥を究て。京師の名ある。その教を受る者千餘
人。數ふべくもあらねど。天の下。敵なしと。自負大言して。已心憚らざる。況今親兵衛が
少年ふたりを。優悄るを。敵るが足らざると侮りて。敢含笑合の次序を守らず。真先に栈
生て只一數に仆さんと思ひ。仆せ拠れて。受刀のこと。ほのめかしたれども。猶精神を励まして。
叫び戰ひの間話休題。爰程ふ犬江親兵衛が海鵜が山及ら蔦る。修煉の木刀を物
ともせず。一尺二寸の鉄扇をもて。幾番となく左応右接て。其疲労を。見る程ふ海鵜菜
神衰へ刀筋乱れて。醉るが像く。蹌々踉々として走蔦る。親兵衛が引外して。鉄扇を
海鵜の右の拳を礑と撻き撲れて。骨や摧けん。憶ふ木刀を。真甚哩と隕して。怯むを透
さず。丁と蹴る。至妙の白打ふ海鵜が筋斗ら仰さまふ地响高く。平張仆さて。一番時
起も得ず。犬江の弟子ら。数馬が脇被起て。肩を携て退けり。登時親兵衛が

添ら。一個の武士の准備の水と。沙碗ふ汲て。それを蔦ら。めるまでふ。親兵衛のその水をすゝ
めつゝ。純ふ口を漱ぐをも。徂佇とせず。又敵るが。雜色の西の小門
より。徐ふ杖を入の来る武士の。是則別人ならず。槍棒白打ふその名ある。壯敵齋經緯
ら。ふも未年歳の四十ふ過ざる。壁縛身甲ふ。弓矢を。弟子ら二人後方ふ従へる。事の形勢海鵜ふ
劣れ。默礼て躯く。親兵衛ふ立向ひて。跪居て。莞然とうち笑ひ。遥ふ犬江生目今の御本
意。敵るが足るべくも我をねぐも。擇ふ因ら。辭ふ由ら。一棒試のくりとらんを。親兵衛うち
聽て。現是棒ふ長兵ら。銕扇ふて相応ふかゝ。晩生も棒をもつて。御敵るふ立んとふ。
答ふ左右の仆添ども。素樫の棒の二尺ふ。両個の傍ふ差置ふ。親兵衛ふ。盡此一退て。件の棒を
取ふ。敵齋經緯ふ。盡此一退て。件の棒を隠して。又敵ふ扱て。ふ含ふ直て輪をも
とうち振ひ。但風車の輪るが如く。現經緯ふ分ふ寄ふでふいとまあり。ろく見えざりける。

既ふて敵病に更ふ又棒を拿直して然ふ参ふ大江生と
構ひて左右ふ薙ぎ払ふ猛可ふ悩る面と頬単ゆ鳴呼とふふ又聲かけて殴ふ
犬江殿と禁ゆそ些ー退ひて咱们近曽折ふ觸てら轉筋癖壁の持病ゆ目今ゆ赤ふ
病痾猛可ふ發りく筋動ひ脚癱れて堪ろから逆憾くふ思へども将息を異日の
ふ廿実検使達あの玄ゆそ宜く仰上られよ痛ー痺ー。ふふ棒を真哩と投棄て
脚を曳ひ退けべ。介添の弟子们ふ呆れて目と目を注ゆるのそ只得棒を拾拭て倶ふ後ゆ
従ひけ。是とふ騎馬の爭ひ。これ実検使ふら親兵衛を労ふ推退かそ共ふ罷りて主
君政木親兵衛海倫が勝負分明の事及ふ敵病ふ急病起ふゆとふふの言ゆ趣を
詳ふそれ経緯ふ弟子と員員の母を除くの外ふ目を注ー袂を被て敵病が
校點さよ海倫ふ見懲ーそ術よく免れ為ふて然ふ急病ふ發りけゆ許ーゐで又椎出
ふく下高撻ーて懲さゆゐと真ふふ指さて詰ふ矣ふもまふ日の是とふ鐙ふ騎馬ふーく。

雌雄を決ゆべーとふ。隊の定りけれゆその錦炎を掖去りそ代ふふ白粉をヨヲく裏ふる素沿絹れ
嘉裏の形毬のごくふをのそせられ人ふ烏草紙の
馬も驢を用ふべーそ。既ふその准備あり。則親兵衛と香車介ふその件々を賜けゆ。當下
澄月香車介直道ふ実検使ふ就て陳ふ在下既ふ大江親兵衛が本事をえて知
ゐあ。他ふ少年と云とゐへども実ふ一人當千ゆ遜莫倘戦場ゆそ衆敵と相挑まゆ首誠
衰ふともあるべ。係れゆ今在下ふ相士一人を借ーゐらゆ必や克ひり仇ふ單身ゆそ十二分の
誉ゆれと取りかーと渋りけり。改元これをうち守て原来直道ふ後れる一個の帮助を乞ゆべそ。
よく錦術ふ煆煉ーて今親兵衛の敵ゆふ足る者他ふ外ふひまご擇まゆその人ふ争
何ふせんとふ詞ふまご託らゆ政元の後ふ待る。近習の中ふ壮士あり。忽地聲を揚り声て我君
ふゐて人ふーとそ。英気ゆ敗ーのふゆゆと呼りつ突然と栈出。主ふ朝ひて恭ーく額を衝く。
改元驚馬ふゆゆつ熟視ふゆも亦近習の一人ゆそ。紀内鬼平五景紀と嗅做ゆ着つ。

三町礫を弓張月ニ八町礫ニ為ツ降ハ雑劇の訛ニ因る孫ヨリの婦幼の耳熟さる所の故ニ今改之

その人となり身材低く面ハ枯る蟹の如く勇ハ車ニ逆ふ蟷螂ニ似たり当下鬼平五頭を抬げて憤然として稟もうす臣が鎗術の一藝ハその奥妙ニ至らねども總角の比よりして好て投石を事とせしかバ竟ニその技ニ自得して杪ニ集る鳥梁を走る鼠これを打ニ謬ず実ニ是百發百中百歩を隔て柳葉を穿ちしとか養由基が弓箭ニも優ま本事なれバ人みな並て賞感のあまり則臣等ニ綽號して今ニ町と喚做たり恁命なる言のよしハ昔源為朝の勇臣と聞えたる三町礫紀平二大夫の本事ニ伯仲すれバなりその義を君も聞召けむいそぐ澄月生の帮助の相士ニ臣等を仰付させ給ハ親兵衛を仆さんこと嚢裏の物を取るより易かるべくと詩返して連りニ請ふて已ざりしを政元聽て寔ニ奈さざれ投石ハ飛器なり敵手を増て二人ニ做もまた面正しくもなき吾等ニ飛器ハいかであるべき先主の旨を親兵衛ニ告て答を聞けかしと指揮ニ実検使等承りて退りて躬ら親兵衛ニ件の一議を傳示して允さるべきやと請問へバ親兵衛答て然ハ単身にして両個の敵手ハ望しからぬハいへども戦場ならバ争何ハせん然ども投石ハ難義の敵也那保元ニその名聞えし三町礫を除くの外唐山ニも二三名あり所云曹國の武大智ハその弟子猱飛と倶ニ投石をもて武功ヲ顕たり（六合内外瑣言ニ載たり巻の十六ニ見えたり）又近曽明の呉門の彭興祖の弟彭某の如きも投石ニ妙あるよし聞えたり（五雜組人の部に見えたり）且近曽舶来の稗史小説元人羅貫中の水滸傳ニ没羽箭張清あり没羽箭ハ羽なき箭といふ事にて投石ハ羽なき箭の如し因て水滸伝の作者則かの綽號とせし意ニ今の紀内生も亦その類ニしてあらむずらめ然らバ只その一人さへ防ぎがたかる敵手なるニ左右ニ敵を受んこと心許なけれ技なれども推辞まべ後まさしく似く勇士の恥る所なり左ニも右ニも仕らんと云早の応ニ実検使等も亦復假廢閣ニかへり来て随即主の政元ニ親兵衛が答箇様々々と具ニ申上しかバ然らバ准備を急げとて政元則鬼平五が願ひを許して立ければ鬼平五欣然と言美して走り

第三戰親兵衛直道景紀を懲す

東都 曲亭主人編次

第百四十回

左京兆恩を東臣ゟ厚くも
紹前頭表後話犬江親兵衛馬上ゟ香車介直道と槍を合ゟ舊勇男突戦一
上二下と修煉の妙要當るべくもあらず直道へ突ゟ毎ゟ親兵衛が槍の尖頭ゟ
壷裏の白粉ゟ余されて黒沢外套も胷脊さへ白點斑駁ふるひ雄飛雌伏の勢ひ分明
事早ゟ果るんと人みる瞬もせで覿る折ゟ又那紀内鬼平五景紀ハ西のそうるふ
門ゟ馬を葭蕃直ゟ走り来て衝と乗抜て親兵衛の後方を距ること十間許馬を旋
ら一跨居て准備の布ゟ壷裏ゟ小石を抓で聲高呼ゟ犬江親兵衛正ゟ吭け當管領
家の御内ゟそ今三町と綽名せられ飛砾の鬼平五ゟ在り海内無雙自得の一石受

歩ゟ香車介の身邊ゟ走紀徳ゟと出ゟ身壮衣と整へゟ姑且一て第三戦の蔔大鼓
又裂ゟと响くと暗踊ゟ東門ゟ犬江親兵衛の馬上雄ゟ一ゟ壮衣ひゆゟ安ゟ槍と腋
挟ゟ徐ゟと入ゟ来ゟ程ゟ亦西の小門ゟ香車介も馬を找ゟ一様の身壮衣馬さへ都て
黒ゟうけゟ倭而雙方馬をよせゟ名告ゟけ槍を拈ゟ一上二下と廝挑む迭の修煉ゟ
秘術を盡ゟ勝負就と見る程ゟ既ゟ一ゟ直道ゟ堪ぎゟ下槍ゟゟ一ゟ親兵衛の
槍の杪ゟ附ゟる壷裏の白粉ゟゟ突ゟ毎ゟ衣裳ゟ塗ゟそゟ隠ゟぐもあらばれ一初黒
かゟ一戦袍衣の襟さへ胸脊さへ白點駁斑ゟるうけの浩処ゟ紀内鬼平五景紀身
甲衣裳精悍ゟく馬ゟ拍れ西門ゟゟ甘奪地ゟ走ら一ゟゟ衝と馳接て親兵衛の
後方と距る程十間許馬の鼻つら無旋ら一て研を飛一て親兵衛を打隊さと
構へゟ畢竟景紀投石ゟて親兵衛を打隊ゟ不ゟや开ゟ又下の回ゟ解分ゟと聴ねゟ

南總里見八犬傳第九輯巻之二十五終

てもそよやと吸そ項を臨ぐ礙と擲つ然しも空鬼は錯るど親兵衛ま早く直道の檜を
勝ぐその身を左へ閃りと避る馬上の剽姚斜ふ受りしその隙ふ投石は空ふ飛過く親
兵衛と厮戰ふ香車介直道は眉間を撲地と打破られて窮所の痛痍ふ一委時も
堪ぜ馬より墜と隊さてシげり倭てで鬼平吾景紀は從まつと驚ど瞬て二さび小石を
擲抓む那時遲し這時速し親兵衛も亦懐ふ准備の小石を含るまもなせ身を捺
返しくすと擲ん修煉神速毫も差ぜ景紀も亦額を打れて漬る血と共倨ふ一聲苦
と叫びも果ぜ脚空さるふ馬上より仆キそ隊さ扶け登時介添の武士直道の門人敬固の
走卒執鐵の奴隷まで驚ど呆れて皆東西へ走寄りて両個の傷瘡児を勦ろ抱ど
起そ贅力ある者はそれを駝ひ後ふ立つ者は脚を吊ひ又鐵奴まで二頭の馬を牽駐め
推鎮めて退りそ小門を出くと本意ふ思ふ血
老丘は景紀が小扱ふ誇りそ敵ふ乏る知ず世の俊傑を家鹿小禽ふ齊しや思ひけん

大江が剽姚ふ眼眩くそ同士斃るあるのそれらぜ及て那身は犬江が飛礫ふ打れて死活も知ぜ
ぬ一ふ直道ふ増ま未覚ふ是ふ就ても那少年ふ神の化現敢ぞ天狗ふ怕るべくと稱
そ感ふあらけり是よりそ又騎射騎鐵の試合あれば親兵衛も馬を返そ聽ひて其准備を
整るふ隊ふ射垜ふ靶子を建て各それをりそ其巧拙を試るべしとあり一そ種子嶋中太正吉これを
難ぐて稟さく靶子ハ一すの小ぶをりそせるそも素より是死物之人身ハ是ふ五十歩しそ其
長五尺ふあまれども則是活物之然バ一すの的を外さそその鳥珠を貫くハ易く乱軍奔馬の
中ふて或ハ銃砲或ハ弓箭をもその指を敵ど殪さえとハ倒ふかゑ投ぐ今愚意をのく
ぜの弦を倣さば親兵衛並ふ我们二人倶ふ綾蘭笠を戴ひて笠頭ふ小的ど建馬を縦横ふ
走らそ放者ハ放射る者を射ぞその投小笠推ふ猶かうそひらの願ふまの
弦ど許させのへ只庸常ろ射垜の小的い誰も倣べくハふその巧拙を見ハ足らば賢慮ぜ
仰ぐする只管ふ請るば政元聽ま頭を掉りそ開ハ極めて危ど所ろ倘其銃口一尺差ひ

れ誰ゝ命を喪ざらむ死ても恨ある哉と拉言書ゐ載れども弓箭火銃ハ格別ゝ並用々々と禁きびし正告又稟もやう御意ゐ悖ぐ罪没ぐりく恐れある業ゐ以ども昔保元の戦ゐ那為朝の強弓るも寄隊の大将義朝ら兄ゐ故ゐ射て斃さ只八ゐ頭鎧の緒を射断て驚走せ例もあ鉄砲い近比蛮貊載来る兵器ゐ其頭の倒ものとのべも善き者ハ弓並則ゐ勝ものと百発百中凝ひるいてくと諄復も改元少ゝうち笑ひて現ゐ至妙ゐ至りて八則弓箭と鉄砲とゐ要異ることを着ゐあれども中太ハ已を知るのゝ親兵衛ゐ修煉剽姚よく鬼平五の飛砾を避ゝ反て鬼平五と打撲ゝう。傷れい中太ゐ鉄砲もいまゞ心とまべゝ兄や奔馬乱撃ゐ遅ハ遅れつ各々前ゐ発ち丸ゐ飛さ憶ざ豈罰て假使閣ゐ造ゝ我八介添実検使或ハ敬言固の走卒と損傷るともあゝ欲是も亦知るべゝ然る危ゐ投ゐせゝろ。柱て小的ゐ用ひよと叮嚀ゐ儆めく竟ゐ其ゐ説ゐ聴ざりけゞ然ば政元ハ今躬方の一毋のヨヾく親兵衛ゐ拘れて不覚と取ゝまゐ恨とせゞ反て親兵衛の武勲ゐ愛て只一云云と最惜むい豫聞一ゐ弥増て実ゐ一人当千るれハ縦五六の勇臣と喪ふとても他ゐ換ゐ難ゝ思ひあるゆゑゝ又種子嶋中太正告ゐ立ゐ小的ゐ建んとのゝ修煉ゐあべゝ親兵衛ゐ雌伏しくもゐ吹毛ゐ疵ゐ求めゝ那身ゐその恥のこるゝ我君侯の面伏ゆゑ京家の武威ゐ貶ゐ似ら。いくく我銃口ゐかけて那奴ゐ結果けく恥ゐ雪んと思ひけれハ機ゐ臨て言ゐ設て請ひと政元その誂ゐ用ひられハ准備のこうゐなをゝ初正告ゐの計較ゐ廣當ゐ具ゐ示しく我と和殿と心ゐ合ゝて那少年奴ゐ前後ゐ推挟ゝて徂斃ゐ那奴不測の徴ありて非如意前頭ゐ免ゝともいふゝく銃口ゐ避ゐ暇あらゞやその誂ゐ仕ゝ遂ゐ捉るゝく説誘ゐ廣當急ゐ推禁めゝて不ゐ々愚意同ゝるゝとせゝや且我當黒の試斃ゐ犬江ゐ及びかゝれバ弓箭取る身の恥るゝ誰ゝ恥るゝとせゝや且我當黒の試斃ゐ犬江ゐ及びかゝ

其身々々の拙に故のミ并と輸うとも他を怨まず邪みて理義あらば況や已が勝
るを醋心のあるせゝ情地が謀うて穀まく欲せず奸虐の罪免るゝ小ると強て謀
るとも本意と遂ず憤と洩ず由るなのミうべ射つゞ的を射ざるゝ後悔とも
及びゝから壁言ゞ敵窓の鄙怯る口是浮薄の本性ゝて恥を知ずと云譏あれども
已と知ずとゝく戦ぜゝて負るゝ不爭ゞ敵の名詮自性狡笑ゞ堪る者るゞ謀うて
犬江を害せんと欲る邪念ゞ猶僨れる思止ゞあらず理の切ゞ諫めゞ正告ゞ听ゞ悖
然とゝて好ゞ其意ゝらゞ和殿と厲ゞ我ゞ母ゞ捨て衝と立ゞて有司ゞ
就て云云と笠的の矢を願ひゞ政元敢聴さゞゞ犬江が後安ゞをはらるゝ正告ゞ亦奸
虐の罪人ゞるゞ逮ゞて面と起さりさゝあるゝ是小人の幸ひゝ後ゞ人の言の洩れ祈親兵
衛これを吻知りゝ駭嘆ゝて思ゞ口那種子嶋ゝ小人るゝ今はらゞ齒ゞ揩るゝ足ねど昔
唐山宋の康王ゞ射るゝ母ゞ人をゞゝ必的ゞ射ざゝとの残忍ゞや倣ひけん或ゞ又今戦世の
諸侯の事々駑男を好む家ゞ運鉾とゞ并るゝ後生ゝ圀坐ゞ并せるゝ其の中
ゞ究竟るゝ後生ゝ圀坐ゞ并せるゝ其の中
央ゞ機関ある銃砲ゞ火を刺ゝ一人ゝ急ゞ牽輪ゞ
ゝて死るゝゝ傳命とゝ父母親族も哀まゞ傷ゞて廢運鉾ゞ穀れゝゝ高運とゝ
重ゝ兵ゝ用ふゝ云孫子ゞ将ゞ福女ゞ擇むとの今ゝ諺ゞ因る狭福ゞ高運女ゞ眉ゝ寄ゝ
その美ゞ是異なれども正告ゞ笠的も日ゝ同ゝくゝて談るべゝ獨秋篠廣當ゞ尾研の中ゝ
亢玉るゝ哉その言都て理義分明実ゞ是君子の風あり。猶てゞ祖先
ざる賢者ゞとゝ稱賛ゝて悄地ゞ批評ゝうけるゝ是後話ゝ介程ゞ大江親兵
衛ゞ秋篠将曹廣當種子嶋中大正告ゞ共ゞ倍ゞ歩立ゝてゝ笠前銃鉋を推ゝて
射将ゞ入程ゞ頃者ゞ来る天津鴻鴈遥ゞ北ゝる雲間ゝ南へヨゝく渡るゝあり政元ゞ假
厩ゝり逸早く見出ゝて急ゞ近習を走らゝて件の二士ゞの告るやう目今居ヨゝの天
津鴈這方を投て来るゝあり各他を射て捉りねゞ第一笠前ゞ親兵衛ゞるべゝ二笠前三發ゞ

将曹中太左ゟも右ゟも便宜ゟ儘せよ疾々とゐそせべ二十羽乗りて共侶ゟ其方を遥ゟ瞻仰るゟ笥前局極て遠けまゟ届くべ死涯りゟわらぶにりゐせまゐと思難るをゟ中ゟ親兵衛ゟ尋思ゟ及ぶ気色もなく介添の武士ゟ持る銕砲是へと受含るく那鴈程よくるゐ時天ゟ向ひて空丸の火薬を鎖て撻と放せば群鴈これゟ驚ひて列を乱して着羽々と降るをゐなり銕砲投捨弓ゟ笥前刺々彈と射る笥前局差つぎ一隻ゟ賓鴈強ゟ忘しく隕ゟ廣當と正告ゟ犬江ゐも段ゟ便うをゐくゐ弓笥銕砲共侶ゟ振仰放ゟ修煉齊一亦復隕る両隻ゟ鴈鮮血ゟ塗れて地上ゟ在り。登時廣當正告の弟子なゟ犬江ゟ介添の武士と倶ゟ三箇の鴈を倉抗て各射人の姓名を牌ゟ寫一脚ゟ結びて実検使と共侶ゟ随即假夜閤へりくまゐりゐ政元一箇々ゟうち見るゟ種子嶋正告ゟ銕砲を隕を鴈ゟその項へ斃る断られ頭ゟ失く鮮血ゟ流れ出て又秋篠廣當ゟ射る鴈ゟ左の羽れ下より右の背へ笘本深く串れて血を入深るのゐゐく汚れぜ軍犬江親兵衛ゟ射て隕

ゐ一隻の鴈ゟ其羽を縫るのゐゐて聊ゟ臭を傷られ移べ悲鳴くて連りゐ政元既ゟ検一畢く且歎び且感るて大々ゐゐび実検使ゟ召てゐゐ若们これを向とり見る銕砲ゟ近山歳是船来の兵器ゐれゐまゐ旦足をゐて翔鳥を斃ゟ隕ゐ一着ゐ中太ゟ修煉賞ゐべ一只惜むくゐの首の喪るゟ故ゟ一身不具ゐ貴人の食ゟ鱠ゟ備ゐゐゐ又秋篠將曹ゟ家傳の弓箭佳妙ゐゐを本間孫四郎ゟ伯仲をとゐゐべうむ就中犬江親兵衛ゟその羽を縫て鴈を傷らぜ支鴈ゟ礼儀の鳥ゐゐとゐて天飛ぶ時敢長少の列を乱さ先へ来ゐを来とらん後ゟ来ゐを賓とゐ便是呂氏の月令ゟ本文ある鴻鴈来賓即是ゐ諸侯の執贄ゟ於の禽を執まゐの来賓礼譲の義ゟ因る故ぞと豫ゐう儒官ゟ説るうもあれ仁も這義を思る狭射て隕ゐーのゐ傷らぜ殺ざ是則他ゟ名の仁字ゟ稱ふて愈妙ゐ而るも矧事の初ゟ猟箭届ゐ翔鳥ゟれべ先銕砲の空丸をのぐゐゐ驚て引ゐゐ臨機応変のオ高ー是ゟとゐそ廣當も正告もゐの便

さ沼て共ふ柄を見べう。依れば這回も親兵衛次ハ廣當次ハ正
のりふあつてあんまり
告甲乙丙丁分明れ小的の勝負ハ見るまも及ぎ正告ハ的を嫌ひて死物えとく難
せ不用意ふ種んこの矢を三士ふ他よと言詳ふ宣示ぉそ
親兵衛が射て隕ぉー鴈の猟箭を抜て勤り放せ其鴈忽地かりくと鳴々高く身と飛
ぉそ雲を凌ぐて失ふける。依而両個の実検使へいそぎく射場ふかつ来て隨即君命の趣を
親兵衛と廣當正告ふ固様々々と傳るふ單正告ハ敬服せ門人ぃをそうりく汝
達も学ぶるむ武士の戦場よ莅てハ敵の首を捕てそ功名といつて気介るを今日を
表裏ぞ鴈の首と打隕ぉーとそ第三番ふ做され我身の不幸とへまくのこう箭錬砲
これ這那と擬歩ー射て楞りーその鴈ふ疵ふへ鈎のこふーと餌を添ぜふ釣獲ー魚ふ異ふ
ぉまぢぁふ
ぉ偶中といふぞぉ第一番ふ做されハ憚ふぐう甘心ぁぐー世ふ錬砲りそ天飛ぶ鳥を打隕
ぁーふ我のこるると語り続ぐのひとそ偽へて後世勝負ハ定んで卒秋條主退るべ
共侶ふ西の小門よ歩て急く程ふ親兵衛も亦実検使ぎふ欺ひを演て退んとせー実
検使ぎふ推とめそ今ふ騎馬の槍棒送れり日影傾ぶへハ目今馬をまおふぎー権且
ぎせのくらぶそ言ふぎ果収間ふ両個の奴隷ぐ牽りく来ぬ馬を卒を薦る程ふ
又八九個の奴隷們ぐ呻唫玲丁ぶ東のさよふ肩擔連ぐりて来ぬるをそれぺ是六尺許
ふ大ぶ鐵の棒へけり當下実検使ぎハ親兵衛ふもち向ひて犬江生這回の敵ふ珠ふヌ
力の暴法師ぁく重六十餘斤ふ銕杖そよく使ふ和殿もヌ力のゆえあれぺ王君心を用
ひさぜそ作らーぬー鐵の棒重八十二斤あるの是ふ
擬べる器械自他相応ーかむ。あれをのそ雌雄を決めさぜふと宣ぃせー君命かくの如くふそ
と告るそ親兵衛うちつく。开を殊さふ御准備ゆく忝くそいひれいでく。とりつも蝶子
射具脱捨く袴の稜を結ぐ介添の武士ふ持ーる縅刀を挙ふあつ鞍ふをを抵け
乗る馬の足極を試ぐ推駐めく。其棒是へと指招げ又奴隷毎居ヲヲそヤと推建

る鐵の棒ホ力を勠ーてそ一歩抜ホ曳々と馬の邊へと寄れバ親兵衛ハ馬上より件の棒ホ奪て取試々腋挟む面色変せず自若たるヨメカホ驚く衆人ハ假廐閣も這里も推並くさそもくとなるホ呆れて倶ニ長覬て在り有様ー程ホ第五番の荳大鼓又鼓々と打鳴せ西のそらる小門より馬を找る徳用ハ打扮上ホ寫ー像く六十斤る鐵の鹿杖馬上ホ腋挟ミ後ホ悪僧堅削をアクへう吸ケて洩も知るや徒然草多説経法師ホあーねぐる釋氏も騎馬と早歌ハ嗜てよく世ニあるべうぎそとりて我在俗の昔より空門ハ羊を廃るまぐ馬ホ乗り大刀と舞る武芸も人ホ譲るべう因本事をえせぜそろホ居よとハヘ堅削然シハ内典外典ハヘにうえ武芸塾も馬上の挿ぶそ猛将勇士も誰ホホ我師父ホ及ぶ況ニ裏ホ聊失ありーハ高士のそうホ水漏りそ不意と鼓ふとのべるむ這回ハ先度ホ同ーう因晴の勝負ではへ戦ぎーく克を知るう憑ホ口と合ふ自負浪言徳用然ーをと領ふう馬を徐ホ歩せく假廐閣の邊ホ造る時頭を低る騎馬の礼愈早むる大鼓を拍子ホ仕と親兵衛ホ向へども既ホーそ他もホハ十二斤の器械をハとも易げホ推乃ふ心ホ九分の害怕ありさぶれ大胆虎狼の本性非如石人銅佛介莵ホ五丁カ士まれ棲ホ砕ける者あんやと思ひ復ふ聲高呼ホかやぶれ後生覚期とあるや行童ホもあつべれ和郎るどの敵ふホ立ハ大人気ろけれどホも亦和尚の役ホ敵ふホ徃生させん十萬億土へ走ふねと勢ひ猛く罵ハバ親兵衛莞然とうも笑く噴烏滸ー曩ホ那左右川の邊ホ咱ぐが本事も見知らせるふ徴ぢ老ハ馬を寄せぞやとハせも果ホ徳用ハ怒る満面朱ニ沃く大喝一聲敵ホ塵杖を親兵衛ホ亦鐵の棒ホくー丁と受とめ又打拂ホ奮敵ふ突戦法の勁勇ヨメカとヨメカ器械ホ亦鐵ホ音丁々と鍛工ぶ家の鎚ホ弥増ホ高响ホ両馬の頭ホ遣違ーて寄せて別れつとハ又相挑む修煉と修煉ホ劣らぬ優ホ見ハれども親兵衛ハ始より敵ふホ只一敵ふ壟粉ホ做ホふかぐもあーねど他ハ香西復六ぶ愛子ホく政元主と乳兄弟の因さある者

第五戰犬江親兵衛兜秀を懲らす

と一伸けば後の陣よろぼひむ為ぞと思ひて勝ちにそぎ権且輕く假譲ひて其疲労るを
待程ぞ果せず誠徳用が分ず過る鐵の鹿杖漸々ぞ持重りもて勢ひ衰へ脱荘べ進
退遂ぞ如意ず意ふ敵と親と励ー聲呼紋ひて連りぞ嘈ぞ透もあべう外ぞく
退んとのそ思ぞ氣色を親兵衛猶ふうと息ぞも艱ぎやと聲ふ作て徳用が鹿杖破と打
落ず發と散る火花ぞ眼眩くぞ怯むと透ざ馬を寄せく左ぞ棒を合ぞ直ーく。
右の拳ぞ握固めく眉間を臨ぞ撲地と棲の撻れく徳用苦と叫びて鞍の前輪ぞ伏
去処ぞ親兵衛猿臂を指伸ぐ帯と抓ぐ苞の像く肩より高く掀げら類稀ふ
勁力ぞ人皆駭くそぶ中ぞ堅削ぞるぞ沿堪ぎやうで犬江が馬の脚を拂ふく及や落ざ
んと思ぺ敬言固の走卒の持る棒ぞるを横ぞ截ると走卒驚ぎ罵ぶ罵外めく奪ぜでと角へ
ども力足らず突放ぺ郤舎ぞ堅削仰ぞるぞ沿ぞ棒を抱ぐて三間斤ぢら徳用ぞ放れ馬ぞ
踩躙られて死活ぞ知ぐを平張ふ當下親兵衛聲高ぬぞ人々ぞふるや勝負ぞ甚

麻佐志まで懲ぁー奔和尚を投救さ狭悄と措ん欲ぐぬぞぐくと問れて慌ふ実
検使ぢの答ぞ待ぎ假廃罔ふ復六ぢ声く聲ぞとけぞなよ犬江生勝負ぞ見えたり。
欄ぺべくぎ欄ちのぞ御詮ぞそのぞと扇ぞ用ぞ拍敲ぐくと慌ー喚杢れべ実検
使ぢもぞの誄ぶよりて俱ぶ陳謝ぶ及ぎぞ親兵衛ぢもぞと合ぜふぐくぞぞ儘ぶ徳
用ぞうち下ぁ卒ぞ遽與ぜべ介添の武士走卒も共倶ぶ出ぞる徳用ぞ抱合ふ又
仆れる堅削ぞ被起ー俱ぶ劇りて這両僧を左右よふぁて被扶け腰ぞ推ぐ諚
所へ扨て退けべ奴隷ぞ毎走ぢぞ放れー馬ぞ牽駐め武ぺ徳用が打落される鐵の鹿
杖ぶ素ぐうけつ共ー引ぶ曳ぐ駈ぐくぞ奥けり。徳而試験るの実検果ーべ政元造卿
近習とのぞ親兵衛ぞ召ぢると屋安ぶーそのと言ぢ。の故ぶ親兵衛ぺ掩膊踝緻を
脱祛て衣裳ぞ更るぶ暇あらぎ呂ぶ馬と鐵の棒ぞのぞ介添の武士ぶ遽與ぜそぐぶ
廃罔へまありーべ政元ぺ笑あげぶ席ぞ與へてさそぐぶ豫ぢーぶ十倍せる和郎の剛力

武藝精妙。実ニ神出鬼没の挿絵今昔獨歩といふべきのみ。其の美を上をいふに及ばず。

あげて愛敬せぬ人なし。是ハ當坐の寸志とて。若鮎と名つける大刀を親與ハ。

親兵衛ハ受戴いて。そが儘返して辱なう。分に過ぎる御寵褒賞。汗顔の外ハなし。勝

負ハ各時運ニあり。小臣聊爾の事あり。ハ亦是一時の幸ひのみ。何ぞの功ハいはむ。其御刀ハ

有功の為ニこそ賜ふべけれと。推辞を改元少あくまで開いらるゝ。謙遜辞譲も時

宜ニよるべし。今日倘和郎を賞せむの何をかいなまむ。

我意ニ任ねと連ねて強て允さゞれバ。親兵衛只得刀と受て腰ニ帯て又の日今日ハも

二三子諸と。淺痍撲折ニ惱むも勿論御内の醫師達ニて療養事足るべけ

れども。小臣神授の奇茉あり。用ひさせのいるべ一夕ふくその痍愈ん贈るべきやと請

ふ。問へバ改元喜して。疑ハざるを一段あるほべ一とゝ。

腰ニ帯る印龍を出せバ親兵衛も腰ニ帯る茉龍をうち啓いて。

伏姫神授の仙丹を此一分ちく。印龍ニ藏めて復六ニ遞與。そのやうその茉聊ニても百

日の療治千貼の諸茉ニ勝りて即効あり用ひやうハ箇様々々と。諭せバ復六欣び受て隣

即人ニ示して件の茉と徳用もの淺痍撲傷ある者ニ與るに。その時海鴻賢。香車介

道鬼平五紀並ニ徳用堅削ニ撲折杖瘡の苦痛ニ沿堪ぞ倶ニ龍所ニ在りけり。

疑ひ怪ぶく件の茉と各々用るに即効果して美事とく。痛楚立地ニ治して歩行そ

宿所ニ還るとぞ。是ニより件の茉ハ両三日ニそ痍愈く疼再起らぬ心地清

やかなりなど羞て久く屏居く絶て人ニ對面せぬ世の胡慮ふ。ハよけの介程ニ親

兵衛ハ又那小吏ハ等ニ送られて徐ニ宿所ニ退りぬ。隷僕ハ等ハ日の試數ニ單親兵

衛が勇武力芸の倩ふりと。ハ知りて駭怕れざる者なく皆謹く仕へけり。然バいまだ

幾日もあらぬニ親兵衛が武藝英名ハ多く洛中洛外ニ流れ傳へく神と敬ひ鬼と

怕れてひく口順ニ做ふ程ニ或ハ事を好む者ハ親兵衛の姓名を寫して門戸ニ貼るまでを

貼れバ疫鬼その家ホ入らざるゾどのホより愚直る民是ホ倣ふ〳〵犬江親兵衛宿と寫
老その門戸ホ貼らぬハ稀なりとも親兵衛の名ヲ呼と公ハ憚りそ
貌と改め式ハ小児の假寐して厭鬼る折其母親犬江来々々と屡呪てその子ホ告を
徐ホ敲けバ厭鬼立地ホ去るとホ後世犬江を詑幷りく犬の子〳〵と唱るのミ犬之子即
犬江子ハ訛るとハへとも亦以あり偶然るゝ也を知るホ足らん欤現ニ夕人たもかくの如ー況政元の
郎ホ日毎ホ交加ゐる紀二六ゐ㊧ゑ代四郎も亦件の事ハ趣を人の風聲ホ吁知そ胸
稍安くるゝゝ又その故ホ那人がいふ政元主ホ惜れて還さる日のあらざもるべからふ
まゝ死とだろホ一箇果せバ又一箇憂ホ堪ねバ立ざく五條頭ホ紀二六が還るを待つ
那実説と听ても曾ハ平呑ざりけり不題管領左京大夫政元主ハ次の日親兵衛を
招ぜさせく酒飯の郷食饌大うこゝろ〳〵その後別席ゆく面談あり昨日ハ良茶と贈
られーふより撲傷児们ハ一夜の間ホ皆癒りゆゑと吁えそう他们ハ和郎の敵ゐゆそ。

感せるゝ人ゑ者ゑゝゐホ友く仁慈の厚ゑハ仁とふ名ホ恥るとゐ先賢者の心操を感
おかりゝ今日の儲ハ勝態と舞ゆく又その薄義ハ良茶の報ひみそと解ホーく時服
巻絹金銀なごの幸出物を與ゐ居親兵衛ハ只その欽びを演て只顧推辞めども
政元ゑゞホ分説を听くゞ先夙く有司ホ吩咐て宿所ハ濱ー遣ーけり是ゐ後も政元ゑ
官教の暇ゐ毎ホ親兵衛を召よせて今日ハ庭の冉楓を親せん明日ハ濃茶を薦ん
とく暗譚ホ當日と消を毎ホ舶来の調度珎物或ハ武器金銀衣裳るゞと幾
番とゐく與れども親兵衛ハ欽ぶ色解ふを改元聽さゞーそ必宿所へ遣ーれバ親兵衛ハ
已とゐるぞその與へられー東西毎ホ目録年月時日まそ詳ホ寫着て那小吏なるホ預
けーゞ小吏等ゐゐるく皆長韓梶ゐゐ㊧ゑ隷僕们ホ守せけり徒て又改元へ
有一日親兵衛と暗譚の折恨ハ面色をそのやう曇ホ我若鮎の名刀をゑ目和郎ホ
取せホ一ゞび腰ホ帯るとゐぞ又我家の花騅ある衣裳を餞裳欤與へホ身ホ

つけ着させのまゝ召ぐろふ稱給よりのそあること問れて親兵衛答て稟さく仰寔おその以あら御佩刀はらゝえ御服章も重職有功の人々るまゝ賜りてゆゆしふ尚一介の功ろえ東籓の小臣ふ被けさせゆひさる御衣を思へざるふねども是神授そ大刀い安房の尭侯の恩賜の名物でひへ縦膝丸髭斫ともそれふ易べくも思ひのそ又這衣裳い安房侯の賜ふそ東西ふれべ破るまでも身ふ着て餘香を拜そ朝々夕々逆旅の憂を慰もの愚哀と査ーゆうべ疑ひ解ひへ言不敬ふひへども胡馬の北風ふ嘶くも燕雀の南枝ふ巣つるも是その本と思へば況長旅遠客たる者誰ら望郷の情るかゝや新恩高ふぐざるふねども菩薩忍の淺ふまふも願へ早く身の暇を賜りて放ち還させゆひるべ十萬金も弥増する御洪恩ふそこの方正直言權貴ふ捩まね忠義の心移られず改元ふ汚堪ぞく默然ふると半晌許憶ぞも嘆息そ遠忠義の後生るるる我も亦身の暇を取せまゝ上の御免許あらねばAゆゝふせんからず和郎倘上の御意ふ稱ふく安房へ仰遣されひ使んと宣ゞ安房殿推辞まろゝや推辞が君臣のふゝ違諚の罪と免れん因て悄地ふ閃べ近曽東國より里見結城ゞ反逆の風聲耳ゞ告る者あり且今茲四月の比ろよ和郎ゞ毋ろ七犬士並ふ里見の士卒數百名結城の古戰場ふ来會ゝて逸足寺と破却せまく欲ーるる乱妨の事の顛末我ゆく町ふ箇様々々と德用ゞ說ク詐の趣言詳ふ真紀示せゞ親兵衛ふ呆果て笑ひて忍びく答るやう恐れるらえの一芙ふ都ふ傳ふの譌のこまあるべゞ母ひのぞ那旦ふ亦小臣も郎方の危窮ふ幻會ゝて一辟月の力と盡ゝらゞ知ぞとのふゆのぞ首ふ箇様々々と尾ふ又箇様々々と供類の事徳用堅削ゞ奸臣の乱妨堅名鯉捕使の事他門ゞ奸虐事敗れて立地の罪せらゝ利益成朝の賢良善政その既ふ思各と解て又の日結城の法筵ふ會もゝ

我義兄弟七八名と蜚崎照文主僕の者都て三十名ゐ過ざるべし數百名と云誰ぞけん且主ゆくゆく義実義成親子の忠信を感の世以知る所そらまぎ成朝主と親しくも又成朝主も賢良の誉えときこゆる何を恨ゐ将軍家ゐ對しまつらく逆心あらんや徒ても猶疑ゐ思召さば那地へ間諜使を遣し王ひく地方の民ゐ听しめつゝ紛れもなべくもいかぞ。とらゐ政元駿嘆して然ても事皆差ひゐけの好々我せん術もつ秘よく。と推禁めく次の日両三個の間諜人を猛可ゐ結城へ遣しそ事の虚実を捜らせゐ往復三十日を限りとまつる最秘密の使ゐれば復六並ゐ有司仁さへらまぎ知らぬもヨくつける有徒しかども政元ゐ只ゐ親兵衛を留んと欲ゐ心已くして左さま右さる思惟るゐ他忠信の性ゐつも華洛のゐ能ゐらまぎ熟ざる旦少年のゐあれば友く村落を好とて只其故郷を慕ふのゐ居るとあゐ年を歴く。京師の花の香ゐ醉ゐ然しの某

ひし舊里の疎しくもあらぬべきのゐも亦心の移るところねば。新恩卒ゐ舊恩ゐ勝るゐ引れて感服せん然るも他ゐ武勇と表裏ぞ。女ゐあくまほしく美少年ゐものぞ倘我臥房の友と做さば恩愛是よりも濃ゆく。年閑ぎとも我股肱の家臣ゐるまく願べし我ゐ愛宕の行者ゐあれば敢女色ゐ親しまぎ男色も亦今まぐ然ゐなり模念せぎらしかども只ゐ是他ゐ與ゐべき年の初法空ゐるとも惜むゐ足らぎ悔もせじ艶聞をも遣ん媒娚をもく思ゐ心を知せん欲ゐ不ゐそれよりもうちつけゐ口説てこそと胸ゐのそゞろ屡召よまる折妾ゐ漫ゐうち解く親をを累ゐ酒を浮ひ情を餽りそゝろく哄誘さんと欲もれども。親兵衛ゐ酒不ゐを受戴くのゐヨく喫まぎ問ふとあるぎ誼て答へ問ざれば默然しとて。毫も礼儀を失ぎ語の次ある折ゐ只身の暇を願ゐのゐ。現墻固ければ狗児入らぎ。窓破れざれば風融らぎ。改元情慾の煽るも親兵衛ゐ言と

行ひ。亭も欠る所なければ。靴を隔て舞を捨く心地せるのミ。凝情と果さゞ臆念
いろ〳〵ゐ做りーかど。素より色の為のミ。それぢやう盈くゐ思ひ捨て。行法精進をよく
まるめろ。猶親兵衛を惜く放さぎ。他が身の暇を請ふ毎ゐ。将軍家の御免
許ありと。我までも伴り唱へ。久く豪留の関を許さぎ。嗚乎這改元の佞奴。奸奴
親兵衛が武勇と愛るの是切てのミるぐ〳〵更ゐ亦その容貌の美麗ーきゐ心窓
ひて。悄地ゐ龍陽の思ひと做まーの人を知ざるのミるぎ果ーて衣冠の小人るも。則
是親兵衛が一時の厄ゐ使ひ。造化の小児の所為るかも。益以るゐ在昔将軍
阪上田村麻呂の大宿祢が身長五尺八寸。胸厚一尺二寸。向て以視之が偃る如く。
背く以視之が俯ゐ仰ぐ。目ハ蒼鷹の眸を窩ー。髭ハ黄金の線と懸ぐ。重
と云ハ則二百斤。輕と云ハ則六十四斤。勤静機ゐ合ー。軽重意ゐ任せ。怒て則
眼ど回せば。猛獣も忽斃れ。咲く則眉を舒れば。稚子も早く懐ぐ。ちくを

りく。屡東夷を退征ーて。戦功図史ゐ昭然く。冠亜相ゐ登れども。豈栄雨ヨの
樂ど改ぎ忠信武略胆勇の。和漢ゐ秀ー古実ゐ因るゐ。今の犬江親兵衛ハ。
うち見る所綽約る。只是艶冶の少年ど。想ひを做せる女子小人。改元の如ひあり。又その武畧勇敢の英名ど。
者ゐ鬼神の如く害怕まく。邪魔を禳ふの門護とまゐの故ゐ。其形
貌を以人を取れば聖人も衍心ど。又その言ど。其行ひど観るゐ
ゆゑねば君子ゐ似る小人あり。誰ゐ八犬士ゐ似る者ぞ。其面貌と稟ゐ。
各大同小異ゑども。皆始あり終あり。倶ゐ仁義八行ゐ稱ぬぎとなり。看官
是を思ひさかー。間話休題。余程ゐ親兵衛ハ京ゐ在ると百日許淫りるぎ
宿の庭面ゐ冬枯の虫聲絶る。朝霜白くるりのく。氷炭合ぬ権貴の輿ゐ
陪堂ゐせらる身を不娯く。果敢く早ー暮ーけり。

第百四十回　惡報明を失ふて戞悔と事とを
神助妒ひ因く友て寘罰と成る

話表丹波國栗田郡茅師院と字せる寒き村ふ竹林居と喚做せる浮浪戸ありけり。
そ幷が野合の妻の名を於兎子とえいへる。原是豊後の大友が家臣ろーふ牟来文
淺ろーぢろー同郡潘の士某甲が妻即是と密山通あてありーと事發覚れんとせ程ふ
有一宵巽ら件の淫婦於兎子と偷ミ出ーろ共侶ふ遠く走りく影と駭ー迹を痙
め此の由縁を心當ふ這茅師院村ふ流寓ひ来つ於兎子が良人の貯財を竊ミそ
盤纏ふ充ける餘波猶二三十金ありーぶ隨即白屋の細小るを購求めそ膝を容
るの易ふ似るも坐ミそ食べ箱も空ー旦共ら性とて酷く酒と嗜むとめそ
飲食の友絶る間く貧乏揺い横りそ坐貝子の下ふ充るのミ絶ふ一稔あまりの程ふ
銭盡て見りる友ら朝ふなる煙と共ふ心滅ぬく思ふりのろ居ら隨主弱の本性ゆそ

学ざれども画意あり。走書ミそ人並ぐれ人の與ふ央れて薪を樵り草を苅り山田と畔
ち手力ありミも只得於兎子が芋を績ぐ稍繰習ふ絲綿の然ぐり細紀を枝ミロと
餬ふお足らざれば輙の朝の泥ゐ吻く心地のミもそ在りける程ふ居ぐ隣の屋主人ら六十
可の老人家ふ。箕利水九里平と唿做る。地方ふ舊紀荘客ぐれど近曽妻世を
去りて男女の児子一人もらく只此許の田圃あり幷を人ふ管け畔さ世そ那身ふ繪馬を
賣て活業とも是則半農半商之然がそ傚る村落ゆそヨヌくも繪馬の賣そ
やと看官訝りなふもあらむ蓋本村の東畫処ふ瑠璃光山茅師院。と喚做る。
一座の大刹あり因て村の字とも其山院の本尊佛ふ則茅師如来ゆそ佛の御長
三尺四寸二光四大ふ像ると云左右ふ子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥の十二神将排
列ぁて立ふ其面貌宛活るが如し。邇古推古天皇の十三年。百夏四月天皇。鞍作
鳥。鞍作村主。司馬達ら孫ふ命ぁそヨヌく佛像を造らせゆひぁらば高麗國の大興王遥ふあの

ぎ　ねー　ところさえ多くの宝を守り知りて黄金三百両を貢上りその笈泊料を充んと願ひ一夫の一佛十二神も當時とう　つく　ところ　らま　文明十五年を距る二八百一十九年名工の苗作祈る隨意自然と見あり　りやく　利益あらたなり。難治の病痾あるいは一世の願ひ一紀の内も有る。老弱男女何れかまれ　みるべ　やまひ　とまへ　まんぐき　まもう　通て皆只病痾と唱て深信祈請をそ利生を仰げば感応あるぞとふとう。然が古歌　なむやくー　よ　も南無薬師あれみゆく世のふかりそらも病ひるぢやと詠てもあるせて貧ーかりける女房の宜ぢ所縁をふとう心操ふ同じかるべ誠や這御佛近ぢ頃い殊更ふ流行せめ京浪速多良賤士庶丹後但馬播磨美作の農民商賈路の遠近も近るも入替り立代り詣る願家間断るー开ぐ中ふ祈りまうるー願事成就あるる男女いその本　ねがごと　ねんめい　ねぐ　命の画額をまおくせてりく賽願をそ假令が子の年ぬ本命ふ因ぢ画ー額をまるらせ丑の年多い牛をまおくまるを恒例とそ。其本命ふ因て求る十二生肖都てかくの如ー。　うー　と　うー　そ　开ぐ中ふ俗ふ寅童子と唱る神将殊ふ霊験利益あるとそ。本尊薬師如来ふ弥

増て祈る者ヨヲれい。各本名ふ拘らず虎の画額を供る。願家勘ふるぞ。と吟そうり然がてそあれ九里平ぐ村落よ似げる画額を売ぐくりへい。生活ふ做を故ふ這灵佛おうりそと。間話休題。余程ふ笈利永九里平い件の年の秋九時候より荒病殆身ふ逼りそ起居安らげーらぐ其比隣るとそ。初ふ旦於兎子を夾ふく。薪炊の支を任用ーふその後ふ異をも招よせ画額を売ぐくりへい。貴せそもそ活業の封助とも見ふよりそ。件の夫婦ふ二食日ふ日ふ腹ふ充く。瑣珞の鮮果ふ据るふ似られば陽あい九里平を勤り慰めそ他が心を安らえ。陰ふ巳ぐ田へ曳く水よう先酒價の為ふとそ。銭を偸ふ米を売縄む夫婦の柱事勘らねど九里平ふこれを知ぢ。病競ぢる老人の宅着へあらぢ憑ー。既ふ涯りと思ふ折言係々と他ふ示あそ。遂ふ已共を養嗣ふあり村長並ふ五保の甲乙ふ告るどそ。所帯を譲渡あーへ其出盛喜脊のるりーふ九里平い春ぢも待ぢぎ漸漸ふ病衰へく。黄泉の客ふるりふけり逆旅井の事。七七の追薦るども已共於兎子い文

嗇ゆく。人並るつゐ要せぎ恩と亘示て恩く
盂に盛れども。家廟へ茶湯を進せぎ夫婦
拂ぢ草とも芟らぬを。人譏れども物ともせぢり。僥幸ゐ時を得て。濡ぐであれ這家ゐ夫
婦類嗣ゐ做りーより。画額を賣るゐ愈利
丸あり。過ゐ其里より買含る故ゐヨく賣れど
地を同村る。山幸樵六と與做ーる。樵夫ゐ誂へ造らしてみづう十二生肖を画くをりく
駝馬運送の費るく。利市三倍の圀あり。加以義父九里平より相傳の田圃あれば初の艱
苦を甞も亡れて。後ゐ生活ゐ身を入れぢ於。兎子も亦酒を嗜め。餚を討め美酒を
欲る。飲啖ひふのを心を用いて夫も妻も共侶ゐ醉ふを洒ぢれば入る銭少るゐ
趕續ぢ。賣買の利のヨろるも九里平ぢ約ゆて足ることを知れる。及ぶくもあらざる勢力
ひかくの如くゆ。両三年を歴る程ゐ距其を年来の酒毒ゆやありけ。頭顱ゐ栗の像ゐ瘡
漸く出来て。梳るべくもあらぢ。ゐ故ゐ酷ーく頭痛ーと。夜も亦枕安うねば醫師と招き
湯茶を求めく飲も。あの洗ひもされど。效あらぢ。瘡潰て流る膿ゐ白酒の墨の漏るゐ
似るべく。或ゐ又腐りる粕ゐ似て最臭紀を拭ふ暇もぢれば。其膿竟ゐ眼ゐ入りて痛む
こと甚ーく目も亦充ぢるまでうーるべ於。兎子も倶ゐ胸安うらぢ。神ゐ祈ゐ佛と念じく茶
飯の價の支ゐを數えて。療類ゐ術と盡を程ゐ約莫半年許ゐ。頭瘡いみじうく
愈ーかと夜ゐ尚両眼共ゐ痛。こて曉天より稍睡るのを。倦る病苦ゐ拘つらひて賣買も甘で
ゐーー程茶師へ賽願ある。遠近人の與ふ不便くとて。茶師院より沙汰せられて。門前
ゐ経紀人ゐ画額を賣るとゆえーが記ま於。兎子ゐ怨ゐ堪ぢ。貼て椎六を痛ぢ遣
ぢて。村長ゐ告げ。茶師院ゐ命て義父相傳ゐ繪馬家枝ゐ曲緒を云云とのい連て他ー
人の賣る画額を林ぶんと欲るれども。既共が市店ゐ稍久ーく賣買ゐ懈りて。茶師へ詣ゐ
衆人ゐ便宜を失せうーと。これが茶師院ゐ役僧ゐ。その笑を分め。敢て願を許さぢ素

あひらぐ本村の国守より諫られる。菜師院の寺料ふもあれば勢ひ爭ふとなぐり。已共於兎子が憤のふ沿堪ず倶ふ罵れども。俗ふ云罌粟爐辨慶ぞとだろふく粥もう然ば已共ら明を夜よより筆把るぐくもあらばれば只得九里平が世ふ在り一時の如く又那京ら向九ふ画額を誂へ送らて是を於兎子ふ売ら与れども中絶ある市店ら届ふ菜師院の門前ふく別人ふ賣る画額ふ詣人ふ便よければ。ふく及ぶ兎只是已共ら先代より地方ふ舊ある店るとて此の花客ふあり。ふく賣買のヨヲ宣募初ふ欲ぜ且みづく画ぐるり。よう利いと細くて夫婦の口腹を頤ふ足るべくもう然。も命の蔓と思ひ義父相伝の田圃さへ菜料と借財の債ふ逼り沽却て他の宝ふ做あれば撮集めても澡塩草一握の米一緡の銭ぶ沿ふく。ふける貪の病の苦ひ已身の疾着ふ弥増る已共ら心弱くるりて。先非を懺悔の懐ひあり。万人奸民強盗も人とて本然の善心るれふあ。ぐれば有一旦已共ら於兎子ふ向ふ我順者つく過去ふ事を思惟ふ咱ら価を推ひてふの地ふ流寓ひ一始より幾程もう銭壱百せん粥料ぶも九里平曳の譲を受家ど繕て然一も世渡り易くーふ悪瘡の餘毒ぞ暴疾鼓脅着ふるーふ那田圃さへ繪馬家扶ぎ面ぐら失ひて幸ら死上ふ幸ら已ふ主君と親の洪恩ぞと忘れて他妻と走らる。ふる宜ふ訓ぶあらんぞむ是ふ就てもれ里平曳の譲ぞるる受ぐら年忌月忌ぞ思ひも出ぜ家廟の位牌ふ香花ぞ賜げーひもるりーと死者ふる冥霊ふぶさぞ朽惜く思れけめと心つけて身を措ぐふ呼ら兎ぞ天なそろーと因て渾家と商量ぎ今より迭ふ新ゆぎ九里平曳の菩提を吊ふべく且難病平愈の為ふ菜師院へ日参ーて菜師十二神の御前ぞ懺悔をろく念佛を百万遍唱へまつくん然たりあて尚先非ぞ償ふ足ざれば色と酒とを欲ぎることく今宵よる世ふ在る渥り我ハ渾家と雙宿せぶ各臥房ぐ異ふーて持戒不犯の信士男信士女とーもるなくべ不忠不孝不義淫奔の罪障竟ふ滅却せん現世ふくる。

晦冥より闇沉ふ迷ふ目の疾ひその隨ふして真如の月を瞻るよ絶てあぎとも死して閻王廣官の呵責の答を免る来世憑ふかも奥へ渾家のそろ甚麼ぞもと問べ於兎子の沈吟して現らるれば奴家も亦親胞弟兄の義と思ひで良久ふ叛ひてある身と倶ふ影と隠ふ迹を埋めて稍住熟ふこの村ふ牝牡そろふの年月を歴る里る親前夫の怨さえと想像れふ神佛も憎れて怪ふ黄縁る禍鬼の出ふる狭と讐より心つけても今更ふ悔て及ふ罪過を償ふ所據山雞の峯上隔て侶宿せぎ兄弟品ぞ一生涯ふ果さ切ても罪滅ふるべしと好主張ふ依るかふ奴家も倶ふ約ふしえのふして背ふ依えやとふ許ふ共を欽びて倶ふ社ふ身を投伏しそ豊後の城堤當国の諸神及瑠璃光山る茅師十二神を遥ふ拝を默禱して一雲雨時丹精を凝らけ侶而與を今宵より家庭ふ朝ふ廻向して百万遍の念佛を果されば臥房ふ入ふ又次の日より杖ふ携乃そ辛くして茅師院へ詣て茅師十二神を一個くふ拝ふまろて罪悪懺悔せさるとふくその次さ便路る義父允里平の墓へ参て必廻向をうけ暴疾發者のつゆも

熟る路もとけ迷ふ前向去来の辛苦艱難ふ依べくもあらざれと風雨の日ふ除くの外ふ勤約懈怠なろうへ於兎子もそれふ将火されて日無家庭ふ且九里平の命日ふ必その草茶詣て苔を洗ふ草を芟除ふ水を沃ふ花を供して唱名念誦ふ時の移るを覚ぎ又有一時ふ父母前夫の與ふ默念懺悔して罪障消滅二世安樂の情願都て誠をもそもその故ふ此の餘りあれふ一握の米半碗の飯をとも必ず児ふ施して勧生をせまで精進を旨とも況や夜毎々々ふの夫婦臥房を異ふして臥共を前店ふ寝在於兎子を納戸ふ獨宿れども反て睦ふくして絶て夫婦角口せぎ帯ふ表ふ志を同くふ約ひと齊くあて清淨無垢在俗の優婆塞優婆姨ふ做りなると人みる疎ふる親ふるも怪むまでふ駭嘆して一奇談ふぞ有徳而光陰仕茸して又四稔歴ふけふる秋の時候より臥共が目痛忘れてごくふえぎとにべども路と約ふ迷ふぎ物を探ふる鉄ぎも漏さぎ又その次の年の春よりして眼液出ぎるも流れ出て拭ふ暇あらざりふ約莫三十日許ふして眼液出ぎる隨ふ日ふ向ひても観ふ

文溪堂藏

くるぞ是より才ふ四五旦を歴て有一旦誤共を不圖起す程ふ失る面眼又明ゆく兎も角笑ふ置く露まそも忘そもと尓物そうしおぞ忘そ什麻参とだろふ單心の花開く芽出し丹楓の色出疎き於兎子を喚て恁々と生れば於兎子も共侶ふ天ふ欹び地ふ喜びく是必芳師如来の感応利益疑ひなーとふ誤共を感涙を拭ふもあぜ漱ぐを浄めつ恭しく送ふ芳師院の方ふ向ひて伏拝む深信胆ふ銘ドけり然ふ誤共もその日より筆把る枝ふ自由を得られ又樵六ふ誂て画額の下地を造らしてみづから十二生肖を画くふまの五六年椎斥たりける白人画多ふ有れば欹筆薦そ初ふ似ぜ彩色殊ふ美く巧ろぞとのめれば人も亦芳師十二神の寓助ふそと感悟して画額一枚賣る毎ふその直の内をもて銭三文放残一措て芳師院へ詣る毎ふ本尊並ふ十二神へ必是をまゐらせて愈宣福を禱る程ふ誤共が画ひて賣る額ふ價まちまち批評せまく賣買日ふ増く勘ろぞ芳師院ふく賣せる那門前の繪馬店舗ふ有甲斐やうくるりのろ。

誤共ろ京ろ向九ふ年来の債あり旦借財もヨろれふ做ても三百六十日家ふ宵越せ銭あぜ幵を猶夫婦両挌ろく於兎子ふ芳を績ろ綿を繰ろ或ふ孤獨ろ居人の與ふ鮮洗衣の賃縫刺して最精悍く挙動ふを村民们ふ見々聞つも亦一奇事ろと云人の噂も七十五日の涯りあれやや春夏過てふの年の秋の時候有一日一個の行童の最美麗ぷろを一箇の秋裏ろ引提て飄然とそ誤共ろ店舗ふ来ふけり這時誤共ろ店舗ふ在り画ひー額を彩色んとそ膠ろ着る火を吹く程ふ憶も頭ろ抬げてこれら這行童年歳ろ十三ろべく業平朝臣の童顔狭光源氏の稚連数日枝の愛護狭梅孺狭と思ふ可の一少年正ふ是丹花の唇画蛍の眉歯ふ瓠瓜の種子ろ並べ眼ふ二星の隈る如ふ異ろ身ふろ五彩の摺ふ泊ある夾衣ろ被て浄沢白練の奴袴ろ空牙ろ結る登時誤共ろ行童ふ向ひく和子且這方へ我ふ這頭ふ程遠ろ山院ふ侍る者ろ芳師十二神の御要いそやと问へば答て然ふとよ我ふ這頭ふ程遠ろ山院ふ侍る者ろ芳師十二神の

内中第三子寅童子が宿願ありて虎の画額を献まく欲ぬ画く十二枝の額を
孰の獣も好と云人の噂が耳知て則是をいと巧画を行童に受
然ういう價賤しき画額なれどその像だにと左右より涂抹
んと欲つ傷が建業さる虎の画額を拔ずて則是をいと巧画を行童に受
合すくほらくと視て現好々是よりよきは好けれども
博士態が似れども虎の素より這大皇國が絶てなれ
昔の画工が本ゐして寫ゐを後人并に又師表として寫ーうまで今が至れりとて
よくその毛と画く者が其骨格の錯ーを知ずや又よく形状を寫すものが眼口耳鼻髭
と尾と前後の脚牙爪までも似るを不当這那と比べ見るが由なけれ常言が虎と画
狗が似れるは画工世俗も知ぬ悟らで好と云和筆が虎の寫生のなきが故が
そと解ずや秋裏も徐やかうち啓ぬ我誂ありが是見よと桐の箱より
出ぬ故なる菊軸なり這行童が自柱の釘が掛れば趨て見るが是則画虎が
勢が活るが如くなれども白眼ゐて目子が睜行童又異が解てのぶやう在世日宇多天皇寛平二年唐朝昭宗の大順元年呉國の酋長商船が就き雛虎一頭と拂林狗二頭と貢物金岡畫圖が工なり世の人稱ず神筆霊畫とまた金岡則勅が因て其虎の真形を寫さまく欲り二個の児子相賢公忠公望ぬを相俱して虎を覩ること百日可親ぬ隨意是を寫せば三個の児子相資て着色が亦真毫と画盡せる画稿七八十幅が至れどもいまだ金岡の意が愜ざいらぐ虎の怒れるを見ぬやと思ひて徐々と豢奴が相譚が耳へ入れて打驚せば虎が忽地振然いとして身を起し背を高く眼を瞋らし爪を張り尾を建さ哮る聲が天震ひ地動き巖石砕け草木も廬舎も共が反覆る狡と思ぬ可りる猛威凄ーかりければ人みな

騒怕るゝそ中ゝ單金岡ハ伯若とゝて料紙を啓ゐ筆を染く瞋虎の光景を
寫さと半晌許既ゝて寫ゑ得ゝける其勢ひ大ゝさゝ尺ゝ特ゝ得意ろうけまゝ
稍久ゝうまく絹ゝ寫さよをさく寫眞を宗とゝつゝその餘の画稿ハ咸焼棄て是を
朝廷ゝ獻りゝゝ帝則叡覧あゝゝ精妙幾眞ゝ逼れりゝあれどもその眼ゝ烏珠
るゝよの毛什麼と勅問ありゝゝ金岡答奏さやう外國の猛獣を今や初て覩へべ
轍く筆と擱かゝろゝよの故ゝ臣等先那檻の邊ゝ出ゝゝ虎を覗ふと百有餘日
その怒哮る折ゝ方りゝ則他ゝ精神ゝ便ゝ去の絹中ゝ寫ゝ藏めとゝうべ胡意
眼ゝ筆を省ゝく目子とゞ仕ゝぎ低声さゞ誘言ゝ似て畏れある気ゝいへども量褒ゝ臣
勅詔ゝよりて画ゝける牧馬もゝ夜夜紙中を脱出て芳宣戸る胡枝花を齧ゐと
人佛ゝ笑ゑゝゞ隨即復その馬ゝ鮮素を追寫ゝより出ばゞりゝと人衆ゝ今馬ゞ佳客ゝ
奇瑰あり況や虎ゝ外國ゝ百獣の王とゞゝる猛悪威ゝ人材狠ゝ百倍ある毛属ゝ

ゝれゞ這画倘亦脱出ゞゝものゝゞ人を害ふゝ不測の禍あらゞ思ゝ怕れて眼ゝ黙せゞ胡
意鼓督七旦ゝ仕り終ゝの言差ひゞゝゞ那虎久ゝ
るゝりゝ帝ゝ然りや。とゞゝりふゝ心許るく思召ゝるゝ
病ともるゝ卒然と檻の内ゝぞ斃れけるゝ。ゝ折君を首
且感ゝゝ原来金岡ゞ筆勢ゝ那虎ゝ精神を奪ひ取れゞゝゞ斃ゝゝゝ寔ゝ馬と云虎
と云神筆二度の驗ゝ獨唐山ゐる張僧繇ゞ画ゝ龍のごゝうんやと奇特のゝゞ思
ける因て帝ゝ件の画幅を玉瞳子の虎と唱さゝ大ゝさゝゞ御秘藏ありゝゝ日嗣の御
子睨酬天白玉の目目泰二年ゝ至ゝ。太上天皇 即先帝 御落飾の折這玉瞳子の虎の画幅を
御布施とゝ。御寺の仁和寺ゝ賜りゝゝ久ゝく那寺の什物ゝりゝゝ近世元弘建武よゝ吉吉
應仁ゝ至るまで諸國の諸侯蜂のごゝく起り麻のごゝく乱ゝそ五畿七道のべゝゝゝ百石城の大宮
尚戰馬の塵埃ゝ塗れゝゝ名ある神社佛閣も並て軍兵の乱妨ゝ免る者ゝゝゝ這

各ゝ
壽軸も何人か奪ひ畧られ甲のゝち渡り乙の手ゝ
檀越某甲が寄進をゐそ然けれども今の法師
故画を認る兎虎の眼ゝ烏珠をゐ疵と許りそ物
るべきを兄ゝ信者のゐ故ゝ我權且汝ゝ貸て画額
虎を画く毎ゝ是よ倣そ日を黒ね力を竭さゞ我誂
餘も必價を増て名を後世ゝ貽さゝ至ん勉よそ
巻含りゐ相ゝ藏めて卒とそ遽與を神童の能辯
凝ふべくもあらざれゐ況ゃ心敬馬くまでゝ旦感ト旦悦
拙ゐ小可ゞ筆ゐ学び得べくもあらゐ倭る名画を師
縦這画を習ふとも心許ゐ抜ぐ左ゐ右ゐ仕らんやろゐ
頽ゐ実を書寫しそ遽與せゞ行童ゐ受含て

先よくゐの画を習ひねゐ越又折々這里ゐ来ぐ筆法縦筆意と教授ん但戒む従一條
非如權家の威勢ゐ逼られ或ゐ人千金の利をのぐ
べくぞ倘その瞳子を加ると云ゐ忽地不測の禍起
慎そゐと叮嚀ゐ教言めく卒とそろゐ身を起しつ
あらいそぐく立ぐ目送りけりゐの日於兎子ゐ村正ゐ老婆ゐ央れて縫刺の與ゐとぐ朝よりも
ゐて那里ゐ在りゐの後も亦行童の屢ゐゐ来ある折
告ぐしぐゞ久しくるまで知ざりけり却説閧其をその次
習ひ画くゐ始ゐ只懆とて筆の運びも左ゐ右ゐ一切思ゐのまゝ
又隔日ゐ忽然と歩ぐ来て閧其ゐ教をゐ倩神の妙要
進とそ纔ゐ一箇月許の程ゐ其大概をゐろぐしぐゞ行童又閧其ゐ誨てゐ曰ふ約莫生と活る
物ゐ画くゐ晴を要ゐとまゐ人ゐ男女あり貴賤あり及老幼あり善悪ゐ旦喜怒憂樂

愛哀苦の七情あり這理りをよく推考れバ禽獣蟲魚も皆相似たり是に加るに正面あり。
半面あり左面右面あり又仰ぐ者あり俯む者あり皆その情に従ふ所よく査せずハあるべから
ず我又その義を授んとて鼠牛虎兎の十二生肖を一箇々に画して其目子の入ざるを云云と
諭るにおよそ又二十日有餘にして拙からざりしかバ有一日行童来て異なるかな汝が画のごとく
ならぬ今ハ我誂る画額の虎を画くべし其画額ハ縦三尺横六尺もて足れりとも明日よ
り始て一十五日の間に作り出しなバ價ハ乞に依るべしとその画額世に見れて人人賞鑒做ざ
るハ必や汝が画虎を求る者多からん潤筆思ひの随ならむ然とても其利に惑ひて慎て
多く画くべからず在昔唐山なる李伯時ハ性として蚤歳より好みて馬を画きしかバ後竟に
微妙を極め求る者最多かりけるを或人悄地に諫て汝人の需に応じて年来馬を画く
事抑是我なりや佛説に云輪回の理り倘果してあれあらバ我恐らく死て後必畜生道に堕
ん願ハ今より改めて佛像をのミ画きかの夫尭舜の衣裳を服て尭舜の言を宣ふ者ハ則
是尭舜ハ又桀紂の衣裳を服て桀紂の言を宣ふ者ハ則是桀紂ハ然バ生平に馬を
のミ画く者千百幅に至るまで筆精馬に入るときハ畜生道を免れざるべし生平に佛像を
画く者千百幅に至るまで筆精佛像に入るときハ清果を得んと疑ひなし其義を思ひ
ねかしやと理り切て諭しかバ李伯時有理と感じ悟りて是よりの後馬を画かで佛像を
のミ画きしかバその名和漢に流芳せり汝が虎ハ李伯時の馬に及ぶべくもあらねども年来十二
生肖の畜生を幾となく画きしに今より又虎を画くとならバまだしく多かりく筆精此に入るな
至らバ畜生道の悔なかるまじく欲まるとも得べからず有繕れバ虎を画くの利をもて其の年来の借
財の債を弁ふに果しなバ亟に業を轉して佛画師になりねかし然る折ハ我必来て又佛像の
法本を取せんあつして夫婦の紛状猶我までも今のごとく勉て悪を袪けて生涯修善の人と
なるべく舊悪都て消滅せん倘この教を等閑にあらで惑ひて始に復ることあらバ禍瞬息中に
起りて餘毒他鄉に周流せん我一片の老婆心を耳に收めて忘れずハ先我画額をつくりね。

我又祈々ふ來て汝の画稿をとらまく欲ま。おうおうよと解諭せば巽ゐ額衝て感服して仰美
との設就中修善の一義ハ妻共侶ふ天地ふ拡言ひ尽もべくもあらで病ふ仕らんや願ふ所ほ
戯番も来まりて画稿の巧拙を御示教仰ぎたてまつると答る間ふ身を起き行童ハ異日と契りたま
徐ふ出てもく程ふ秋の日昇ふ短くて下晡ふもなりけり然バ巽を那行童の遥ゐ一雲時目送る
程ふ思ひ出る後ふ人あり。ふと見ふ丈夫と喚立る聲ゐと哥めかりけれバ巽を吐嗟と駭て急ふ其ゐ
方へとゆくふ此ハ是別人ゐらず則老嫗於兎子ハ瞋恚れる面色凄ふく茨の花ふ刺ある像ふ走
ゐとゐ蒐りゐ良人の胸前被捉ゐ推居ゐも堪ず喫醋ふ敦圉ゐ見恭ふく噫ゐ薄情人何事ぞ皇嚢
ふ先非ゐ懺悔の為ふ生涯不犯ゐ果さんとて臥房ゐ異ふせられハ比皆伴りの常精進奴家と哄
ふく艶麗ゐ那少年と擬入れて赤んさくの所作ろーと然とハ悟らで我ふ鈍くもあん身ふ
誤られて見ふ出てゆゐ遥る央縫刺ふ暇ゐ往復苦ーゐ侶挿ろハ什麼誰が為ぞや身れ
恭料東西の設銭のヨろりー故借を償果さんと思ふなろの真実情を知ぜ白ゐる止ゐ其ゐ

心今の浮世ハ都も鄙も貴ゐ賤ゐ推並ふ頑童調戯をせざるハふく家を滅ー身を殺ーる。
人の噂ハ外ゐぬあん身も亦戯氣ゐるその類ゐありける。今ハら思合ゐふ頃若奴家が長
殿許辞ー去ふ還る曛昏ふ那頑童が這頭より出ふ来ぬるふ約あり。ハ一日二日のみるね
ども知ねバ然ーも許りふ。地方ふ似げる。身の皮さへその容止さへ妖艶へ孰の御寺の幼童
やらんと思ひハいと疎ゐふく。他ハ我身の寃家ろの。什麼那頑童ハ那里の者那の時候
より誰媒娇ふく。ん身ハ逢初のひるその情由ゐん甚麼そやらふそや快のぞやと責る高
聲玉敞ゐ涙ハ稜ゐ蓼ふ倩りて猶抱る胸前を揺ゐー仰反らーろ放ハべくもあらじまだ。
聞共ゐ殆困ー果て且ものへその情由ゐ人放ちゐへとの聲も。吭稠りふく苦ーゐふ心地死ぬ斗ふく
覚ーゐ。ゐ蓼ふく桃放ちふく端を止め髪乱撥拇て然而行童ゐ来歴画額の事那身ゐ奇才ふ
教を兼ふく已ゐ画房ゐも上達ーる首ろ尾まぐ箇様々々と解ふせざでも於兎子ハ合でよ分
説を听ぐ〳〵亦復苛聲震立ふく実ふ然るふあらんゐハ始よろーて倩々ぞと奴家ふ知る

談笑間ふ今事問ふまゝ隠されゝ臭紙ふ蓋をー杯身の心禎童を愛るゝ女子ゟ知情八入ふ倍もと狎いへ中垣居ゝ疎まー身を不娯ーらふ獨宿ゝ憑ーゟゝ收世ふ幾まゝぐらゝ存命ゝ何ふせん死ーて怨を復さんぞ。その折思ひ知りねかーと怨ーゝ躯て肘近るゝ刀子皃ゝと揔舎まゝ吭をみづゝゝ刺まくせーを異ゝ吐嗟と攜り制めゝ舎放さえと角へとも妒婦の念力ふ當るべうもあらざれば迭ふ叫び狂よのゝ画額と共ふ踏摧ゝ阿膠の土鍋繪皇碟子ゟふせん粥る沢折ゟ外面ふ鴻立人ゟ事の光景を覗知りけん座ゟぞとざろ喚被ふ聲共侶ふ身を顕ーて内ふ入れども憐てぞ噪がぞ引提ゟける粟苞と二舛可の赭漆ゝ鱒をやをゟ辟土際ふ圀ゝゝ夫婦劇ゝ於爭ひの間ふ分入り推隔ゝ於兎子ゞ持る刀子を奪ゟ後へ投棄るを三人夫婦ハ訝ゟ見ゟべ則別人ゟぞ。樵夫山寺樵六ゟ。當下樵六做得貌ーゝ。左を見ゟ右をゟ。ゟ。ゟや主達外聞ゟゟ山毋ゟゟ鬩諍い故ーそあゟめ甚麼ぞやと問へ於兎子い端を定めゝ。那行童のゟ。怨の趣恥も識も思ーて。引提の水も湯と做るまでふ。嫉妒の酸遣る湍ゟ。事の顛末徒ぞと告まゞ聞ふも行童のゟ有ける隨ふ鮮示ふ我猜まるふ那少年ふ必是凡夫ゟあらゞ熾盛ゝく茅師院る。茅師十二神の第三る。寅童子を信ーまゝゝ祈まゞ必祥瑞ゟ影ふ立又夢ふも見ゝゝ。感応利益多ーと云風聲ゟよゝゝ思惟るふ恐ゝゝ件の神童ハ我ふ感応あるゟふ寅童子ふて御座らゟ。と風も心つゝーゟゝ胡意於兎子ふ告げゝき。然ゞてあるを幾ゝ間ふ我画進ゝ。大画額を。寫くふーも兄ゟゟゟハ則利益の明證ぞを今一句も告るを等れ必喫醋い婦女ゟの癖ゟ。神慮ふ背く怕れあゟ。御勸解禀さん慎ゝゟ。嘯樵六叟那誂の大画額ハ三尺ふ六尺ゟを。洒家ふ課ゝ。大魚蝨一隻を画せらる晴技ゝ先材を擇み板を枯ーて日數を差へを造り歩ーね件の下地を憑むぞよ。とへ樵六冷笑ひゝ。开い奇特る事ゟゟ咱笔ハ一切信ゝくゟり。都て名山諸寺院の縁起ふ怪誕不思議の事ぞ識ーゝ普く人ふ示ゝ各祖師の道徳を世ふ高うまゟる方便のゝ千

一蹲を費して
樵六
夫妻を和ぐ

百年の昔の夢を見し者なければ然でも済むを近く壁書を取くいで去歳の夏隣村より
弥勘太の息子宇吉嘉四郎が葦草の虫を捉て在りしに二八許なる一個の美女子の單其
頭〔迷ひ来て路を問れしよりものの〕られて春の心の堪ざりけん理なく囲中へ被入れさく嬉
合の逮び水既に歓會の時水荏苒く宇吉嘉四郎が忽地に一聲苦と叫ぶ程水在つる美
人の消亡く那身は垂慙や陰茎を噬断られ血水塗れて死活も知ざりける後水所親の
見出て療養なども叶ずして死ざるをなん一身不具の人水做りて男女の道
絶れば意もあら出家して南洲田の玉藻寺の御弟子水做りぶ开も野狐の所為な
る狭然らぬ山鬼水魅され狭近郷まその胡慮をく生涯恥を雪めさかり任なるもある
ぞ和主が得意の美少年も亦る類水そあらむぞも非如名作故物でも素木を刻て
造り成しる寅童子が頑童水化てものべくもあらぬかの理を思ひあるぞやと鮮をて醒
るが如く酔るがごく悶然と呆て頭を極く在り陳ぎる銭もあらずと於兎子が見り焦燥く

縦頑童が狐まれ又魑魅まれ寛鬼まれ主の心を惑されて飽まで奴家を欺給ふ事の
然ハ九の世を易るとも盡る日あらんや然ばとくあを出く歸り給へ
ぉと奴水儘して復刀子を含まもる椎六急ぶ被林示めそ潑轍詮轉ん身も万一主
張畢竟年来深信が過て夫婦侶宿せぎ常精進ぁれどもそ疑ひ起りそ口舌もあ
れ嗜酒ぁば喫も好又今宵より枕を雙く宿らば立ぶ腹冷く迭ぶ憑かゝ
ざらんや自五戒を美守りそ俗願忍ぐくまとも夫婦夜も日も角組蓮盧の目を歩さ
節の短ぎを數く濁ぶ漂ふまでぶ家理らぎい何ぶせん既共に主いうぶぞや幸ぶ聖明の醉
醒く咱ら意見ぶ就んとらば今中直の不孟させんとのふを於兎子ハ推林示めて愛よ
山幸主其截判い憎くねども陽だらの和睦ゆく奴家ダ宿所ぶ在る取日毎ぶ又頑
童奴を引入れて樂まらば今日ぶも増く悔かんを爭何いせんと詰るを椎六悠ぶも
其頭ぶ毫も脱落ぁるぞ其妖物奴いせん徹ぁも耳を借ねと被よせく詞せらく

耳を示せば於兎子は満面うち笑まゐて。然也と頷くのみ。登時異なる又記するものを。
釋迦牟尼佛六ふうち向ひて。現趣ある理の教諭我も亦那行童を神秩佛秩変化物或
実に其事なり。扈従して在る神童秩七ねるまで。ねども董酒溢然而ゐる夫婦迭に
戒めて。羊歯齒の身のいろいろ。那男色を慈しみ。業ふるまでねども。遠慮を過て於兎
子に告ぎ又那幼童の名も来歴も居るとからまでも。思ひ入れて。我知慧足らぬ疎心の失
信の餘慶とのみ思ひ入れて。只深信の餘慶とのみ思ひ入れて。我知慧足らぬ疎心の失
疑まで。悟る口舌も及びしと覚ての後も今で知る。去の年来懃も深信も礙り渡世も礙り
亦只念佛三昧も礙るる故も魔鬼が刺す障碍を做すまであるむぎうん然ば意見も礙ず。
則今日より精進関しで。於兎子が心と休めさん縦五戒を持ぎとも。悌ずも淫事を誘鬼
ぞとのみなる世の常言ても我身を護る訣宣ぞ。兼引くも樵六听ず。
ぴぞ并も諧甲斐あり。賀ぎしく善いのぞげ。と俗ゆ。即坐も和睦を整ん先なりとらるも。

衝と身を起して。壁際なる鏁と小苞を引提ぎ多ぐ故の中座も按排て。今は大ぶから喃
御夫婦先這鏁を見ゆひ然なる惜ぎ東西もあらず。却這鏁舗ぬ曰あり廿年新
田多江五右衛門が。新婦迎をぎうとて往日餅を餽来されー。その壽祝をぎらんとて。諸白三
舛塩魚三尾引提ぐ這里を過る折。主連夫婦の扣擇を見過ーかぐく分入りー截判
役ぬ烏尚ぞぐ年来画額の下地を送る我ゆを得意の花王ぞ。已とぞぬ骨を折ぐ。
今是和睦の一段も圏めて明日も延さんぬ江五右も祝義も異日ぬぐ今這鏁を開くべー。
於兎様地炕ぬ火ぬもんぞ是よく炙りゆひ。と憑ぎ披く菓苞ぬ塩味宜ぎ刺青花魚。
市も嗜る酒の香ぎ魚肉の臭さ年居多絶て久ー記珎物の自畀を穿ぬ堪難る空共も
倶ぶる俤ぶぐ。含めて出も烟塵折焼柴の落煙吹起せども。胸の火ぬ滅ー於兎子ぬ精悍ー。
小碟大碟執具ひ濯ぐ両箇の茶碗酒中圓れと樵六も。挑持差配飲同士の献ぐ酬まぢ
日ぬ暮て二更の鐘の鳴ら如間も傾けぐらー二雑鏁足ると知ねぬ未飽ねども。主も客も然ぐ

第百四十二回

東都 曲亭主人編次

両滅を誣て辰巳誰簡を貽せ
故事を尋て政元名書畫を疑ふ

却説巽於兎子が告曉絶て久く侶宿をまうる杖と枕い並頭の蓮花かも優るべく。横の袖へ比目の鳥の翅かも異ならざれ我一句彼一句相譚ひ暁も愉々快々。巫山の雲へ溺愛の山より起つて夢を載せ楚臺の雨へ恋憐の窓を打てども人知らず。蛺蝶花の戯もてく曇露を負れども飽ざ。精蛉水の尾を滴して浮る温冬の卿合歓の花醜態凝情迭ひ禁ぜざるその暁天の稍疲労もて初て暇ひ就ら。べいふもて天の明うを知らむ日へ高さ三竿許外でへ晝飯炊ぐ時候夫婦驚覚俱ひ起出て巽へ遽しく戸を開き火を打て茶を煮る程ひ於兎子へ湯を汲ひ漱ぎ

ふ皆醉ざるふもあらざれ。樵六を卒退らんとて盞を辞し欵びを舒く坐を起き框ひ脚下沿やと於兎子ら乗れる栖楷燭の夜風ひ馨く片明り自送果ら門鎖く臥篳儲も今宵より西枕ひ孤横陝ならよりや三布蒲團四席許の小坐席ひ相譚ひ暁も浮宿鳥彼岸忽地慾海の深ひ罪過又ばらふ始よ還る黒潮ひ染るや蚤の腰苴衰ならで濡く快樂ひ耽りけり。嗚呼惜むべ巽於兎子が懺悔の勤行好とへども原ら罪悪重ければ一善いまだ全うぐ早く衆魔ひ打破られ若丈至誠至信の祷まへ神佛感応あり然るに忽よく疑へる利益反く寘罰訓ひ做ざるこをゆるべ。畢竟於兎子が酷毒嫉妒の邪精ひ事敗まく足ひ加るま樵六の封助も粟火星より又煽まく遂ひ巽ら浮蕩の骨銅を錬ーて尚飽りとせざる因果を看官思べ。這話未盡さゞも楮數既ひ涯あれば巻を更さ下の回ひ解分るを聽ひかし。

南總里見八犬傳第九輯卷之二十六終

顔を拭ひ手脚を洗ひ鋏鬢を梳て梳髪を燃脂白粉の故さを温れて新うそうる三十
婦人の化粧生平より意を用ひ一身粧約一晌有餘やう多く造つ裏一折酒肆の小廝が
味噌醤油の所要ろいろ来ふけ旦ハ於兎子の醜ふ商量つ先山並ふ截判の歡びを
いんとて昨宵樵六が遺一措ろ那際鱒を遣七旦此美酒二三舛と魚ろ擢鶏卵二三
十を包ふて來よと件の小廝ふ吩付旦ハ小廝ハおろ得走のくて程一もあ子その二種を
引提てよやく来ふけれハ於兎子又是を小廝ふ贈て樵六許赴さ一ふ樵六ハ宿醒ふて聊恙
ありけれハ分を休めそ宿所ふ在つ當下於兎子ハ樵六が其酒舖を復一饋つて昨日夫婦
口舌の折撮合旦ろふとう風波夙く理つ一事の歡びを云云と演ろを樵六聞おをとの
歡びハ然るとろがら鱒酒菜さへ復さへ熟親うひ介意ろ昨日も既ふいひけう一
年中画額の下地を送旦ハ咱等ろ花主のお身達ろふ那許の酒費一うろ報ひせら
る中ふうんやと固辞を於兎子ハ推禁めて否ろよ奴ろ今来ねろハうの折の歡びのろらん

るかもわん身ふ傷んと思ふ玉ろさへあるものを否ようや叱らそ受ろひれいうでく立寄旦ハ樵六
才ふ點頭て其意も既ふ精一うろハ那頑童の去ろいむ昨宵も真ろ示を一如く其
義ろろ胸安られ意ふふ這来由の山院ふ然いる美麗ろ行童あらハ甲も見ろても見うと
云噂必高ろろ於今まで聞くことろうりハ必是老ろる狐狄狸の土を弄ふ生ろ変化ふ疑ハ
ろ一咱等山ふ入て木を伐る折動もれハ山鬼の爲ふ嚇ろる間ことあり登時准備の
火銃をそやく其方へ推向て忽ち放ちうち襲へ其妖怪立地ふ退ろ玉ろをの玉
ろ一ふの故ふ我猶夫ふおられども年来這鳥銃一挺を貯持り明日ようり七山
挿を夙く果七かへ来て那妖物の来ねるを待ろ必よ狙撃て其本體を見さバ
異ろの惑ひ覚てのようふん身の胸安ろらむ咱等ふ任一ふれとふふ捕るごく説誇を
於兎子ハ急ふ推禁めて开ハ勇一ろ哀ろろう倘那頑童ハ変化ろそ真の少年ろうんふハ
人を害ふ罪重りようく思ろぞハ後悔ろともりふ七及ぶべろ殆ろ所行でゆうそやと詰ろバ

樵六冷笑ひて然ばかりの遠慮あらんや聞くに頑童が寄宿所へ交加来ぬる日は朝ならずも又晝ならずも日景傾く下晡の時候なりきといふなれば是によりて思ふに枇狗天狗は陰物なれば日を憚るゆゑ夜を宗とす是其真の人ならぬ明證と做すに足れる者なり況や我這睛をもて相一相るに及びて他は変化歟真の行童歟いかにして謬つべきその義も心安かるべしと解きて於兎子は歡び信て然らばおん身に任してん明日よりして山樁を疾果し来て埋伏をせられてん事こそ願しけれ奴が先に見出しなば走来て疾くおん身に報ん時分を違へずと謀し合せて告別て於兎子は宿所へ還てけり然ば踞は這計較を告られざれば一毫も料り知るよしなかりけれども於兎子樵六とふ両魔王に佛心を打破られて年来修せし善行を千暗の澳へ放下せしより神の祐も戒さへ疑ふ故に畏れも甚く似るは鳥と俗にも云於兎子が日毎に薦る随意酒を喫て餚を討ぬ夜へ亦夫婦枕を雙て淫酒の樂に耽るのみ賣買の業を寡さに借財の増るも増ざるも思ひねまでになりしかば伴つて月を定めて人に錢を借て還さぬを是よりの後義父九里平の忌日にも精進せず家廟の家火の要なきを蔵めて架棚の足ざるを補ひその墓詣も薬師詣も排斥て見かへらず剰又那神童が誂る虎の画額もその等閑にして只虚々と日を過せば自餘の画額は故らに賣盡すまで敢画かず然れば踞が怠りまでに不似不善の根に返るも嫉妬に纔て内を怕るゝ本性浮薄の癖なれば於兎子は只那男色を防んとのみ思ふのみ是よりの後村長より召せども病着に假托て辞ひて日毎に宿所に在て疎遠十四五日に及ぶ程に有一日又村長の老婆が小厮をもていはせけるやう頃日はなどて来まさぬ秋も早半過て月瞻る頃になりけれバ綿入る衣ゆくあり央銭に望あらば汗へ左も右もしてまゐらせん明日は夙めて来ませかしといはせし人を族きするも涯りあらむと思ぼくる口状に稜なければ於兎子は今又固辞に由なき他にも央銭の前借もあり然らでも萬事差配に任する長の宏眷に憎まるべからざる債の朔を寛解る便宜なきまるにしむと尋思を定めかくべしよしを答て

雛て使を返し。つの美を聞ふ告知らす其次の朝辰牌時候より。於兎子が絲鍼の小裏を。
抱きつゝ立出て村長許赴く折先樵六の宿所ふ立寄て悄然ふ告るやう。奴家今日ハ悲き
情由ありて已ことを汐ゞ長殿許召ことありけり日暮て還らん故ふもん身ふ添ゝ侍ふ那頑童
奴ハ久く呉れゞも出て来ぬるをいまゞ見ゞ。奴家が在らぬを幸ふして引入られゝ事何ぞせん願ふ
ん身今日一日のみ山様を骨休ふく我身ふ代ふと留守まゐれ其立舞ハ一緒まれ二百銭
まれまのらせんと。漏ふ聞ふ五樵六聞果ゞ。開ふくと日暮消ゞ東令疑ふく。那妖物も出来ぬ好々。
怒ふもん身の宿所ふ神輿を居て做ことをもくく。縦地狗まれ天狗まれ目ゐ見やうものをく。
我せん術あり今より悄地ふ准備して主の宿所の頭を守ことを。便宜の樹蔭ふ庇ふ柴
垣の裏ゞふ躲れて待ふまくをく。縦地狗まれ天狗まれ目ゐ見やうものをく。
と捉るゝ時我ふ在と任ことふん身ふ長殿許。疾ふ行ゝ多人のたゞ甘ゞ於兎子ハ合笠大黙
頭て伝ゝ逃ことを左ゝ右もふん身ふ任ことふ作りてん脱落のふな去らゞやと。悄語畢ことも尚遺る

詞の露をかけて憑む秋の月影の朝曇早霽ふ瞻仰るふも空の業最要の脚ことゝもして
村長の宿所へとてゞりそぎける。あの日巽ふ生妻の留守しと。早従然の堪ざるの銭ゐゞされゞ
酒も汐喫まで。朝より出て店舗ふ在り一旬有餘を困ふて足らずくる十二生肖の画
額を此彼と画く程の秋の日暮れゞ短くて下晡ふくる。虎の画額ハの
頭ふ在ことなよや主人我誂する。虎の画額ハの
おうおう那画額の支へも。何付ら其一次の日より小可風寒ふ自ざれて昨日まで臥て在り
ちゞのまぎ遣ことも出ふ汐ゞ願ふるゝ又十四五日の用捨を仰ぎなるゝのでくとうち勧解を。
行童ふ所つく恨る色ふく。然ぞあらむく。汝夫婦ハ浮薄の本性我知ことて徒ふ大事を。
課せふあらねゞも汝等ふ稽率ふふ那舊悪を懺悔ふ。新ふせまく欲ゐる。一善既ふ
進むでとも衆悪退くふ自然の天理且是より彼岸ふ到るべふ慈悲遠きのあらざれゞ我佛
ふ帰ふ因て試ふふ原ふ罪戻深重ふれゞ鬼神徳ふゞ國法借さゞ。我慈悲反て鬼

家と做て始の弥増罪悪ハ則是業果と侘ふる鳥尚の艦呱兒ハ神筆名画を取せて疑ひ思ふ
ム矢のあらん衆是その貨を抱くが與の他郷の血を見る禍ハ賢者を林鋤の路塞けゐる福ハ
申ありて巨驥東洋の遥るのこゝろまで貴人敝衰の世を憐まで得がこ死化貝を愛るが與ハ年來
民の膏脾を絞ふる奢侈をも做る美さあべ神祇の勸懲佛陀の慈悲ふる矣
機を分教あねるも若仁ハ是土中の骸骨團主廳下の餓鬼ゑれば今さふ亦何を知る死
已ぬんくと丸彈七躯て踵を旋ーそ衣ハ処ハ一向も登ハ由ふく且羞且畏れる
背ハ冷汗を流ものゝ頭を低て默然ふ介程の件の行童ハ罪が宿所を立去ものゝ
百歩ハ及ぎ路の這方の冬青樹の蔭の張ふ一人あり是則剛介ふる亦那山李樵六ふり
寃消ー鍊砲の火益を鑽て槎と放ち憐むべ一件の行童ハ背を胸まで撃抜けん
一聲苦と叫びも果ぎ身を仰反らーと仆ふけり當下樵六鍊砲引提ふやく樹蔭を立出て
死活のほと走寄る程ーもあらぎ涙ハ赤あの光景の胸を浸ふを吐嗟とこふ身を跳らつ
出ふハの慌ーふ畢底草履守あ今を走つて其里ホゆふく相ふゐ駭ふまーハ那行
童ふらで今村長許ふへ来かける放兎すハ胸
鮮血ハ襟さ帯さ韓紅ハ染做ふる窮呼の銃傷ふほーと不死の藥も届ハ三魂
既ハ天ハ歸つ六魄輒地ホ隕て又活べもあらざ
居ホ槎と膝組あを胸を敲き聲戦あて却衍ゆ
ふれ於兎子の刀自の我統頭のかる死ハまも又狐狸の妖術ホて其今らぬその人を今幻ホ目ホ見
ま了歌ふまーのあらぬら怪ーさの過て及ぎ差池失
魔のほんこぞろホ空さ髪ハ披起ーうち返ー
呆ふて一要時忙然ふる事情を知よーもふ
眼血暈り歯を切つそ握ふ拳の遣ふ方もふく怒りホ儘まる聲高ふホ這奴大胆妻の
雙ハさーふら何等の分説あらんや覚期を甘ハふと四馬も果さぢ脚を兎ーと丁ど蹴ふ蹴られ

支御猶願
名供乞

残忍吹毛
求疵
短慮窮賊
智出

輾ぶ樵六が身を行ふ敵對せざ泥ぬ塗てくも
ぬる程の巽八猶も怒ぬ沸勝ぬ勢ひ禁むべくもあらざれば遂ぐる銃砲拿るもさやく
振刀て樵六が頭を莅て礫と擊ぬ拳の浮もぬ不祥の時運樵六を百會より眉上三寸打破ら
ぬ一憂時ぬ沸堪ぎ咤とゑりぬ仰反てそ盡息ハ
ぬ安見ぬ骨砕けぬる必死の深痍ぬ一擊
絶ぬけり然ぬ巽ぬ妻の寇家ぬ立地ぬ擊重
後悔あり樵六ぬ豫ぬり那行童を狐狸の妖怪ぬぬりと思決め見識あれぬ行童の
來ぬる立覗ひて這銕砲ぬりそ方僅擊捉まく欲ぬ妖怪前知の術あれぬ那身なるべく
免れて折から村長許ぬり來ぬける於兎子を擊ぬりそぬ怨を復ぬるふぞあらむむら支
差錯ぬ出るとぬぐも樵六ぬ我宅眷を殺ぬ鮮死の罪人ぬ結托て領夫訴禀さぬ必首を
刎らるぬ怨を復ぬま易ぬるべぬ我一朝の好ぬ照人ぬけるべぬ我身友ぬて凝ぬて於兎子樵六が非命の死ぬ我所爲ぬりんとくも何なりと

よくぬひ鮮んや理を持ぬる非ぬ陋さぬて牢獄ぬ繋れぬ罪ぬる罪ぬ
死ん折悔ぬ八千度百千度胳を噬ぬも及ぶべらず左てもぬの年來幸ぬ上ぬ
幸ぬりけぬ家ぬ艱ぬ禍鬼ぬ立ぬ離れぬ人ぬ蹟を繼ぬるべそ今ぬ危窮ぬ至りぬ妻ぬ
喪ぬこれぬのみ日月ぬ照らまぬまぬ他鄉ぬ走らべ厄解けて今ぬ憂ぬ甚ぬ後竟ぬ昔
語ぬ做ぬまぬでぬ幸ぬりぬぞや。と肚ぬ向ぬ肚ぬ答て遠く先四下ぬ見迎まぬ秋ぬ日早く
西ぬ沈て點燭時候ぬりぬれば。甲斐ぬ素ぬより人稀ぬて。但來絶ぬれべ知る者あらべ。折こそ
よけれと徜徉ぬ計較ぬ奸智ぬ貽簡ぬいまぐ画ぬ素骸ぬ額を
引ぬ世筆を添ぬる画研ぬ池ぬ浅けれぬ深さ仮倆ぬ
て。筆を捨身を起て。絶ぬ逆旅ぬ准備ぬ那無瞳子ぬ虎ぬ豸軸を祝ぬ裏ぬ背ぬ駝ぬ
ぬて。又思ぬ我頃ぬ酷く錢ぬ憎ぬて。鏃一貫ぬ餘財ぬあらべ。衣物ぬ皆四ぬ包ぬ被られて久く
鮮舖ぬ庫ぬ在り。身ぬ行客ぬりぬとも。明日より七仁麼何なりく長き旅宿ぬ盤纏ぬ乏ぬや。

我宅家山幸樵六といぬる年子を先こそ妻を喪ひて單身ゐながら銭あり者ゆゑ妻を呉
さいねんことをかたり人を殺こゞ血を見るべし前路の駄賃分をこそ那奴ゞ宿呼を捺捺ら
纔にあらん噫公也と肚裏ゟ出来心ある賊計賊智の笨帳既ゟ決りゝゞ悄地ゟ背へより走去こそ
案内知う樵六が宿呼ゟ赴き鎖を破りこそ内ゟ找入て東隠より刺さ月影を燭ゟしこそ
左右ゟ小梗大梗衣葛籠漏さゞ捞り討るゟ思よゟも似ぎ金子二両三分と永楽銭貳貫有
餘あり獨居られゞ賊難を怕れて外へ預けし欲骨折甲非文ゐ呼爲ゐながら無ゟ優ぎと悚へ
來ぬて又衣物の水ゟ入らぬを撰拳て大袱ゟ推裹こ梵と搭駝さ首笠ゟ面を隠せこ穏ゟ
出る造化ゟ盧が散る浪速津を心當ゟそ通宵走りゝ女知る者いぎるうけりゝゟ
程ゟ天明て後ゟ巽が近隣の荘客ゟ於兎子樵六の横死の亡骸を見出ゝ驚聚ゟ
又巽が版額ゟ鴈ある貽翰を見出ゝく事情を汎うりゝゞ隨即村長ゟ告知ゝ倶ゟ
領主ゟ訴ゝ実検使を請禀ゝゞまの日実検使出て來て件の男女の亡骸を

検ゟ於兎子ゟ則銃痍ゟ樵六ゟ杖傷ゟ且巽が胎間ゟ道ゝ本郷の樵六ゟ我妻
於兎子が姦夫ぞの不軌既ゟ發覚ゟ及びて男女諜ゝ合ゝ相携ゝ今宵逃去ら
まく欲せを己逸ぎ赶蒐出て鎌砲なて活婦於兎子を矢場ゟ藪を倒ゝ畢ゟ樵六ゟ
這勢ゟ駭き怕ゞ腰打枝ゝ丞ゟ逃ゟ
他が眉間を撻ゝ窮呼ゟ堪ぎりけん
志ゟ愉快ゟ似れど生拘て許ぎりける後悔膵を嗟ども及ぶ事の不祥ゟ世を観ぜれゟ是を
菩提の種ゟ為ゟ出家ゝく身を雲水ゟ儘せゝ恵ぞの外ゟ願ゟ近隣の父老達ぞの姿を
もて左も右も宜く計ひ給へなゝ仍一輪如件箕梨屋辰巳とぞ書うける當下実検使へ
是を見て則近隣の荘客ゟ樵六の出呼來歴及年来の行狀を詳ゟ
質問ゟ大家答て巽於兎子ゟ箇様々々原西
屋九里平の乾児ゟ做て。その譲を受うる者う初ゟ行狀宜ゝく近来猛可ゟ改ゝ

不怠の信者ゐるりーより。五戒を持ち常精進し。夫婦雙宿せざる三人の噂も聞ゐーるる。
又樵六が當村根生の樵夫にて。宅着へ既ゐ世を去りる今ゐ獨居の鰥夫にて年來巽が
賣買の畫額の下地を造りて送るべ特ゐ親しくゐるも巽う妻と情由ありーやその委ゐ知
らばいとの飛口紛れるりーを實檢使うち听て主君ゐ聞え上らゐ有司奉りて讎斷きく。
巽ゐ特戒の念佛者るらべその妻溢奔の罪ありとも女夫と推雙て數を果さべくもあらば。
あるにも良人とーく。其妻を殺ーへ忍びざる故を。惜むべ樵六が兒子ゐ死ーて
巽ゐ逐電をれゐ虛實を糾ーて考るゐ由るーたやく巽が往方を涉獵りそれて泰るべ。
命ぜらる是ゐより村長ゐ莊客們を部ーて巽が往方を索るめるる時後れゐれべ知る由
もるーを或ゐ云件の樵六がその性奸慳ゐて。神を敬ふまじ。亦佛を信せざ。始ゐ貪ーかりける夫
婦好ーて人の稚子を求ゐ養ふこの妻りーゐ開ゐ只其養育料の錢財を貪んとての听
行られゐ敢其子を憐まざ死まれべ又別人の稚子を。數金求めそゐ養へるも孰も一年半年ゐて其

子の死ざるゐるりーゐ殺ーやもるむと人ゐ思ゐまの餘も尚分知らゐ不義の利を貪りけん當
まこゐ至られざるやうなくゐ貪ーるるざ人ゐ小財を貸かりるる貯祿ある身ゐるーを頃他ゐ實の
獨子ゐ年八歳九ゐりーを夏川ゐ溺り溺死ーけるざ亡骸を求るこ三日ゐーて級ゐ沉ざりれそゐ次の
年の春の時候樵六が妻ゐ頭死て那身單ゐるりけるを是必隱匿の報へるらんと惡評さへ
聞ゐーゐ業報いちざ足らざやありけん那身ゐ巽の杖殺され且活奉の惡名あれべ听親とゐへ
ども是を怕まざ況て巽於兒子ゐ浮薄ゐて七佯誕ゐるーと言と行ゐの齟齬ゐいる疑へあれべ。
事を好む村民ゐ樵六於兒子ゐ契醋樵六が
生慳ゐて神佛の眞理を信ぜ橫死をるるを且巽が妻を誣て己ゐ妾を飾りる邪智奸惡の
趣まで人みる知るこを泛て駭怕れ悄地ゐて後々まで兒孫の殘害ゐまいりけるを是ゐるる
るるまで巽ゐ听往知れざれゐ而听家ゐ數て家
馬と共ゐ野ゐ棄られて餓る狗鴉ゐ肥けりまゐ是後の話へ却說巽ゐ其後更やく藥師院

村を立去りそ。徑路を求め迹を埋もて只管ゐそぎ〳〵ば日數僅の程ゐて浪速ゐ到て客
店ゐ在と這津ゐ相識ゐ多けれども我畫ひゐ神童の教ゐ
上達ある画をもて口を餬ぞやと思ふゐ
頂髮の長くるゐまで權且逗留あらる程ゐ秋ハ果敢なく暮果て冬の筆ゐるゐめらゐ堂
あそ食べ盤纏續ぐもゐ得行嚢を解啓きて鄙ゐ奪略てもそ来ゐけゐ雄六の衣
裳ゐ合ゐ出一店小二ゐ憑みて售せて又二三両の金子をゐすり是も畫ゐ筆何ゐせん
先屏風繪ゐと紙筆繪具を買數て得意の虎より
画き創るゐまいゐふ然しも學べゐるりけゐ已が画ゐるゐ忘れ〳〵く學ぶりけゐ已前ゐ。
猶ゐ拙きのべらもあらぢ倘我ゐ迷ひ欲と思ひ復七又画ゐふ只虎のみゐあらぢ一七三
生肖の獸ゐ〳〵草木山水一箇と七ゐ〳〵ゐ形狀を做ゐ者ゐく宛小児の余ゐ未ゐ仮ゐれば
心焦燥ゐの画を破りそ椎圖も擲りそ頭を傾けゐ後又き胸を鎮めそ思惟るゐ皇裏ゐ我

画猶可ゐ進て名ある筆ゐも差ざるべ〳〵と思ひ幻ゐて怪き行童が幻術ゐそ我眼を
眩惑〳〵けん介らべてゐ携ゐ来ゐけゐ那無瞳子の虎の彩軸ゐ亦金岡の筆ゐゐあらで。
然せゐ價直ゐるゐの欲事怪きゐ過ごまゐ今さらゐ心許ゐく〳〵ゐ倘素紙ゐゐあらぢゐ。
と疑心起りて安らゐねば獨件の彩軸を合ゐ出一悄地ゐ開きて眼を拭ひ眉を濡し壁ゐ
椎當て堅ゐ見つ又合ゐ直七横ゐ見てゐ実ゐ故色の白畫ゐそ旭ゐ毫ゐも変るこゐ。今ハ
ゐも是のごそ我半生ゐ安樂ゐ過ゐ本錢ゐ外ゐる。故畫画ゐ売る黄白家ゐ活ゐべ百
金千金の價もゐ〳〵ごゐゐあらざるべ〳〵と思ひゐのいそがれ。逆旅主人ゐ相譚ひゐ。這虎軸ゐ
活ちまもるゐ昔ごそ難波都といふけゐ今ゐ歟備一漁村ゐあるれば画を好ゐ者ありと人
ぞゐ誰ゐよ堅定めて玉と石ごそ辨知るべき其画虎ゐ瞳子るゐを脫筆るゐんと思ふゐ縦直ゐ廢ゐ
とゐ欲ゐる者ゐと聞ネ〳〵ば果風望ゐ生ゐて然らゐ虎の眼ゐ烏珠ゐ加ゑそ買家ゐ与ゐ安ゐ
思ひ〳〵又思復せば我那行童の做戒ゐ守らゐ筆ゐ加る時這虎倘脫出て人ゐ破らぢゐ

吹て。起て来る後悔あらん。是亦容易き枝を撰いふまゝ。左ゐ右ゐ思難くありける程ゆ。
京ゆう骨董店の主人。禄阿屋余市と呼做せる者。生活の與ゐまの津ゐ来て。昨日ようこの
客店ゐ在て。巽風が活まく欲する金岡の虎の画軸の事を聞知りて。随即店主人を介ゐて。
巽風ゐ對面ゐ請て。其画軸を閲るその為う這無瞳子の虎圖ゐ偶故老の伝聞あり。倘
果して真筆なうべ。價ゐ元世の至宝なうべ。聞も及ばせのふけん東山御所様義政公をのみ
好ませのふの故ゐ故書故画の御用毎ゐあり。時ゐ者も亦舊ふる和漢の名画の倉庫を後
さまでうへと。彼これ小可が大家の経紀なら。各その名筆故画幾幅
欲まゐら甘て。都て御覧を歴られるも御意ゐ稱いで退けられき小可がまの年来西陣ふる
管領様政元ゐ出入を許されて御物の御用あり毎ゐ必ず乗りひろ今番も亦那里の御家老
香西大人の内意ゐよりて這頭の寺院の什物ゐ古代の名画あるゐろへ買まく思ひて来ゐけ
るゐ折もよく主ゐ値遇て。料らずびり守中ゐけ。這一軸を東西足のげれば。今又外を渉猟ふ
要ふ。主を京師へ伴ひかへりて。我を續よう。上ずるの意ゐ。
無類の利分功徳思ひの隨ふる。賣買を仕らん這議甚ゐ。
出て。政亦異議あらざ詰朝早天ゐ起て。早飯を果し。房銭を店小二ゐ遣ひて。那方
軸を携へ。余市と共ゐ京ゐ赴き。姑且他が宿所ゐ居り。曩ゐ那行童ゐ解示さゝる。
件の金岡の画の来歴を詳ゐ聞ひ相添て次の日余市ゐ遣與ふ。余市則受合て遣
ふく待を守。一刀を腰ゐ帯て。政元の邸中ふる。香西復六の宿所ゐ造り。大情を厚く對
面を請ひて。件の名画を管領家の内覧ゐ入らんを願ひ。復六則その画ふる徒来の
主。竹林巽風ゐ今那里ゐ在ふるやと問ゐ。余市答て。那人ゐ其方軸を活ゐ今番遠ふる
来ゐけるゐ。留て小可が宿所ゐ在て御覧すの美ゐいで召具ふるも易ゐとの次ゐ。
まで画軸ゐ且上楷れといふて。余市ゐ首尾よと好と思ふ
けり。不題。京管領政元主。裏ゐ大江親兵衛と真家留と詞敵ゐ做ふう。徳用堅削

ら
ん
を
疑
ひ
て
召
せ
ば
。
徳
用
も
亦
試
驗
の
不
覚
を
恥
て
稍
久
く
。
病
痾
と
唱
て
頭
を
出
さ
ず
。
あ
ら
ぬ
冬
も
辱
し
と
會
稽
昔
一
擧
の
時
欲
得
と
念
と
空
に
過
る
程
も
雪
吹
姫
い
ね
の
風
冒
さ
れ
ぬ
ゆ
へ
う
。
持
病
の
虫
積
又
起
り
そ
。
餘
久
藥
餌
の
效
あ
ら
ぶ
よ
の
故
も
給
事
の
女
房
な
ど
を
尚
量
と
。
徳
用
堅
削
両
師
徒
の
如
持
と
を
相
心
か
ら
べ
け
ま
と
。
時
に
そ
只
顧
も
請
臺
あ
ら
べ
政
元
も
亦
已
を
ゆ
ま
隨
ひ
給
ひ
徳
用
堅
削
を
召
よ
せ
て
讀
經
の
用
度
を
宛
行
ま
そ
く
行
法
の
力
を
盡
と
姫
の
病
悩
平
安
の
功
を
奏
ま
べ
し
と
命
せ
ら
る
。
是
ゆ
う
徳
用
堅
削
又
出
頭
の
折
ふ
し
て
姫
の
臥
房
の
近
づ
ら
在
り
。
政
元
も
徳
用
が
法
壇
を
降
り
一
折
閑
室
に
召
よ
せ
て
。
那
病
者
の
輕
重
と
法
驗
の
遲
速
と
を
問
ひ
べ
ば
徳
用
詭
詐
の
序
次
を
以
て
。
然
い
姫
上
の
御
病
悩
も
積
の
こ
ゆ
ゑ
。
想
思
病
と
ま
ー
ま
ず
。
法
驗
甲
非
と
多
く
い
ひ
と
ゆ
を
政
元
訝
り
そ
。
并
亦
誰
を
想
ま
ふ
と
。
問
ま
て
徳
用
然
い
姫
上
の
意
中
人
へ
則
是
別
人
多
く
べ
く
。
如
何
在
せ
ま
ふ
那
美
少
年
ま
ゐ
ん
言
憚
り
あ
る
ま
似
ま
す
。
執
の
折
ゆ
う
偷
見
ま
ゐ
て
御
煩
様
ゆ
う
ふ
け
ん
事
う
在
る
ま
ゐ
と
。
詔
ま
せ
政
元
聞
ざ
ど
く
。

及
て
地
歌
お
及
び
ー
べ
徳
用
ハ
の
ふ
ひ
ゐ
ー
と
思
ひ
つ
。
ま
の
後
も
亦
親
兵
衛
て
譜
つ
ゐ
事
那
談
を
ひ
て
せ
ー
べ
政
元
ハ
堪
ず
。
勃
然
い
と
和
僧
ハ
出
家
人
ハ
似
げ
も
ろ
く
。
何
を
照
搦
ハ
閨
門
の
秘
事
ま
さ
へ
告
る
ゆ
ら
ん
。
我
親
兵
衛
が
文
武
の
才
を
愛
ゆ
り
そ
召
近
つ
け
そ
。
所
暇
の
折
の
陪
堂
ハ
ゆ
ま
ず
も
男
女
雑
居
の
甚
し
き
ハ
ま
ふ
至
ら
ぶ
。
剰
へ
那
親
兵
衛
ハ
少
年
ら
れ
ど
も
。
礼
儀
の
武
士
ど
我
も
ち
ふ
意
を
介
ゐ
ゆ
を
病
者
の
姫
ハ
い
ふ
ー
。
偷
見
て
仕
を
想
ふ
べ
き
倘
実
ハ
其
ま
あ
ら
べ
我
親
兵
衛
を
女
婿
ハ
ー
。
呼
領
の
ふ
ゐ
ー
。
國
郡
ど
分
取
せ
ん
ど
ハ
素
ゆ
う
望
む
所
。
漫
ハ
の
ー
。
と
ゐ
ー
。
反
て
主
君
を
恨
ど
け
り
。
浩
処
ハ
一
個
の
近
習
ゞ
次
の
間
ゆ
う
我
ど
来
て
犬
江
親
兵
衛
召
ゆ
う
ー
と
参
ー
と
聞
え
上
ま
ハ
政
元
則
徳
用
を
退
ー
席
を
改
め
ど
又
親
兵
衛
ハ
面
談
を
文
武
の
暗
譚
毎
の
如
。
既
ハ
住
奥
ハ
入
ア
ー
。
折
政
元
の
又
の
ゆ
う
頭
日
ハ
東
山
殿
故
画
を
徹
ー
さ
ま
の
ふ
ゆ
う
。
巨
勢
金
岡
ゞ
画
虎
の
一
軸
ど
ど
も
ど
我
ハ
内
覧
を
請
ふ
者
あ
り
。
其
傳
来
の
趣
ど
鳥
集
ゐ
ど
我
閲
ゐ
ー
ふ
其
言
都
て
怪
談
ハ
過
ぎ
ん
ゞ
信
容
ゐ
ら
ず
。
和
郎
ゐ
文
武
の
才
子
ゆ
。
学
問
も
亦
博
識
の
聞
え
あ
れ
ゞ
問
て
疑
義
を
啓
ゞ
ど
。

思ふようで今日も亦見参を促す。世俗をさ〳〵相伝へて。昔巨勢金岡の勅詔ありて画ける馬ハ夜々出て芳宜を喰ふ。胡枝花を翫ぶ。外国も相似る怪談ある歟いまだ知らねど我意ふに是等いその画を神ぶせんとて。好事の筆ぶ載するを。奇を好む者。よくも思べて伝へて故事の倣ふのミ本石をもて造りする。古仏諸菩薩の貝ふあるも。信ら是なるヨメかる歟況や画像紙中の黒蹟面ある者ハ背ふ〳〵背ふ画けバ面ふさ素是其身半體の者靈ありて抜出でうごかい虚談ふあらざらんや。と思べくも別ふ亦以ある事欤甚麼ぞや。と問れて親兵衛然い未熟寡聞ふハ〳〵人の汎知らぬ非常の奇事を論をべくもいねども。問れまゝに稟さぢハ不敬ふもいかゞ柳巨勢金岡が光孝天皇の末葉也。姓ハ紀氏。諱ハ圓深普天子と号タタ天皇の仁和四年。勅ふ依て御所の障子ふ鴉の儔の像を画きふき。或ハ又金岡ハ従五位下。采女正其三子。相覧公忠公朝臣なる共ふ業を兼佳絶有りと金岡傳のかゝそれ歟。馬を画き一。是その画聖なるをもて。

小説もいて来一るもひ。或ハ又故廟の繪馬が夜々の鬼をうち巣せ走りきたるの怪談の。鬼路今昔の東子ふ歟有と覚ハべ。故物ふ靈あるふ至りその画像と木石銅像の差別あるべくもいづ〳〵是を漢籍の考合ハべ北斉の楊子華ぶ画き一馬ハ夕毎ふ身を動て。長く鳴く奇異ありあるべ人相稱で画聖ともいへり。又唐の太宗の時李王郎ぶ画き一羊ハ昼ハ則欄外ふ出て草を齧ミ夜ハ則欄内ふ臥ぬ人其理を暁る者ふ〳〵ふ僧賛寧が曰此幻薬をもて画く歟。南海の深国ふ。あふ〳〵ふ今の琉球ふ。牛涙有り色ふ和て物ふ着れバ書見ふて夜隠る沃焦山の石磨ぐも色ふ和物を染ふ又昼見ふて夜隠る怪むふ足らざるをや。記。這両奇談ハ國俗のふ金岡ぶ画き一馬と日を同く七談るべ又唐の張僧繇ぶ金陵の安樂寺ふて画きける四箇の龍ハ敢其睛を點せざ毎ふ見ふ点ぜバ飛去んと人并を誑妄ミて笑ふる者ふ〳〵ハ僧繇已ミを汚ぎ其一ふ點ぜ一べ須更ふして雲湧起り雷霆壁をうち破て其一龍雲ふ乗り天ふ上り去ふけり。その眼ふ點せざる

文庫堂藏

三龍ハ今も猶見よ。那寺ハ在りくにの。水徳是も亦金岡が画さ。と云虎の無瞳子と唱る者と事を同くし談るべし。或ハ又顧長康ハ多く人物を画けども都て其眼ハ點せず人評りて。是を問へば即答て四躰妍唯本妙處なり。傳神寫照阿堵中ハ在りぞいひける。名画是等ハ張僧繇とその用心同からまじて実事とするハ足ん歟。その他の名画唐の閻本立及江都王緒ハ名ハ鄭虔王維王墨等數人の如き能皆傳神の至妙あり。枚擧するハ遑あらず就中一大奇ハ元人南邨が輟耕録巻第ハ温州監郡ヲる某の一女の画像新監郡ヲる某の子と夫婦ホるヲ及杜荀鶴が松窓雑記ハ載くる唐の進士顧愿が画美人真々と嬋合七一子を生せしハ後ハ画女軟障ハ歸上りて其画中ハ一子を添たるよしを云ひ丈夏けまべ具ハせぞ原文を照しるべ。紛まぎらハしくもいぶ是等ハ理のみき呼ハてその事のあれバこそ詳ハ筆ハ載るまじ遮莫盡く書を信せバ書ヲる死ハ不如と孟氏ハ云り。但一ハ世の人心物ハ因て情鯉り情極りて感ずるハ古今を通ぜぬ。

三伏の夏の日ハ名画の雪山を観まべ清涼として暑熱を忘れ玄冬の霜の朝ハ名画の花鳥を観まべ風く春の心を生ぜ近日ある人の狂歌ハ逢もせず見もせぬ人の恋ハ浮世画巻のとぶをありけると詠るハ誠よく獄変相ハ後ハ成都の人詣来て観て感罪を懼れて福田を修。猶且両市の屠沽其肉ハ爲ハ集らず又李思訓ハ大同殿の壁ハ画きける山水ハ玄宗帝夜毎々々ハ水聲を聞くとありまべ通神妙ハ稱誉ありが如。有徳ハ名画ハ奇特ありハ必無とまべらず。又必有とまべらまじ。故孔聖ハ怪力乱神を語らぬとハ云るまべしハ愚按を稟ぞ。虚実ハ知るよしもぞと答る詞ハ花あり実ある辨論委ハ云ヲ政元ハ吁ハ嘆賞あて通愛ハ元博学ハ聞我憶ぜ一説ハよりてよ学問を致しうハ好々都てまべろハ説を破らまく欲ぞ開ハ後ハ唐山の故実ハ左まれ右まれ明日ハ我故画の真偽を試て那俗たり見ぬ世の事遠き唐山の故実ハ左まれ右まれ明日ハ我故画の真偽を試て那俗説を破らまく欲ぞ開ハ後ハ大誰るりきと労ひてハの日の暗譚ハ果ぬり。

第百四十七回

虎眼が點じて巽風公文廳を鬧を
衆口を戰ふて京兆祿齋屋を誅を

却說左京兆政元いまの日大江親兵衛が晤譚果て退りし後猛可が香西復六を召て
のたまふ。儞が竹林巽風と爭らふ內贔を請ふこと既に聞えし。巨勢金岡が虎の畫軸の一誄み
就て我其巽風が質問んと思ふよし。ありその所以の箇樣々々と意衷の趣を宣示
あそ。又のたまふ。仔まべ明日巳牌時候が件の竹林巽風を公文廳へ召よべし。その餘の
事ハ任せよ。有司が伴へて准備をせよと詞急迫しく吩咐れば復六もあろ汚果ていそぎて
宿所へ退りつ。魂て人を走らしむ。那骨董經紀ふる祿齋屋余市を召く。下
知の趣を言示し。時分を錯へず巽風を乃て參るべし。と課されば余市が既が事
成つれと思へば滿面うち笑れつ。言兼ねて退りける。爰程が有司們が復六が伴連
ゐて。各その下知を汲て事の准備を做を程が。その日の暮て。明の朝余市が屋舖左側より
早く巽風が相俱して。管領政元の郎が伺候しの公文廳の局の外面が在り。竝ず約莫一
晌許既ぬれば。當廳の有司の每。皆出仕ぬらんと思ふ程が敬言固の走卒聲高ふ
四條某の町ふる經紀余市許歌宿ふせる。逆旅の畫工竹林巽風が在るや。疾參りいと嘆
ゐ巽風余市同音ふ巽風風ようまくふ在り兼ぬ。と答て遽しく身を起ず件の走
卒這方へとく局の內ぞまゐらせける。當下巽風先が找てゐそるに。あの公文廳の光景を
見亘ふ有司左右ふ羅列て管領のいまだ出ざるに。又有司ふの後方ふ帷幕の裏面
ふ身甲あふる力士三四十名ふゆく短槍鉤索を執るあり。幷ず頭人とおぼしき兩個の武士
一對の武具ふて整々とたたく扣ふ。又局の左右ふ敬言固の走卒二三十名各桿棒を衝立く
四下ふ眼を配りて居り。思ふ增ふる武備儼重ふる。威風ふ面を向べくもあらまれば余市が
巽風いまだそのあろをも安危ふと跼ふ思ふ胸安らぐ。跪居ふ。姑且しく政元香西
復六を先ふ立一一個の近習ふ大刀を執ふく屏風の背ふ出て來て。儲の高座ふ着一ぺ。

あとべ
後方ゟ待る一個の近習が那金岡の虎の画軸を出し恭ゝ載て主君の側ゟ指ゟ
けり。登時有司謝罪を被て誰らある召人巽風を疾参らせよと喚ば一個の青侍あろ
ゑ
ゐて早く巽風を喚ん〳〵縁煩ゐれて来ゐけり巽風ゟの日の打扮ゟ申の時可ゐる銅色の
のーめき
尉斗目衣ゟ烏紋紗の十徳の肩衰て陳て赤小豆色ゟ做〳〵ゐるとも披り引れて趨く
まきりよまきぬ
政元の面前ゟ畏る。昨宵猛哥ゟ敗衣店ゟて買整へる公服の下衣を着ば膚寒げゆく。
とたゐ
鳥羽画の筆意ゟ似〳〵ける是も一家の画風歟と思ゟ青侍が笑ゐを忍びてゟ儘推居て退る
かど
程ゟ一個の有司膝を找ゟて信と巽風ゟうも向ゐて。竹林巽風兼れ。昔汝ゟ内覧を願ゐまクー
こぐじ
故画の巻を館みゐう〳〵と舒さゐるべきおん旨あり具ゟ答辱まゞ〳〵。といれて巽風頭を抬げて仰
ようめ
兼りゐれ那金岡ゟ虎の寫真の事ゟうも家の日碑を書寫ゝて憲覧ゟ備まクー如く。
相違あらべうもいぞとまうすを政元ゟう聞て。をれ巽風儕ゟ你ゟ進らせる。那虎圖ゟ傳来
書ゟ偽ゟの眼ゟ黙まるゐゟ立地ゟ抜出て人を傷ゟ危殊あゝんとのゟ其画を神ゐて價を貴く

せん爲るべ〳〵唐山ゟも介る例あり。譬べ唐の李王赴ゟ画き〳〵羊ゟ畫ゟ出て草を齧ゐ夜ゟ
槻中ゟ隠まうう是幻藥をもく致を吁その画の奇特ゟあらばるよを僧賛寧ゟ着破り
ゐゐ有徒れべ我國俗相伝〳〵昔者金岡の畫畳き〳〵馬ゟ夜出て胡枝花を齧ゐをとの誕妄
件の羊を師ゐうる〳〵又張僧繇ゟ画き〳〵龍ゟ敢其眼ゟ點せべ人強て點せられべ其龍忽地抜
出て雲ゟ乗りて飛去ゐを那土ゟ寫ゐ〳〵物ゟあれどゟゟ亦幻術をもて致を吁時の人を眩惑
あてみべうその画を神ゐせ〳〵豈信ゟ画る龍ゟそゟ理ありて介らんや是ゟように思以るゟ金岡も
示みべうう其画を神ゐせまく欲ゟ虎の眼ゟ點せぎ〳〵時の人を愚ゐせ〳〵ん开ゟ左まれ右も
あれ既ゟ這虎圖を故筆鑑定者流ゟ示ゐ〳〵ゐをりそ
東山殿の御用ゟ達べ〳〵ゐれども目子ゟけ是べ一身不具ゐて貴人の御物ゟ做〳〵かさう爾も
是繪師ゐべ然だうのあろゐるうぎゐ目今這虎圖の兩眼ゟ宜く點〳〵ゐまゐうせよ。
とく〳〵といそせべ両個の近習ゟ出て件の虎の画軸と准備の筆硯を俱ゟ令ゟ抗つ。駈く

巽風が身邊ゟ推着て疾仕れと促けり巽風是ゟ困じ果てもそろく禀ゟ御說諾て兼なりのひぬ然ゑら非如貴人御威德ゟく仰付さゑゟとも或ハ又富家の千金ゟ以て誘ふとも這無瞳子の虎の眼ゟ必ゟ點ゟと徹られゟ庭訓あり剞又師ゟて異人の教ゟもまの美丁寧ゟりけれ共今ゟら違却仕りかたう御意ゟ悖ゟ畏けれども一ぞまの美を御許容ありて餘人ゟ仰付さゑんことを願ひ奉ると雖ゟ政元冷笑ひてやをれ巽風父祖の敬言師の教誨とゟ偖ゟ證據もゑゟゟ孰ゟ実事千七饒を免今別人をゟて眼ゟ點ーてさゑゟ奇特見ざべ加筆凡画の評以るれバと禀さえ與ゟ推辭ゟるべ一約莫術者の幻術をゟて猛獸を見ゟ時或ハ糞十犬血を漑ぎ樹ゟ立地ゟ其術敗ざるゟゟ一我既ゟその准備あり倘又実ゟ枝出て真虎ゟ変るとも豈く力士を聚合甘ゟ前ゟ其里の幕ゟ内ゟ在れバ駈帶んの難ゟ色并ゟ推辭ゟ奇特を倡て上を欺きゑゟ其罪特ゟ輕ゟざ牢獄ゟ數ゟきて懲さん欤然でも推辭欤點せざゑゟと眇ーく責て饒されバ近習の毎左右ゟう件の劵軸をゟち開き筆を添よと推着れバ有司等ゟ共倡ゟ巽風ゟど遲滯せゟ今ゟの虎の眼ゟ點ーてさゑゟ奇特見れざでゟ并ゟも又御意ゟ頼ての美ゟれバ反て御感ゟ預ゟむ但幻術をゟて虎を出さバ上を慢侮なるその罪饒されゟべ一ゟる術ゟぞゟ疾點せよ推辭禀ゟ身の爲ゟざ後悔さえ奴んやと諭一薦めく已ざれバ巽風平伏る肚裏ゟ左さゑ右さゑ思ゑう那神童の幻惑を破ゟ危き所ゟ爲ゟれぞゟ他果て神佛の化現ゟあらバ狐狸の変化ゟバ那教ゟ又是実と做さゟ足ゟざ後の出ゟを怕ゟえう今の安危ゟ覩面ゟ只點ゟるゟくとあらーと当ゟ思ゑつ頭を抬げて御教諭感佩仕ゟぬ家訓及師匠の敬言戒これある故ゟ一旦ゟ御說を辭ゟるゟーゟざ今ゟーも脫るゟ路ゟ活物の眼ゟ點ゟる師伝も美ゟていへバ左も右も仕らん只その奇特の有無実ゟ家伝の頼ゟのこゟで試ゟうゟのゟバ御用捨をこそ願ーけれと笑て硯を引よせ懐紙を出ーつ曩ゟ那行童ゟ教られる眼ゟ點ゟるその画法を甲乙と寫試るゟ十二生肖と同ゟくゟで是のこ亳も忘まねバ心

易一と思ひつゝ則件の画虎の雙眼は烏珠を點上し軈てきー出さむ有司則受合てそが係主
君の皇廟を登時政元が近習ら命をそその芻軸を聽の柱に掛させく衆人と共にこれを觀るに日
子ろろー時ずも活るが如き猛虎の勢ひ名筆凝ひありーは今其晴を點ずらば勢ひ初は十
倍して毛骨竦立可られば誰ら感歎せざる〻ぬ憶ま一妥時眷恤ら就中異風ら神師の伎授
失さで我ろろうくそうと思へば膝の我むも知らで自春蝉やりて倶は觀る程は怪むべき那里
とふろ〻疾風颯と音一来て掛ける件の芻軸を吹翻し飜其但見る白額斑毛の大蟲突然と
走り出て来る勢ひ高峯を降すが如く走り鬼りの異風の吻を禺欽と噬締て振一振
ふれば散と潰る鮮血と共ら噬断離ら首一首ら縁頬ら輾隕ら軀ら仰さるら仆さけら前未聞
ら一大奇怪ら勁ら辟易せざる〻ぬ主従齊一立竦ぐもぞ中ら香西復六ら聲慌ーくそう立て
兵毎出よと叫ぶら帷幕の裏面ら扣えそう力士の頭人穆子嶋中太正告紀内鬼平五景紀い
須破也と倶ら走り出て連りら力士を薦めける是そうに先ら景紀ら那身の樸傷愈されい前ら

徴りを磔を飛一力士ら准備の糞汁と獣の鮮血腸などを濺ぐ者ら滅掃け短槍鈎索を操る
士卒ら駈止んと欲をれも幻術の虎ろうざれば機物ら破られざ又泪生の獣ろれら投石器械鈎
索ろうらの及ぶ〻ぬ呼ばわらも逆ら者ら噬仆され避んとすれば跌滾びて自ら折き脚を折き腰を抜し命せ
喪ふ出没迅速進退猛悪中ろうもわろざれば復六並ら有司ろら近習青侍と共倡ら主君を
守護一退さ齊一く屏風の陰ら在り又局の左右ら排列さる警固の走卒驚噪さ持る
棒もら甲非ろく迭ら人を肯ふーく感一周ら做れるら況局の隅ら土坐さる骨董経紀録齋
屋余市ら事の異変ら聖を洩して一悪撃時も汚堪ざ外面へ辺出んと欲さるら出ら年失ひ跌倒れて
一聲苦と叫ぶも果ざそ儘気絶をうけら介程ら虎ら連りら嗥狂ひて幾層ら人を傷りけん
衝と走出る時巽風ら首を倒して慕直ら又警固ら走卒を駈倒し躁躙りそ身を跳らう高
塀を閃りと踰るを見る程は性方へ知ざるりけり這時力士ら頭人さる樺子嶋中太紀内鬼平五
辛く命を免れそれぞ力士ら過半傷られて半死半生さるらぬもそけ虎を逐ふ〻ぬ擬勢ありざ

八犬傳九輯巻三十七

又只力士仆のみ。有司かも傷児あり。走卒も亦幾名歟或ハ虎ハ爪傷られ或ハ踩躙ら
ま二血ハ塗れるも斟ふべき有佶ち一程ハ政ハ猛虎のあらざるを見て肇て生ふる心地ち
側ハ仆ら復ハかうち向ひて却未曽有の珍事ふる那虎那里へ去けん倘又ヨヨく人を傷ざ
ず仆又公私の憂ひふ免ん又中太鬼平五ふ。ハの餘ふ武男の者ハ課て弓筒銃ハ煆煉
をる殿兵ハ四十名を従せ八方へ部ヒ〻ふく虎ハ猟捉せよ意ふハ高きよく越ま〻我
邸内ハ在らざるべ。洛内市中ハ横行甚ハ我失ふ人皆いへあの者を先ふ急ぐべ。次ハ痩ふる
士卒ふ宜く勤り宿所へ還ヒ。療養ふ閑ハまべうび。宣ハ従ひて躯を奥ハ
入りはける現卑あれば意ふ氣揚々ふ奥書ハまべ宵暗
神を侮れば竟ハ鬼責ふをふぎ政元巽風同輙ハて其妖孽の宵ハうねハ稽まふと
ハまくのみ。間話休題ハ。行程ハ香西復ハそやく件の下知を侍へて正告景紀を立ち遣ハ
又差ふ死有司ふ〻肌ハ士卒を召聚へく。死人と傷瘡児を出ふ事の紛乱の

ぐうもあらざ。そふ中ハ緑齋屋余市ハ氣絶せ一のみ。臭を傷られ枕。姑且ヒ我ハ復り。杖ハ
携りハ。辛くヒ。宿所ハ届るヒをふれど大驚心を破りけん。ふ宵より又發熱ヒ四五日
起ふふぎりけ。然ハ又種子嶋中太正告。紀内鬼平五景紀ハ猛可ハ殿兵數十名を従へ弓
箭銃砲の准備ハ是ふ三ふく先邸中をうち巡りて件の虎を索ふ。就里あらけん知る者
あらざ。是ふ又虎獵の頭人を加へられ各引率をヨふく。四方ハ分ヒ立出て洛内洛外
隈もふく。夜ふ日もうふ。渉獵れども其影ざふ。ふ去向々々の地方の民ハ問へども
見きとハ者あらざ。依而ハの次の日の巳牌時候ハ種子嶋正告ふ一隊の士卒ハ洛外東の中
明亭を過る程ハ人居ヌ立在く。何やん瞻仰ふるあり。正告ヒ馬を訝りて殿兵ハ其衆を
拂ハせく。立ふて是を観るハ鳥木丈八ふ。ハ男子の生首一級梟首俎ハ載てあり。
晴を定めて猶熟視るハ怪ふ哉此ハ是昨日那虎ハ衙去りける。竹林巽風の首級られ
什麼ふとだうハうち驚れて在りける程ハ鄙備ふる一個の行客あり。倶ハ站ふまハの首級ハ親て。

○文溪堂藏

御内人種子嶋中太正告是之原来這巽風の丹波の来田の夕人多り一次昨日那奴が走ら
ある金岡の画の怪虎の往方を索ねて捉鎮やよ
部て渉猟れども虎の往方を知るよ〻くて友て虎は衙去られ巽風の首級をのみ料
今あゝ見ねあゝ亦是奇中の一奇事ゝて実ゝ天罰ありか那巽風が横死をけるゝ金
岡の画の虎の眼ゝ點せ異変ありしその故ゝ岡様々々とその出生略ゝ解示して有徒れゞ雨を
召倶て邸ゝ還りて巽風の来歴を聞て上るゞ君侯の御疑ひ立地ゝ氷解せん洒家ゝ彼ゝ
参るべしこれて行客頭を擡て开ゝ亦思ひもけぬ事ゝ言ゝ争何ぬせんいそぎ餓さ甘ゝ
いそぎ七郎兵ゝ下知て行客を守らゝ従ひ七躰て
衆人ゝ那画虎の怪談と巽風ゝ奸悪を憶ゝも聞知て且驚き且怪ゝ共ゝ口順ゝ做へ
ゝの吉又日ゝゞ四方ゝ聞ゝて驚怕ゞるいろ〻けり介程ゝ種子嶋正告ゝ那行客を扣て西陣

側ゝ人ゝ告るやう己ゝ丹波の来田ゝ某師院の村民でいがみの皇られる罪人ゝ我村
ゝゝ繪額經紀箕裂屋巽と唤做ゝ奸悪人ゝでいふきゝ尓ゝ那奴這秋の時候箇様
箇様の情由ありて友を殺し妻を誣て佯誰の貽笥を留措き剰ゝ友の銭財衣嘗衣を
奪略りて夜ゝ紛ゝて亡命あけゞゝ隨即領主の仰ふりて久〻く往方を索ねーらぎも竟ゝ
知るよーゝらりーふ果ーて天罰免れぜーて倏ゝ死狄な做ゝる那故ゝ箇様〻〻と巽ゝ兎子が
不義の顛末始ゝ長〻ゝ流寓来て九里平の迹を継ぎゝる他ゝ們ゝ半表半裏をけゝこの
年来の行狀並ゝ樵夫樵六ゝる且奇き行童ゝる又金岡の画の虎ゝる。都て他ゝ們ゝ奸
虐の秘支ゝ村民是ゝ知らざりふ往昔於兎子の冤魂を市巫の弦ゝ向せーゝゞ隠匿
竟ゝ發覚れーゝ云其大略を鮮示せゞゝ聴ゝ尊ゝ弁一駁歎ゞて不思議ゝるぞ思ひけゝ然ゞ
種子嶋正告ゝ料ゞ件の一奇談を聞ゝて既ゝ便宜をゐれゞゝ太まくあゝる行客を喚ゝ
うち向ひて目今兩ゝ不問語ゝて這竹林巽風の来歴を聞知る。洒家ゝ西陣ゝる。管領の

神の明と行客と
卓を異風の
筮を詳を

ゐ。郎ら行程ゐ隷らまさる殿兵両名ゐ左右ゐ立て由断るなーゐ怪むべし行客ハ檢消まさく見えまさりけり殿兵を是ゐ睨て洩七吐嗟と叫べ正告も驚きて倶ゐ見なべるゐ現行客ハ在らびまりね原来那奴も変化まりし狄不思議々々とおもふゐ呆れて一霎時去もやらだ却已ぺ死ゐあらざれバ只得西陣ゐ了来て随即土君政元ゐ件の事の趣を具ゐ聞え上らべ。政元も亦訝りて然らバ丹波の葉師院村へ早く諜使を遣七巽風が来麻生素生を質問るゐ如こるーと。猫可ゐ両個の走卒ゐ吟呀て件の村へ遣せゐ毫も愈いでやざりけん。才ゐ三日許の程ゐ間諜使まるゝ了来て。僕まる葉師院の村民ゐ尋問け。巽風於兎子。樵六が事の顛末ハ固様々々ゐいとのべる言爾ゐ那行客の不問語ゐ吟合一けれバ政元憶ゐ歎息ゐて。ゐらバ事ハ実ゐて那行客ハ非ず。神欤佛の化現欤と思難ゐ思ふる疑ハるゐ解ばりけり。有倚り一程ゐ紀内景紀ハ五六名虎猟の頭人ゐ名刻率ゐ従へて。ゐ空く十ゐ了来り。主君ゐ聞え上るまう。臣まるゐの三四日。洛内洛外二三里四方ゐ隈まなくうち巡りそ。那虎を索れいひーゐその地其此の民ゐも見きとのゐ者いなゐ。攻据まるゐくいへハ這ハ義ゐ禀上んとて退りいとの政元これをうち聞て。然もこそおもひぬる自ゐ正告の隊ゐ徒る奇事あり。意ふゐ那虎ハ出暮れ一折外面へ去ゐきと見ゐ幻ゐて故の三匁軸ゐ了入りけん。うち開きて疾見よるに。則近習ゐ吟呀く那画軸を出さ甘て見るゐ尚素絹ゐて虎ハるー。従れバ是板出ーようのぎ絹へハ久ゐざる之他尚遠く去らざるや。と思べ胸猶休らで一日二日と過き程ゐ洛中猛可ゐ風聲あり。昨宵白川山ゐて虎ゐ赶ー者あり其甲ゐ辛ゐ七。逃て才ゐ命を免れ某七ゐ吠れうと。とのゐのミ虚実分明るらざりーゐその次の日白川の山里るゐ村長並ゐ石匠ら詣来て訴禀ゐ。素さきのふと聞え一那奇き唐獣ゐ我出申ゐ躯ミ在り書も山を踰る者一路児寡きゐ那虎ゐ撞見て命を喪ふ者これありまゐの故ゐ本村るゐ男女駭怕ミ壮者ハ隊を定めて虎を防ぐ准備ゐ他事るー宿所ゐ各戸を閉て活業せざれバ。飢餓ゐ及んとき早く猫戸ゐ仰付さまあゝて虎害を除せ免れと連署の願書をりそ白ゐ管ゐ請禀ゐーゞ政元いよ〳〵驚慕ゐ近ゐ

對治せらるべしとて。其村民を宿所に還しつゝ其後又香西復六と有司們を聚合せ連
〻衆議を凝せども大家計の出る所なし。先洛外なる獦戸が課て件の虎を退治む
あとそ多く獦戸を召聚へて募るが賞銭を重くまさども獦戸等が悦べる皆辭ひ
稟もせう非如猛獣のうとも熊狼のやうに猛きこと
十倍せる唐山の悪獣にて旦肉身の者をさへ故き名画にまで虎が遇ざる隊もあり。或ハ虎を見出て連りに銃砲を放懸れども虎これを物ともせず。
砲のよく及ぶべくもいで。其差ハ銃さへ有司等も聽を頭を掉て
若們國恩を載て安く宅眷を養ひまらば侍
追放せらるべし。然でも御諚が従いまやと眼を瞋らして権ある獦戸等が困果て只
得言兼て退けるそ中が血氣壮ゆく名聞を好と或ハ賞銭のまさを利と
命をだにへざる者毎に敢那虎を怕るをしてのみならず他の原是故ある画の妖ふるまへ火を
そ焼ん各倶が大銃と火薬をまく準備して獦一獦て試まやと連りが薦めて已ざり
縦横無尊が走り蒐て其獦戸等を噬倒を勢ひ中るべくもあらざれバ進備悉相違
あて矢場が命を喪ら者あり。幸ひが七死ざりしもの傷られ脚を折せて半生半死ら
なりけれバいよ〳〵虎が遇ざる獦戸なるも怕るて久〳〵悚へ泡ぎ大家山を逃下りて巴提便
雄氏ハ隊を立暗騙を定め各火薬腰餉の準備
勝臣が短劍馬婦搏一者が一拳が微んと欲する者るーまの故が其隊毎の故老們倶
政元の郎が詣て事件と想て復催促が従ハざ是ようの風聲冒をあく那虎昨宵ハ
林麓が下りて聖護院の森が在り。明日ハ日枝の山が遷ん秋東山の御所の頭も心許るー。
倘亦那虎智茂河をうち渡て洛中を横行せバ禁裡御所摂家宮方花の御所と
稟もとも防禦易らざるこそ罵噪ぐ程が寺院の尼姑及坊間の婦幼們ハ今が虎の

出来る如く戰慄れて居ざるも門戶を閉て潛居り然ば神祇伯阿陰家へ惡獸對治良賤
鮮卮の祈禱あり又叡山西塔の大衆詮議して武を嗜む暴法師へ鍬を磨き武具を
准備して虎倘入らば射て捉んとそ揃へ栖霄引て喚もあり然らぬ猛虎調伏の讀經ぞ暇なう
ける。修法ぬ亦只是のみそ洛内洛外の寺社これが爲ぬ皆丹精を抽く祈らざるはなし
ら法驗感応いまだ聞えざまの故ぬ管領畠山政長ぬ將軍家義尚の仰ぬよりて三百許の士
率て領て東山殿義政の御所を守護一ありまの他在京の武士ぬ課て内裡並ぬ花の御所
守ら令らる且管領政元ぬ妖虎の由来を尋ね召て早く對治の計議を旋らーもの
器ぬ勝ら勇士を擇ぶ藝を鎭め民を拊て上下安堵の大功を亟ぬ奏せざい忌憚穩ろ
へらば聞くぬ這回の妖孽ぬ京兆政元奇を好ら遊戲ら事起りてあぬ至ま尚對治
遲滯せば身の爲宜一なるべらざ。と懇一く責さすれば政元痛く畏りて且羞且焦て
始骨董經紀余市奴が刑餘の乞人異風を沒引て那菊軸の内覽を請ふれば
あそ這妖孽ぬ起りぞれ有ぬ依れば是まの罪ぬ則異風と余市ぬ在りを中ぬ罪風ぬ積不
善の天誅ぞがらを俟ぶ凰く首級を梟られら先や余市を罪として召捕せ首を刎て其
人口を塞ぎ我上後安らーと尋思をぬつ有司ぬ命じて猛可ぬ余市を召捕て罪ぬ
倡て斬首の刑ぬ行ひけり現昔政ぬ虎より酷一とぞのべる古人の格言思ふべ一然ば這録齋
屋余市も亦是好人ぬあらざまの時ぬ方て東山殿奢侈を次ぬして茶器奇石故書畫の
類都てぬざこ死貨をのみ弄びるぬよりて骨董を宗とせる經紀児ぬ毎ぬ利を射る三勝らざ
就中這余市ぬ政元ぬ親一らけまべ東山殿のお求めの東西と一いへ人ぬ讓らざ。并を政元の
もぬ就て那方ざる進ぬぬ必是用ひらる現小銭を乘ざれば大銭沿ざる自然の勢ひ余市ぬ
勉て那家の權宰ぬる者西復六まの餘の有司ぬも時々人情を厚く七上下の資助を沿
まべ。おをそ其利火計の經紀児ぬ十倍ぬされども尚飽ざ出ぬ不正の東西と知ぬ買も
ぬる賣もぬされど資助宜一けまべ其出ぬいあらざ。漸々ぬ家優ぬ奴婢ぬざるぬ高上までぬ

東都　曲亭主人編次

第百四回

犬江前諾〻く関符を請ふ
澄月が一謀五虎を縶す

政元既に余市を誅して敢其身の衍徳と飾まく欲れども室町殿義尚の御氣色の安らぬを慮りて胸を鎮めく両三回尋思と做すに世の悪評も已ざれば稍思得一策あれど猛可き使者を遣して京都の五虎と守る秋篠将曹廣當澄月香車仏直道等。並に鞍馬海傳真賢安敵齋經緯と家臣種子嶋中太正告紀内鬼平五景紀を召聚るに秋篠廣當那虎の防禦と為て北面の武士皆悉朝廷を守護なれば暇るとて招ぎ応ぜず又澄月直道の暴悪ふ犬江親兵衛と闘槍法ふ毫も克ぶ剰へ幇助ふ出る鬼平五が未熟疎忽の礫ふ打れて落馬ける折の為体を

和漢新故の珍奇珍物まく積れて庫ふ在り盈れば虧る天理を知られば郷閭ふ出ず詳ふ其風を家ふ留て利を欲ーうるの故画ふ崇て病着あり病着愈て起出ー日ふ那身ふ召捕られて首を喪ひ家庫財宝ふ没官せらるゝ三て宅眷ふ追放せられけるが然けれどゝも人ふ預けー餘財多ふ三百金ありければ余市が獨子某ふ是ふ抱ひて母と共ふ近江ふ走ーて名を変て小社の神主ふ做りーよう子孫才ふ相續たけり。

これ是後の話ゝ現汝ふ出て汝ふ返る善悪応報の理りふ只這經紀をゝ始那虎の暴出ー折戎ふ命を喪ひ残ー悪家りける有司力士走卒ふいたるゝ其後又白川山ふて那虎ふ傷られ。行客ー民禍を受ふ皆是残忍貪婪不孝不義の毎也好人ー個もあーて徒れが是霊獣ゝ世ふ民の父母ーう者ーさきく仁政を行ひ多ぐ征ぜざー七那虎ふ必出ざるべーと衆識者の批評聞ゆるが政元ふ其言ー迂遠ーて政用ひず反て身の非ー飾んとて人ー屠るー三家の像く經紀余市ー誅戮ーるの後の話説甚ー繁ふ亘ーて是ー尽ーう又下の回ふ解分るを聽ねかー。

南總里見八犬傳第九輯卷二十七終

京童が曲子を作て謡ひ隠もぐもあくまでの故ふ営中の沙汰を憚りて身の撰傷ふ愈れども
そぶ儘病痾ふ假托て尚屏居て在りつるが亦政元の招ふ応せざるの餘真賢、経緯等も
正告と景紀が異説るく早く参りけり登時政元對面てみづから宣示もう白川山ふは
寻次虎の事の趣ふ汝等も夙も及びけん我既ふ洛外る猟戸們を召課て猟捉せまく欲ふ
他等ふ只渡世の弓、盆前銃砲ゆく武藝胆勇の者ふあらざれば傷損ありて寸功もそ
汝等ふ今命もるふのみを以も各銃砲ふ提れる列卒二十名を従へて倶ふ那山ふ求猟得て
大功あらば先度の恥を雪るふ足り由べしとありて驚く似而非猛者們ふ憶ざも目と目を注くく
答難るそぶ中ふ真賢と経緯ふ權且て倶ふかやう御諚兼のいへども那虎ふ真物ふあ
らぬ故る画圖の化るそぶ力をりそ征ーくあらん。鄙語ふ云餅ふ餅師ふて山猟をゆく生
活ふまる猟戸もう徘るそぶゆくく在下もが及ぶべくもいらざ此ふ依る中太とそ銃砲をゆく
禄と食む閑人もそいへども猟戸們ふ立勝りく能もるものやいふと譲るを正告推林めて开のい

ふことなく那虎の出見ず折咱も鬼平五と共ふ倶ふ轂る制めまく欲せゆざも実ふ是人力の
よく及ぶ所物ふもらば其後又仰を稟て洛内洛外を求猟りーふ听在ふ知れざ跟風の首級を
のみ見る奇瑰もふ小るふ今ふ白川山ふ在りとくども風聲のみもそ出没不測の変化ふ依れば
非如那山を求猟るとも深く隠れて影ざもそざふ這回も甲斐なき徒ーとらひつて主君ふも朝廷
畏れある美ふいへども那虎賀茂河をも渡あく洛中ふ入るべき狭くく愚民們安心仕ぶべ
りくと云云と世の悪評もふ狭臣も銃るの精兵を各四五十名相従へく一條よりと三條もそ
那方の河原どもち成らば愚民們安堵仕らむ倘又那虎山を出て河を渡もうとも暗
に跡を定め諸隊と合て轂を捉る便宜もふらむと舒る意見ふ景紀も膝ふ打額ふ衝て
現正告の意ふ実ふ恐れるべく愚意も同じ山ふ虎の巣穴るふ況那山ふ如意嶽比叡
比良の高峰陸續て連山波濤の勢ひもあり廣く険沢山路ゆく労ーて功るべんとふ
河原ふ在て他をもば地の利ふ既ふ我ふ在り実ふ便宜ふありとふ真賢経緯もふの説を

よみ喜ー〻共侶ホ河原の勤役を請ーベ政元ハ如意ありねども今亦正告ぢゞ言の趣もその理るホあゝ所ぜ已ことを以ぢ其説を饒ーて仆らハ且若仆ゞ請ホ任ーて愚民ぢの安堵をゆるやホ不ゝとゝん因ゝ海陸の敵寇中太鬼平五ぢホ火兵各五十名ゞ隷遣ーて河原ホ勤役の頭人とゞ兵飯並ホ火茶い有司ホ談ーて受含るゝよく勉よやゝと命ぜんベ正告景紀真賢ぢ経緯も共侶ホ言ゞ乗ぢぞ退りける倩而五七日ゞ歴ぬれども京師の安賤安堵せぢ虎の在る山を甘めゝ河原ゞ護るハ何事ぞ河太郎ゞ水虎とハハ虎も亦水ホ栖む者とや思ふ烏滸ゝと云京童の癖ゞ有ぜ亦復是ぢの悪評あり政元これを洩ゞて安ゝ如ゝる。と思ふのゝ那頭人ぢゞ日返さんさまぢゆゝ更ホ亦徳用と堅削を閑室ホ招ゞて那虎の顛末ゞ鮮ホ告ーて却ゝ和尚のヨカハ人みる知ぢ今亦これホ加るホ師弟の法力をそせ必ず是大功あゝ那霊虎ゞ対治ーて先度の恥辱ゞ雪めぢやと励ぢれて徳用沈吟ーて其義ハ仰あるぢとも望む所ホ候ハベ我六十斤の銕杖も棰ホその甲斐あるぢ虎の出ーて来ぬ時ハ如何ゞせんと云ふ。

非ぢあるべうもハゞ約莫倩る変化ハ人力ゞ及ぢて征せんとる。有験の法力ホあること等ー倘臣僧ホ謂ふ伏の修法を仕ーぬるベ一七日ホゝ小験あるゝ二十一七日ホ大験見れ三七二十一日ホゝて那虎自然と滅息ーゝ上下安堵のありひゞ做さん何の御疑ひベ及ぢ給ふ貌ゞ説誘る其言ホ理あるホ似ゝ政元本性修法ゞ好めベ然也ゝゝと黙頭ゝて則其説ふうち任ーて館の内ゞ入ぢ浄処ホ護摩ゞ壇ゞを飾ぢをつゝ徳用堅削ゞ祈禱の効あるを程ホ一七日ゞ歴ぬれども開ゞ酒ハ已まで洛中恩劇ハ必ぢ北白川の山里ゞ村長故老仆ハ亦復政元の邸ホ詣来て訴るやう。那虎ハ今も猶山中横ゞ時ゞけまベ里人都て生活ゞを喪ふて飢渇ホ及ぺ倩ても対治凝ぬベ里ホ人種ハ尽ベしの歎ゞと非心告ゝ請ふと両三番ホ及ぶ程ホ東山殿も室町殿も政元の出仕ありぢ毎ホ那虎ぢのゞ事ゞのみ聞ーてなどぞ対治遅滞ぜる撰擇ホ応ぢる男士ハ名ハ欲ハゞホぞやと譏のベ改元一句も答ホ由ゞ只赤面ーて退るのゞ心連ゞホ焦燥ハゞ推鎮めぞ思慮ぬる士卒ぜ養ふ。

千日るも一日の役ふ立んとてこゝ尓ろふ種子嶋正告。紀内景紀鞍馬真賢。並敵齋經綟及徳用堅前。皆我が恩顧を被ふ名を獻ん命を惜そ。敢慶安を分ん者ぞ。他们もう憑ーかな安今の世の人心感相似る弁が中ふ猶も擇め一人も那大江親兵衛ふ和漢獨歩の勇少年弓馬力藝千萬人ふ擬れるのみならず学問廣博智慧並量美義を見て勇一人の恩ぞも思ふ本性なれが他を招ぎて問試ぐ憑ふ遂ふ靈虎を對治ーて我與ふ面を與走大功ゃむ今まで他を漏あーへ然しも京師ふ人多と思れんとあそーて胡意ふの談ふ及ばざりけり。我ぞう嗚呼鈍うな悔ふ且羞且獨頷く主張既ふ定りけれ先他ぐ機を取んとて屡く近習ふ吟咐て秘藏の名馬ふ花美る。鞍鐙皆具を措ーそ。是を庭ふ牽入させそ。然而親兵衛そぞ召せける。尓程ふ犬江親兵衛ふ這旨改元の使を給て。主の今危慌ーげふ我を召るふ何事やらんと思ふのう驚馬ふせそ。徐ふ衣裳を敕正へ。使と倶ふ來ふれば。政元ふ笑ーけふ身邊へ招ぎ寄ーて。什麽親兵衛若ゃ我頃者ふ公私の勤務ふ暇ふくて。憶を疎漏ふ過ーまふ。今日偶ふ見參れば。和郎ふ會ふる東西ぞあれ先他ぐ見よかーとぞう庭ふ指ふを。親兵衛急ふ汝ふ與ふ什麽意ふ稱んやとのられて親兵衛遽ーく席を避け額を衝く。あを辱ぢ御賜あの馬妙相皆具ーて欠る処ひとぴ千里の駿足ぞと疑ふーる。且那毛色も奇妙ぞ実ふ是蒼海洋を走る白帆ふ似るをのく。如右名つけさせゆのひ名詮自性ふ妙ぞ昔唐山三國の時魏の曹真ふ駿馬を驚帆と名つけーよりふ古今注ふ見えてひ牧馬帆と走帆と和漢暗合愈奇ぐ然ぐと今在下ふ取せゆる一期の幸ひ有ぐこれまぐ忝ぢ造化ふそとふ吉喜び氣色ふ見れぐ政元倒ふ訝りぐ。曰よ親兵衛我ひ和郎を愛るの故ふ均る比より幾番と

名刀家の花跡も、衣裳或ハ金銀調度の類世ニ稀なるを與へしも毫も喜ぶ氣色なく、其折毎ニ固辭れしを那馬をのミ愛悦びて受しハ甚なる意ぞやと詰れバ親兵衛猶ホ其御疑ひハ理なるから在下東籌ニ在りし時我老侯の賜はせし青海波の名馬ハ、開も亦千里の駿足ぞと善ニの馬と相似なれ且青海波ニ走帆ハ妙對暗合奇なる妙名騅宜ニのミるゝぞ在下這回の上京ハ浪速の浦まで水路なれバ那青海波を牽せ行ハ別条もあらじを今もあれ身の暇を賜りて、千里の遠ニも只一日ニ稲村の城ニ到らんと思へバ安房へ還る折を以這走帆ニうち乗りて政元苦辭ひたまふとも受奉らバ自餘の宝貨ハ何ぞ愚ニ衷他ニ乏くハあらじと笑ひて今ハ悔く思へども却已ニ及ハず、東西所要ニ立バ我も亦本意ニ稱ふべし、琳童々々就て又一説あり、御曹司和郎ハ博識ニよりて唐山の故事さへ思ひ合せ、那金圖ぶ虎の圖の、無瞳子と呼做せるハ、東歴正異聞ニ疑ひあれバ其画虎の両眼ニ新ニ目子を點ぜめやハ、王竹林ニ共風ニ命じて其画虎を、怪むべき件の虎忽然と脱出て人を害ニ世を驚しハ、今もなほ白川山ニ栖みて那黒在ニ豹莫這一椿事の顛末ハ世の風聞ニも知れるごとく然バ言ニ省て今具ニせざれバ是故ニ心ニ苦しめ、或ハ猫戸或ハ勇士を募りて那虎を對治せまく欲りしニ、或ハ又神祇陰陽両家の厭勝修法名僧知識の加持讀経各其功徳をのそミ、力法力両ながら纖芥も経驗なきニ上の譴責世の悪評我身單ニ集りて我面目を喪へるをせん術なきを查ねかし然れども和郎ハ姉年の勇士ニも学問廣博智慧深甞菅家江家の老儒ニも優りて憑あく覚れバ問て惑ひを釋まく欲ニ、那虎妖ニ鎮んやと問れて親兵衛阿容なる色なく謹て答るやう、下聞を羞ず玉のごとき弱冠菲薄の在下ニ時々仰合さるゝ博士態て答まるゝ烏許ぞまでも笠礼ニも仮ニ思ふよりゝ言ニ及ぶ反て不忠告ニ似たるべく、丹も愚の本意ニあらざれバ罪ながら言るゝ其憚りをなくてハ肝胆を吐ひらむ抑元弘建

武の擾乱よりの世ハ戦国の今に至りて臣たる者ハ君を弑し子たる者ハ親を害し夫婦相背逆兄弟鬩ぐとなるも間多かりし故に天変地妖屡見れて上一人より下萬民に儆戒を示せども仁政行はれねば反て奢侈を恣にし貨を弄びその上に習ふ下なれば是によりて大利を欲す奸民も甚しきぞ今番那虎の図の妖怪も職として此れに由れり然れば老聃が道徳経に道を以天下に莅めば其鬼鬼ならず其鬼鬼ならざれば其神人を傷らずとあり物千歳を歴てまだ霊ある霊あるときハ変化自在遂に祟を做さることを為ぞ那金図の画の虎妖の如き是なりあれども明君上に在し賢相是を輔佐すれば道をもて民に莅めば鬼も亦鬼ならぬなし人を傷る患ひなかるべし譬ば唐山にも徳行のきこえある宋均が九江の太守たりし時其郡に虎多くして宋均則民に下知して其檻と穽を去て防せざりしかば其後虎ハ皆江を渡りて在らざりしと云故実なり又劉昆が弘農の守たりし時異政ありしかば其地の暴虎皆子を駝ふて河を渡して去りしとの是亦正史に載する所浮たる言にはあらざるべし又孔子家語に孔子泰山を過るとき婦人の哭を聞て其故を問へば對て曰舅と夫と及兒子さへ皆虎に喫れたりしかれどもなほ他郷に去ざるは爰には苛き政なければなりと孔子是を聞て歎息して噫苛政ハ虎よりも猛しといへる故事もあれど蓋政ハ即正なり其身毎に正しければ令せざれども民咸従ふ國を治め家をととのへ天下の平ならざるも只ハ是政の好ならざるにあり賢相を云這義を事として能明君を輔佐なれば白川山なる暴虎も患ひと做すに足ざるべしと憚る所もなく諫るを政元聞て嗟嘆して然ばとよ其政の好ならぬハ衛尚に咄く者ありと聞しかど其ハ寇を見て鏃を磨き飢に臨て稲を植るに亦何ぞ異なるべき今の迂遠なる事をせんより譬近なる術もがなと問れて親兵衛又いふやう機ハ是事に先だつ者なり一善なりとも做すとすれば其機先天地に亘り一悪内に萌すときハ其機動かずといふことなし然ば徳の流行あることは水の流れ火の登ると異なるべくもあらず仁政の事ハしも國を治る捷径なり今日是を行へば今日必行る迂遠にはあらざれども賢相ハ只那虎對治の一義をのみ

急ぐ多く并も做ざるを政元ら少て开の入甚多き便直あるやと問へば答て然ッ今愚意をもて論ずれば那虎故画の変化なれども既ふ霊あって人を傷れば必是形體あるべし倘形状ある陰鬼ならば非如人を傷ると雖も陰火の物を焼ざる如く骨を斬り血を流さ挿ざる筈善女ん既ふ形體ある者ならば戎ふ弓鉄砲の及べきとは揺戸ぢが怕れて力を盡さる筈勇士とへども耳怯ーとよも思ふ故ふそれ倘亦陰鬼の類ゆく只人の目ふ見れども実ある形體ある者ならば墓目鳴弦の法術をもて征るすべ術のあるぞやと鮮れて政元胸啓けくうち含咲て點頭て宣ふ余ゑ辨論明亮數日疑ひ一時ふ釋ら願ふは和郎我ゑ與ふ白川山ふ赴て那虎を對治せよ大功あらば甲賞禄ゑ乙ふ儘せを憑むくと叮寧る詞ふ他事ふあらず我封内の郡ぢ猟興ぐ倶ふ将軍家ふ忻然とて答ふやう在下滝留稍久く既ふ我層の賜ありて一介の功名を心苦ーく思ひ詰ふ那虎對治の銀命ハ是本来の面目ぐ幸ひふーくよ成事あるとも恩賞ハ願ーらざる歸東の暇を賜んと懇ふ存ず然ると饒ーぬぞーて尚留まく欲ーぬず縦首ぐ捕らくとも其実我ハ御免を蒙るべし在下單抜生ぐ虎ぐ那山ふ求獵るとも不幸ふーて虎ふ遇ぐ日を歴て餓ぐ死ぬのぐ阿容々々と山ぐ下りそ那里へ行ぬべき方ぐ又幸ふーて虎ふ遇ふとも我力及ばずーて命を其首ふ喪ぐ世の胡慮ふあらん倘ぐ偖ぐ危く空倉ぐ一大事と知らざらん願ひある身の悲ーぬ言既ふあふ盡せる愚心表ぐ憲査あれかしと美義を見て勇む英士の雲霞輻湊ぐもあーぬれば政元一霎時沈吟ーて肚裏ふ思ふやう。現這後生の神々ある事必是那虎ぐ對治の大功あらざる筈ぐ开ぐ帰東の願ひをーも饒さ

暇を賜るべーとぐ政元ゆあへず和郎の情願然ると雖ぐ人のよく世ぬ虎猟ぐ成ぬて我這裏ひぐ釋ぐ則是當家の忠臣益世の勇士ぐ仆らんやふ仕へあん東へ還るとも真実立ち林死ぬ親兵衛徐ふ又ぐあらざるねどと匹夫も志を奪ふべからざ都下の武勇士諸山の名僧各ゐぐ空くーて成ぬとも急ぐ虎對治の銀命ぐ従ひまうれるハ當実利達の為ぐあらざ這功をもて歸東の暇を賜んと思ふ存ず然ると饒ーぬぞーて尚留まく欲ーぬず縦首ぐ捕らくとも其実我ハ御免を蒙るべし在下單抜生ぐ虎ぐ那山ふ求獵るとも不幸ふーて虎ふ遇ぐ日を歴て餓ぐ死ぬのぐ阿容々々と山ぐ下りそ那里へ行ぬべき方ぐ又幸ふーて虎ふ遇ふとも我力及ばずーて命を其首ふ喪ぐ世の胡慮ふあらん倘ぐ偖ぐ危く空倉ぐ一大事と知らざらん願ひある身の悲ーぬ言既ふあふ盡せる愚心表ぐ憲査あれかしと美義を見て勇む英士の雲霞輻湊ぐもあーぬれば政元一霎時沈吟ーて肚裏ふ思ふやう。現這後生の神々ある事必是那虎ぐ對治の大功あらざる筈ぐ开ぐ帰東の願ひをーも饒さ

ぞハ他も亦我命令を空ふーで必虎を獵ざるべし。我始より心を用ひて今日まで留めし這後生を放ち遣さゞ惜けれども虎の一芟ハ我上ゆく龍辰安尼ぉの擧ふ在り。信れバ歸東の願人戔饒ーで成も事あるや不ぉ見るふ不如と啓うやくふ主張ちうち點頭でやがて親兵衞和郎の志願人各其主をかゝふ其忠誠を感ぜり那虎製治の大功あらバ我將軍家ふ稟上て其身の暇を取べし。ぉ美ハ蜜ト疑ハで疾山獵の准備をあるまじ。これを感ぜり親兵衞ハ阿と応て膝の我むを覺ねまでふ怡悅ふ堪ず額衝て賢相維上ふ在も目今免許の御一言ハ則是將軍家の台令ふ同じかるべし。疑ひなきふあらねども猶一條の願ひあり。在下賢相の威福ふよりて那虎を對治ー畢らバ徑ふ近江路ふ走りて辭せむと安房ふ還ん豫聞ゆふ幸崎坂本逢阪大津。ぇの四箇所ぇ新関あり。曾領免許の関符を以外藩の武士を逗留もべくもハゞ今関符を賜らバ安心ーて打立ち易し。元ハ困じて頭を傾けく介もぞふ思ふ。是非ふ及ざる一個の近習ふ吩咐ふ文句ハ固様々々そと。ぉの印て卒とく與れ。親兵衞ハ遽ーく膝を找めて受戴ぬ。故処ふ退ぬて開ぬて徐ふ其書ふ道ら。

安房里見義成使臣犬江親兵衞仁事。

今淹留本郷。然今般以命對治白川山虎妖之義故進退儘他之情願若有其功而證据分明則當許過其關隘而歸東也其功未分明非見所殺虎雖云欲出關門敢勿許。進止宜從此旨。

文明十五年十一月日示

辛崎阪本逢阪大津四所関守等

右因台命雖

左京兆執

け。親兵衛這書を讀訖て巻て懐ろに收れば改元の又の年。和郎那山ふ走くふ弓箭銃砲ふ捷まする。伴當幾十名を従せやと問ふ答ふ然ン候人ヲヌけまへ倒ふ足を黄縁りゆく。事ふ益ふ在下が伴當の安房より相従ひ一着毎の久く客店ふ待るあれども只今のごとを告知せく。近江路へ歩一置くべし。倏れば従者八人も望ゃるまいと辭ふを政元感嘆く。壮哉噫勇ある左てもあれ右ても和郎の隨意宜く進退せらるべし。這郎中ハ我外ふ騎馬なる者を餘さまざまも無鞍を見すく欲けれどもの庭上より那走帆ふうち乗く宿所ふ退てく。疾山猟の准備をせよ今宵よりく企てく吉左右をこそ待べけれといそ〳〵立さば親兵衛ハ敢ふ再誂ふ及ばず命ずべ御免を蒙ると仰ふ従ひながらんと答て躱く退ぞて早く縁頬ふ立出れば青侍もろともろく馬牽よせれば親兵衛ハ鞍の前輪ふ手を掛く内りとうち乗る廣場少く地無徐ふ両三番乗違一無復一て卒とたうふ青侍もふ安内を憑む騎馬の礼鞍ふ額衝ふ坐席の方ふ別を示一く悠然と外面投く歩けり。倏而犬江親兵衛ハ名馬走帆うち乗て宿所近くなる程ふ又那直塚紀二六もその日も大部屋小部屋ふ毎ふ餅を賣ふ来ふけれハ憶ずも今這里ふ。親兵衛ふ約遵く路の傍ふ跪居るを親兵衛うち見く馬を駐めく。爰よや井里ふ漢子汝ハ折々我宿所へ来て餡餅を賣る経紀児狹と問へ紀二六然ンハいぬる比御誂の米饅頭をまゐらせ一ハ小可ふてけるとふ親兵衛點頭く。あらゞ汝を労るよーまりなねくといふも腰ふ挿る扇子と共ふ墨斗を早く抜出て件の扇子の面背ふ數行の呼要を寫着て乾くを待ど推畳て墨斗と收めく爰よ餅師我安房より招て来ける伴當们ハ二條甘某の町の客店甘某甲屋ふ在りそゞ中ふ娩雪代四郎と喚做る一個の伴若黨有り汝ハ歸路ふ立寄くその代四郎ふ這扇子を正可ふ遞與ーね憑むぞよとふ紀二六応をあつ遽一く身を起して馬の邊ふ近着て件の扇子を受含て恭一く答るやう仰兼りぬぬ今日ハ毎よりハ疾ふ往てそふ早く賣買ふ果ハべ程なく届けまゐらせんと早く退ぞて行の礼と迭の応答外ふあく人の耳目を憚りの劇るう急ふ紀二六ら後門を投て歩く

ちうきやう
郎中の騎馬
まさて
仁
さとろく
紀二六ヵ逢ふ

おの小出像紀さの本文ハ第八
百四十五回ぶんぶつまびらかにそんさう
鮮

乞ふべき程ふ親兵衛ハ馬をそめて宿所ふかへ入りふけり不題悪僧徳用ハ徒弟堅削と共侶ふ白川山る虎妖を調伏の祈禱日を費ーて法衣の袖ハ護摩の煙ふ燻り師弟の聲を讀經ふ嗄れて八月の蟬ふ似れども毫も法驗うることなけん青侍們と圍坐ーん要領雑談をする程ふ夜の且走帆と名つける名馬を賜り今宵ハーて那身單白川山ふ赴く。虎獵と做いと云事の趣を憶らず少知そ媚びと涯りもなきを然ら面色ーて退く。却堅削ふ件の椿事を箇樣々々と耳元ふ告ぐれば堅削も亦怨ふ堪ず開いふーて可ら。と問へ徳用聲を悄めて然べとよそのみ我憶ぎも那小猴子ふ君寵を奪れ以来ハ倣を事毎ふ感妬そべ日義ふ試斃ふ不覚を攬らる怨ど復ふ便宜もなく今番の祈禱ふ驗を込ざれバいよく主君ふ疎れて終ふ他郷へ牢遣れ是も亦知るべくぶ。今又親兵衛奴ら萬ふ一那虎を獵得ず主君の寵ひを殺ぎバいよく女婿ふせられん是も亦知るべくぶ非如我

身ふ異ふく生涯その地ふ在るとそも那奴が富貴を見ず聞ず。阿容々々として下風ふ立んや。呼詮然ハ我ふ齊ず五虎の勇士ふ諜ー合ふく今宵那奴を剿斃ふ結果て東國へ走らん豈快らざや。と腕を拊ち説示せバ堅削听ら含笑て師父の主張極めく妙ん世の鄙語ふ欲ふの駝貨とーもふとある左ても右ても去の後ハ二ど来べ宿ふ泊ふ及ばず。いふえ鵠鮮の府内雪吹小姐を掻攫ひりくもふく飽までふ樂を取て後ふ坡院ふ雀ぢバ両得ありて一損ふ。這説什麽と悄詰げば徳用欸ひと點頭く我いるヤ思ひ足らず。其頭ふ撻念せざりかも東國へ走らバ還俗ふく常言ふらふ色中ふる餓鬼の苦恵を免れんと尋思ふなれバ幷ふよけん我隊より大爺ふ政元を勧ふ伴り告るよりあれバ那小姐在らざるる折必旦足親兵衛を募ふく逐電せふんと大爺ハ思べーふい志病起り及と有司ふ告ふく宿所ふ退りそ。悄地ふ准備を整ふく然而賀茂河原ふ赴ぐ。疾那五虎の勇士們ふ機密を示ふく親兵衛奴を共侶ふ斃る果まバ今宵の便宜を相譚ひ那人々も試斃の後恨あればぞ欺びく。

必否とハふべくも既ゐ相譚ゐ果しゑ汝ハ那里を辭し去ゝ烏夜ゐ紛れて甲夜間ゟ赤本邸ゐ近着て後門の西のゟゐ故ゟる赤松両樹ある築垣の外ゐ立ゝ我那小姐ゟ極攫ひて走ゝ来ぬるとやらねバ有徒るべしとハ豫ゟ思ひけゝゐあらねども臨時の一所要もあらん欤とゝ親の管ゟる軍用金を百両竊ゝて懐へ久ゝく温め措しハ去向の路費ゐ医ゝゟゑ只欲ゐ為鐵の鹿杖ゑれども最重けれバ汝合ゐ不便ゟゝん白川山ゐ暴虎あり且親兵衛奴と狙撃ゟゐ鳥銃ゑて要撃ゟれ銃砲二挺を亡ゟるとゝ言送もゟゝ耳ゐ示せバ堅削満面ゟゑ現脱落ゑ軍師の来配都ゝ隨意せざらんや。先ゝ志病の趣を告ゝ相計ひなバとゐ徳用再説ゐ及ばゞ又遠侍ゐ立出ゝ青侍ゟをゟゝ徒々と有司ゐ告ゑ。堅削を扶ゐ歩ゝゟ轎子ゐ乗せゝ宿所へ遣ゝけゝ。話分両頭。ゐゐ又室町将軍尚義の外様の家臣澄月香車介直道ハ冒裏ゐ管領政元の招ゐ応ゝゝ犬江親兵衛と闇槍の折後ゐを攬りゝ額を傷られゝ落馬ゟる折の為体を隠

もとゝれど人ゐ知らゝゝ。世の胡慮ゐゟりゝバ将軍家の御覚宜ゝゟゑ。朋輩の誹謗ゑ面伏られバ身の撲傷ハ愈れども猶病着ゐ假托ゝ久ゝく出仕せざりけゐ。又一層の悪風聲ある冒裏ゐ直道ゟ管領政元ゐ招ゟゝ闇槍の場ゐ造る折其ゑを将軍家ゐ愬禀ゝて御免許を禀なゝゑ。況安房の国男臣ゟゝと脆くゟち負ゝ更ゐ助立の者の側杖ゐ打れゝを恥と思ゐゑ。阿容る仮ゐ自殺もせず幾ゟゞの篭居るゟん只是他ゞ恥のゝゟゑ。幕府の御瑕瑾ゑの上やある。ゑの故ゐ扶禄二百貫を召放されゝ。身の暇を賜ふバ狭るンどのふ衆口喋々あゟゝゞ直道これを少知りゝ且敬駕バ且怨ゐ堪ざれバ深念ゐ枕を摧ゟゝ。窃ゟゝと一箇の計策を泄けれバ。年来股肱腹心と憑ゐゝ件の風聲を耳ゐ示ゝ。各も是ゟの工言ゟ少知りてやあらん。ゑゑんべゑ江親兵衛ハ武藝標姚我黨の上ゐゟゞ然バ他ゐ負ゝゟるべ獨我のゝゐあらざれバ。執念深ゐ怨むべくもあらゞゑ只憎むべバ景紀ゟ。他ゞ憨ゐ我を幇助るとゝ同士毆ゐをゟゝゟべゝて。

れて我い痍を負ひ落馬もせれば遂恨の景紀ゐ在り然るを那奴い陳謝ゐ及ぼさ五虎の
曰貝あへあらぶるゐ正告真賢経緯もと共侶ゐ暴虎を防禦の與黨兵數十名の頭
人とーく賀茂河原の勤役ゐ辨侘をりゐ誰ゐ其器ゐ勝さりとやんや又有賢
正告経緯も介ぞり年来咱もと言合しる武士塾会の友さ係美我ゐ背ゐく我屏居を
訪ひもあぞ二度び時を約貌る那勤役ゐ快らね然が這奴們ゐも恥を赫変して這讐
腸を殴平えと思慮りの方すゐ沙る一箇の筭計あり其計策ゐ箇様々々と耳ゐ示して
又いはう和殿も師弟の義ゐ仗く倶ゐ真愛ひを分えと思ひ那里ゐ赴くく流言ーく事の
當否を見よ我計策ゐ如其折和殿もと共侶ゐ河原の守屋ゐ赴くる多ゐも謀ら
然を復さんその兵什麻と悪ゐ梟煽る密設ゐ七個の弟子ゐ送ゐ面を注まるの心難
なる幵ゐ中ゐ順風耳九郎千里眼八と喚做る惴雄の壯佼あり卒然として倶ゐ答る
はう御迷恨の事の趣然てそと査ーなれば倶ゐ慨きくゐれ我們不似ゐへぐも佗る時いりゐ

考へ已が頭の蜂吹くのこゆく御教諭ゐ従ざうんや宇ゐ趣神出鬼没の民談ゐ必
考もれえ期ゐ臨まば我們七名助剣勿論たゞの兵什麻ゐ安れとと詞雖を考く
尉ぜれば自餘五個の弟子も感這使ゐ氣ゐ励されく倶ゐ神水を嗽り拆ゐ做して赤心を示す
かゞ真道斜ゐそ発びく然べ事ゐと急ぐべーとて亜金十両を令る出して耳九郎もゐ遣與
まけり介程ゐ順風耳九郎千里眼八們の七名い北白河より這方ゐ処々の民屋ゐ赴く流
言ーく賀茂河原ゐ正告景紀真賢経緯もの守屋ゐ焼ける。登時
去の四箇所一列の殺兵ゐ毋ゐ件の風聲をうち聴く駭怕るくと天々さる悄々地ゐち取合て。
皆共侶ゐ談ゐる。昨今這頭の風聲ゐ知りぬ往日北白川ゐ一荘客の夢ゐ那霊虎
忽然と其枕上ゐ来く告るゐ我甘ゐの見ゐ瞳昏ゐ賀茂河をうち渡して権且京ゐ遊まく
欲ゐまゐ倫ゐ我ゐ河を渡さ甘ーとそ那河原を相成る紀内鬼平五景紀種子嶋中太正
告難馬海佑真賢。並敵齋経緯もへ年来管領政元の恩顧を負て其藝ゐ誇り

氣を使ふ不良の行ひ極りなし。剰又其隊に從ふ殺兵們も錢を欲りし酒を貪りて。毎に管領の權威を借て。市人の悪ひを做ものも一個も好人あることなし。此故に我那河を渡しの日頭人殺兵漏さず者ゐく鏖にせまく欲す。汝達本日の矇昏に那里に彷て見よかしと示験と思へバ。驚覚けり。其の身只その一人のみならず。一村みな愚直なるハ二人も三人も其夢を見たりよ。夜なる夢の告ありといふ。其奇談を今朝初て聞しに虎の卜日ハ則今日なれ作麼らに甚可らんや。と云ふ中に種子嶋正告の隊兵中。三田利吾師平と喚做もの小頭人なり。一霎時沈吟して。衆兵に應めくらひていふやう。かくいはせんとて今日に逼れる災害を避ずして長詮議に時を移さバ誰か免るゝ者あらんや。然バとて立去らバ勤役を等閑にする罪是も亦免れがたし。所詮觀音寺の城に赴きて。六角家高頼に降参せん。是より外に術なしといふに大家有理と悟りて。倶に逃支度を做程に。比叡山下風時なくて颯と音して來る勢ひに河原の沙石を吹颺て。黒白も別ざりしかバ。殺兵們らく驚き慌て。虎嘯けバ風起るといふ古語ハ是なるべし。那暴虎の出來ぬ間に逃げんと悄喚ひて。闇に紛れて皆共侶に近江路を投て走りつ。十五六町に及ぶ程に勁風早く定りて日ハ西山に没んとする時。韓馬真賢の隊に隷られる殺兵の小頭人に藻洲千重介と喚做もの兵あり。猛に衆兵を喚住めて。大家約ね談するよし。我憶ふに我們縡連ずて觀音寺の城に赴くとも。譬ハ首なき蛇に似て一隊の長たる勇士なけれバ戰飯貴んとせられて受容られず。争何せん然ハ審なき敵地にいるんより。其の日屬蜀我們を惨刻く罵り使ひたる四個の頭人を誣て。身を安くせん。然バ先両三名早く京へ走りかへりて。館に訴禀さんには。小可なるが頭人種子嶋中太紀内鬼平五韓馬海傳坌齋經緯ハ河原の勤役功なき故に罪せられん事を怕れて反て倶に逆心あり悄地に六角高頼に謀し合して。那大軍を引入れて魁して京師を攻んとす。早く討隊の御勢をもて擒捕せられずハ大事に及びなんと是しやうに告まうさバ必討隊を向らるべし。その折我們先に稜ゑて。不意に起りて鐵砲もて我頭人們を一個も漏さず撃果しなバ我

大家都是三百名推並く忠告の賞禄を賜るのみ。河原の防禦と云能られて長く那
虎の患を免れん所くの説に従ふべしと詞急迫に説諭せば大家听く怡悦に堪ず。
亦奇妙の計ひる出ざる。素より我ら頭人ら敵赤蘭海賊ら隊に隷
られて日蜀威勢を振るひと朽惜く思ひ。弁い物怪の幸ひなり。今こそ甲冑
人を撰く口状を論く京へ遣す程に既に日の暮れ討手使を迎んとて大家其里
より引返く故の河原に近つけり。不題澄月香車介直道に畳裟服心の弟子七名
流言の秘策と相授く。指も方に遣ず。猛可き妻を離別
ず今茲三歳に成ける獨女児さへその子の母に隷け遠離く既に身の覚期とあり。那
弟子ら音耗をいふくと窺ふ程に約莫五七日を経て耳九郎眼入ら七個の弟子ら悄地白
川の方より来る。直道に報る様。御妙策の流言既に紀れく。賀茂河原る勤役の士
卒ら送く是を聞知りけり。日毎に河邊に立盡し四隊の兵毎の今日ら皆鬱悒した面色

ゆく。小聚そ相聞くもまどろら憶ふ久くもそ。他ら人ら早く準備を整へ
出させじと萬ら直道欺ぴて再説に及ぶ奴婢ぁ云云と諭らく留守を奉ね然而准
備の遅脩を笑ふ程の熹ぬ昏ぬ宿所を出て倶ぬ賀茂河原へ赴
けり。余程ぬ種子嶋中太正告。紀内鬼平五景紀鞍馬海賊真賢ぬ敵赤蘭経緯ぬ暴
虎防禦の與ぬそ。河原の勤役を請ふ。各口々に
事もなく日を過せ程ぬ有一時勁風沙石を颺て天
見れば都て河原ぬ辛ら殿兵ら一人も在ぬ。
可の弟子両三名ぬの役ぬ従そ。ありける吩咐て疾那奴ら
左右へ部ーて走せーふ日の昔暮れぬらば忍れ心ら
生ぬの守屋ぬ取ら合てぬの兵什麻と商量を凝時
諜ー合ぬ機密さへるりのぇ折ふく殿兵ら虎の

経緯眉を顰て然がとも其事を剖断の談は姑且閣て風聲の如く那虎が這頭へ出て来るをみ
れば
我们のこゝを事何ぜんとなるを直賢うち笑ひていふやう。あんぢ我と和殿が臨時の役をゝ御門人ホ
あんぢぞれが那奴们都て侮りて事をゝとゝ懲こらさんとそ權且影を隠あーきえとゝへば景紀點頭く。
有理らゝ如くうべ我も尚是近習ゆゑ兵頭をこぞれが那奴们飽まで思ひけん升い左もあれ
あれ明ゑ館へ退まろ。仇と其罪を正もべーとうべ詞らまぎ託ら外面ゝ喚ひ者あら誰也
と問へば別人をぞ澄月香車介直道が両個の伴當ホ蹲踞て這四個の頭人の勤
役の安否を訪こゝ。悄地ホ出く来ゆゑ當下景紀經緯ハ凜ーく立迎ゑ躰て圏坐ホ
請入れば直道則這四個の頭人ホ對面ーてゐまう。諸君ホの地ホ盛勤の事ハ趣を我知ら
ざるホあらねども是裏ホ那聞槍の失錯をゝ堂中の首尾宜ーくうねべ今も尚出往を林ホゆゑ久
く屏居るゑれが疎濶胡越ホ似ゑれども昨今世上の風聲の如ゝ立寄ホ手前の小卒们ゐ夢物語ホ耳驚ゑ逃ち
問んそ。悄地ホ出て歩るべとゝへば景紀先答て吁恭ゝ御深切御尚ホ投石の失を直ホ解ん

と思ひホ御當居のようゑれば只得默止ゐりホ其後又ホの勤役をゝ暇ゆゑべゝと陪話も果ぬホ正告
真賢經緯も共侶ホ欸びを釘差ゑゑを相視ーて却今宵默兵们が不慮の逐電悠々と告
る。を直道うち听く开ホ安ゐゑゐゑゐゑ意ホ手前の小卒们ゐ夢物語ホ耳驚ゑ逃ち
とも那里へかゑゑ。天も明べかゐ来ゑホ然ゑをゑゐとホ知ゑーて咱ちホ商
ゑー薄酒あり。推驚ゑゑゑべゑホ。ゝ間ホ直道の両個の弟子ゐゑ紀て其二種を披露ーゐ火を
吹起酒を温ゆゑ餚と共ホ安排べ。酌ホ立ゐ莚ゑれば正告景紀ゝへゝちゑ真賢も經緯をゝ
素より飯ホ優ゐる。齋ーホ倦ゐ折憑を掃ふ玉ゐ帚ぞと紹く俱ホ飲びを舒て迭ホ酌交ゑ
其不器向ひて蛇をぞーて呑ども飽ぎ蜂をゐゑホ萬蛸ども嫌ゑぎ右ホ旋ら左ホ回ーて主客
酩酊ゑゑゑも今ゑれば草ホから多小謡曲を息絶ーげホ唄ゐもあら扇柏子ホ早歌の古の廻ーぬ
正告ゐゐ鄭ホ徳用堅削ホ誅ーゑれをゝ醉ホ堪ゑべ柱ホ依ま
真賢の肘を枕ホ寝るとも知べ横臥ゐ唯直道ホ始ゐゐゐく不盡を受ぎーて猶景紀ホ薦

香車大く進ゝく歩兵ハ攫ム

めて已に當下景紀頭を掉く。澄月主も亦理へ其の大盃に數番と重ねて泥の如くなりぬ。
あまさへ今又是を爭何ぜん縱命を會ふとも這盃ハ否否と固辭むと直道冷笑ひて余
らが和郎の望ハ儘ぬ命を會ふん投石の遂恨受ても見よと抜打ハ振晃めも刀の電光
景紀ハ吐嗟とだらハ刀を會ふれども合ぬ隙多く首と托地と斃る落されて血烟立ても仆と
ける經緯是ハ駭ク慌てやれ直道狼籍ぬ倒ると吸ハ煙めく組んと找むと直道堪ぬ
拂ぬ最も烈ク刃火ハ斃されて經緯も痍を負ぬ程ハ正告眞賢驚ク覚ぬ倘事ぞと共
ぬと侶ハ會れる刀を抜閃めて徑ハ直道を斃ぬんとを程ハもあぜ直道の兩個の弟子推隔て了
丁礙と敢ハ結ぶ正告と眞賢ハ遂ハ直道の弟子を甲乙共ハ所仆ぬ又經緯を相助て澄
月を斃ぬんと競ひける既ハ〻く直道ハ三個の敵ハ引受て最も烈ク戰ふ程ハ耳九郎眼八筋以下の助
外面ハ張ハ〻く直道の助劍五名千里眼八順風耳九筋准備の短鎗の刃頭と擱へて
齊一吐と掴入ク。耳九郎ハ經緯を只一鎗ハ刺殺をハの勢ひハ氣を沙る眼八以下の

助劍ハ正告と眞方ハ息をも窺ねど攻ケる狀ハ覚ぬ猛者ぬ。
倶ハ痛傷を負ぬ六個の敵を引受て最も烈ク戰ふ程ハ耳九郎眼八筋以下の助
劍兩三名ハ鎗の蛭巻所斷ぬく痍を負ざるハなりけり有徒ク程ハ衛ハ逐電ぬる。
斃兵の小頭人三田利吾師平藻洲千里介ハ既ハ一味の斃兵兩三名を京へ告訴ハ
遣ぬ後正告以下の頭人ハ各ハの守屋ハ在るを在ぬ事ハ光景を張覗んとて火計の
斃兵の心利ぬるを二十名許從ぬ各鎗砲ハ丸名竜單蕉火を准備ぬく悄ぜふかの
ぬつ先正告の守屋の前後より内の景迹を覗ふ正告眞方經緯ハ各鮮血ハ染ぬる。
五六個の敵と斷戰ぬく孰も暇あるとく景紀ハ既ハ斃されく外ハ幇助の手容あぐ吾
師平と千里介ハ這鬪戰の事情を知るとそハ折を沙ると今呂矢ク一味の斃兵ハ義ぬ
示して倶ハ守屋ハ找ク入て前後より連發てる。二十挺の鎗砲ハ誰ぬ一個も免れん身方ハ
正告們是ハ名敵ハ直道以下六名各空射所を斃ぬ洞されく象棋顛ハ仆ぬけり。

第百四十五回

五頭を献りて衆奸卒數頭を喪ふ
脳小を樓ふして悪師徒多足を断る

却説藻洲千重作。三田利吾師平。二十個の賢家を幇助して頭人並に澄月師弟を天場の銃砲もて砲ちて造化好と悄動く折ら。逸ぬ殘り住りうる賢兵一百七八十名も安危心許るさで。悄地ぬかう來ゐけれべ千重作則他們は向いて方僅四個の頭人と豫而著る香車介師弟五七名と厮殺ふて勝負いまだ決りー折我們あてぬ來ゐけ易べ料まも便宜を沿く。潜び寄つ前後より。二十挺の火砲をそ一度ぬ結果けうと去事の趣を告て。又のふ意ふ。澄月香車介直道ハ何等の故ぬ其弟子。六七名を伴ひ來て四個の頭人。種子嶋。紀内數馬無敵齋等と企る禍事を做出ーうるや。情由を知るよーうけれども。這師弟きへ共侶ぬ數を捕けるハ妙るらぎる。今這主客の首五級を倶ぬ館へもまねて。既ぬ想亶示さべ首尾相稱ふ。御感ハ入ぬ増さべらん。有司ぬ質ー問れん折ら合せよ。忘るるとのふ。大家歡び感ー。その議定ぬ精妙ー然らべ先頭人等の首梱落七もよくべーと悄動るぐら。大家の壯佼五七名内ぬ入る程ぬ衢ぬ這賢兵們を赶蒐て。河原を左右へ走りる。四個の頭人の弟子十名許竟ぬ孚遇ざりけれべ。途ぬて甲乙一緒ぬるて守屋へかへり來ゐける。外面ぬ賢兵們の告ヲ立在ーるを遥ぬ見て。腹立ーぬ同音高く若們衢ぬ那里へ由処ーする。我們既ぬ赶索れ去を知らべや。烏滸の白徒奴がと相罵りつ近着程ぬ千里作吾師平亳も噪がを。早く火家の兵毎ぬ真き示せべ皆とろ沿て。引提ー銕砲含直ーて當頭撫る二三十挺一度ぬ槌と鑽て發せべ又頭人の弟子們も。防ぐぬ暇あらぎもーて果敢なく都て斃れ仆れて。

ちへどつ つ
血反吐を衝も御ざるも。おの〳〵首ふ息絶けり。千童作笑つ是を見て。又衆兵ふ号く
令つ。既ふ遂ぬ〳〵撃ん巣して。外ふ機密を知る者るけれバ。各後易く逃べし。討隊の士卒の
出来ん光ふ咱ふるハ五個の頭人の首級を携へ館へ参りて。徒ふ日を短るる功を奏せん一
百名ハ三田利と共ふ大の処ふ住るべくぞの餘ハ咱ふるときれ。とのよを吾師平推禁
めて否とよ要るに守屋ふ在りて。倘那虎の来ぬるふ逢バ。免る者有らんかん。然バ今
日の計較ハ皆平なるの揮に介まで。復労あるべくもあらず。皆共倡ふもべくぜひなかのい
大家然りと応て千童作が説ふ従ハねべ。千童作只得那意ふ儘して。随即正告
景紀真賢経緯真道の首級を捕り。相携て吾師平と共倡ふ二個の火家を
招て西陣の館へ赴く程ふ。爾ふ這河原るの守屋の小頭人藻洲千童作三田利
吾師平が火家の小卒両三名をもて四個の頭人正告景紀真賢経緯の叛逆を。
火急ふ訟あるふより。主君政元の下知ふ従ひて正告ら〻を縛捕の一隊。野見鳥真

名五郎桜條と。換倣を兵頭士卒四五百名を領て馬をもめて来ふける。憶ぎ途ふて
行會ぶ則千童作吾師平へ事徒々と告て。四個の頭人と直道ふの首級を。
実検ふ入れ〳〵ぐ。真名五郎歓び感じて。有徒れべ三田利吾師平其隊の兵毎と相倶
早く西陣へ参り吾まりそ撃ん捕ようまの逆徒五名の首級を御覧ふ献へよ。又藻洲
千童作ら。案内の為ふ河原へ還りれ逆徒仕誅あれ
ぞも。観音寺の敵心許ぎ。我ハ河原へ赴ぎて。猶も非常を警んさの意を泊よと宣
示せバ。大家異説〳〵く言巣〳〵。吾師平ハ其隊の雑兵百六七十名と共倡ふ伴の首
級を携て別ぎて西陣の邸へ赴く程ふ千童作ハ又其隊の雑兵三十餘名を伴て。真名
五郎ふぞ従ひける。徒而野見鳥真名五郎桜條へそぐ俟士卒を従へてのよく路次のそだ
引起さ毎て検をるふまゐ皆銃傷のみうらぎ各相戦ふうりん。とおぼ〳〵ぬ刀磨

那身ホヨヌくあり。是尚最訝〳〵紀ホ這撃れうけ。直道ガ助剣の者の内中ホ一個の壯佼いまゞ死絶ぎまの時僅ホ息出ー。を真名五郎。隨即士卒ホ下知ー〳〵叮寧ホ勤らせて。准備の茅を薦めゐゞーつ又外面ホ撃れる。正告真賢。経緯景紀らの武藝投石の弟子毎の亡骸を檢まるホおそ皆銃傷ホあれど一人股を撃れーのみホて。朝所ゐられバこの折ホ我ホ復りて。事の仔細を訴る便りを汚う。登時真名五郎ハ這傷癒児を守屋ホ扶入れさせく。先ホ甦生りる壯佼と倶ホ勤り扇ぎそく。徐ホ其実情を探尋るホ守屋ホ在りー〳〵香車介直道ガ鎗法の弟子ホて呂塚赤四郎と喚做者〳〵則此ガ招了ホて直道ハ景紀ホ投石の遺恨あるをりそ遂ホ流言の箪十を打ひーホ既ホその便宜をゐさゞバ今宵瞑心の弟子。順風耳九郎。千里眼八並ホ赤四郎等をゐて這里ホ來て。謀りて景紀を撃ち東ー。且経緯ホ痍を負ー。又正告真賢等と大燄突戦遑急折。誰とハ知らゞ。前後より。連發てる銕砲ホ。

敵も身方も皆撃れて。共佰ホ倒是けん。その後の事を知らゞと云。又外面ホ在りー傷癒児ハ。種子嶋正告ガ銕砲の弟子ホて。河原の勤役ホ従事ある花下仇太郎是ゝ。這壯佼の口状ホく。暇兵們ガ虎の出来ぬると云。風聲ホ耳怕ある。僞ホ風聲の起ー時皆悉逐電ぁるてゝ。又仇太郎們へ師命ホようて左右ホ別れて他們を赶ホ。竟ホ及ざりけれバ日暮てかゝ来ぬる折及て暇兵們ハあホ在り。闇きホ紛れて幾十擬放銕砲を連發ちそ。仇太郎們を送もるく撃仆ある事の顛末並ホ正告景紀真賢経緯等ホ逆心ある事ホ知られーゞ。真名五郎嗟嘆ーつ。原来千重作吾師平等ガ狡黠る。其胆怯ホて逃る罪を瞞ん爲ホ頭人を誣て謀叛と訴て。更ホ便宜ホ儘ー。て。送りく是を撃殺して。伴りて其身の忠義と罪叛逆ホ異るゞぢ。一個も漏さゞ擒捕つゞねと。隊の兵每ホ下知る程ホ千重作吾師平。奸卒們ハ。ホの議を早く聞知りそ驚慌て共佰ホ逃亡んとあてけるを。野見鳥の士卒二三百名遮り禁め椎捕爺て。敵倒る數珠

繋ぬ。漏す者なく牽り来ぬ。登時真名五郎梭條へ捕捕せ。奸卒等ぬ痛く苦を中毒て。伎倆の本末を責問ふ。千重作ぬ。多く頼陳じて。一霎時へ爭ひ。うけ悲とも。自餘の賜兵ぬ痛楚ぬ泊堪ず。吾師平千重作等の佯誰の計ぬ従ふる。悪事を送ず招了せその言赤四郎と仇太郎が口状ぬ咱合あて。凝ふべくもあらざりけり。約莫這奸卒三十餘名へ鄙ぬ錬砲をりて。四個の頭人と澄月師弟及正告等の。なごらうすあまたを。真名五郎又士卒ぬ下知して。通宵是を備ら仕けり。左右まる程ぬ天の明あるを。真名五郎。則士卒一百名を分ちて。四箇所の守居ぬ留在しつ。傷瘡児並ぬ罪人等を相牽せてのそぎく西陣まる。郎ぬ還り来ぬると。吾師平等。一百六七十名の奸卒を。悉々と召捕て。千重作等。三十餘名の罪人と倶ぬ。厳おく牢獄ぬ繋せず。其後件の事の顛末を主君政元ぬ聞え上しかば。政元うち驚き。嗟嘆ぬ堪ず。次の日将軍家義尚の上聞を経て。澄月直道の宿所ぬ実検使を遣しける。ぬ直道へいねる比妻ぬ幼稚き女児を随ず。

離別あり。と聞えて。両三個の奴婢のそを。則家伏ぬ縛さまる。ぬ直道の貽留あり。是ぬて紀内景紀ぬ怨を復さまく。欺まる事の趣。ぬよく品塚赤四郎がぬ所と咱合一なり。其私の怨の所以ぬ君恩を忘れて。身を殺しまる罪あるべ。其証を立られぜ。又政元の家臣種子嶋正告。紀内景紀へ河原の勤役ぬ在まる雨ぬ七剣各その隊の兵ぬ。兵ぬ謀られて。狗死あまる。不覚の罪あるべ。是ぬ赤。宅養を呼親ぬ預られて。改罪ぬ行はる。又鞍馬真賢無敵斎経繩。同罪まるべ。他等へ政元の家臣まるべ。各月俸を召放ちく。眷属へ洛中の住ひを許されぜ。就中藻洲千重作。三田利吾師平。門二百名の賜兵毎へその罪特ぬ重けれぬ則千重作吾師平と那餓砲をりて。四個の頭人師弟を殺しまる。賜兵三十餘名。咸斬棄て。首を梟られ。這餘百六七十個同悪の賜兵。門ぬ遠き嶋嶼ぬ流されけり。有徒一程ぬ直道の弟子。品塚赤四郎も大赦の折ぬ遇て。死罪を免れ。又花下仇太郎も。倶ぬ其深痍愈て。死まる王を沿れども。迭ぬ

蹲児ふるりけるべし心ともあらん出家入道七一個八北嵯峨る観音の堂守ふ做りて世を終り一個八日毎ふ路傍ふ出て佛經を寫しつゝふ一二行一銭の施を沿て其半生を送りしぞ然べふの比五山の一僧の狂句ふ大蟲已趨何留大狙猛獣在山可笑衆兵護水又苛政可惶非民豈泰虎不害人人反相害又苛政爺千慮勞無功澄月一謀殲五虎とぞいへりける下の一句ハ三國志演義の題目ふ姜維一計殺三賢とある。秀句なるべし柳この時ハ當て京師ふて武藝をりて五虎の稱を沿るゝ秋條廣當其第一とぞ爪るふ廣當ふ素是温順の君子ふて已ふ勝るを仇と憎む那小人ども同じくらねべ機変破滅の田地ふ入らざ造化易るふ紀内鬼平五景紀をりて亮ふ時の人ハ舊ふ因て猶是をも五虎とぞ爪るふ益廣當留が賢ふて七五虎の稱ふ數さられし一尾礫の中ふ虎玉るを心ある者ハ心ありと皆後の話るれども五虎の局を結ぶ爲ふやふ備ふせざるとぞ沿を是より下ハ着官又犬江親兵備ふ虎獄の與ふそゝ白川山へ赴くとぞ

當日の段ふ反復して見るべし一間話休題介程ふ悪僧徳用ハ既ふ堅創ふ機密を授けて他を出遣りる當晩便宜を覗ふ稍夜ふ入て一時候館の中事あるや夜勤の近習青侍ふ睡らざる者ヲ窺れども後堂ハと静悄ふく雪吹姫の臥房ふハ両個の女房宿直をく在り徳用これを覗ひ沿次の間より悄ふ誰ぞ其里ふ佇りまふと喚立る両個の女房うち聞くふ声音ふ听知りる徳用ふれべ疑ふ足一個の女房ふて遽しく身を起して次の間ふ出て来る徳用ハ小間ふ方ふ身を潜まり遣り過しく両を逆掛る背より這女房の項を抓て吭を緊しく絞べ聲も為ず仰反て徳用ハ其七厳を爺ふ臥させく又只一個の女房を喚立まるを始のごく此なも亦絞り殺しの外ふ宵勤の人なければ舎ふ笑ぐらん雪吹姫の臥る身邊ふも入れべ雪吹姫驚覚て聲を立んとまるを徳用透さず抓き起して早く准備の布嚢を銜せ結招て脇腋ふ抱へ次の間ふ出て見るふ鄽ふ姫の病悩平愈の祈禱ふ用ひる般若經尚積累れくあり

走ると飛が似く。早く賀茂河の大橋をうち渡ㇾ七。吉田の茂林の邊を過る程ふ西行法
師の道傍の柳蔭ふやすらひねぐも。一雲時あふて憩んとやすらひ櫻をうち卸ㇾ。清水を喫
喘を定むく。迭ふ今宵の首尾を告るふ徳用へ雪吹姫を這般若櫻ふ捉ふ竜て竊出ㇾ
挿をを云ㇾと說誇れば堅削ぐのふう咱ふへ鄽岡ふ河原の守屋へ潛ふ赴ㇾて那四個の頭
人ふ今宵犬江奴を斃を捕るㇾ師父の密談を傳へふ皆欽びて異說あらぢ就中種子嶋へ
試斃の折親兵衛を斃を果さむく思ひふ秋篠廣當ふ同意せず。君侯も我說を否ㇾて
敢許ふのへねべ言ひるくて朽惜ㇾふ和尚の計較妙ふ哉我們四名殿兵や二百ぉ猝
加ふふ和尚師弟の勇力あり。今宵白川山ふ暁をとも虎害ふ遇ぐ犬江奴を斃ふ果
さん工ㇾ難ひㇾ。徒而那奴を結果て屍骸を隠さば人推並て那奴へ虎ふ啖れㇾぬと思ハ
ざる者ふらべ。とその期を揃る勇言ふ鞍馬紀内無敵齋皆共侶ふ會ひ天て介らぐ今
宵更闌て必犬江を斃捕てん和僧へまの美を師父ふ傳へく那山路ふ来てなるㇾと固く

ハ犬傳九輯巻二十八　二十五　文溪堂藏

これふ是究竟と其一箇ふ雪吹姫をうち入れて。蓋ㇾて又四下を見廻ㇾふ人を召ぶ鈴の
太緒の長く餘ㇾるを幾仞ふ幼れて柱ふ掛てあり。隨即是を研含りて。櫺を勝げて背ふ
駝ㇾく案内知ㇾる縁頬の雨戸を外ㇾ庭ふ出て堅削ふ約束ㇾる築牆の邊ふ赴ㇾて
他へ既ふ外面ふ来つるふ暗ㇾふ小石を拾ㇾく投ㇾぐ又堅削も
小石を内へ投返ㇾく。その状ㇾ。さも知せけり。登時徳用へ駐ㇾる般若櫻をうち下ㇾて長く
餘ㇾる辮の太緒を松ふ投掛く悄近く曳登ㇾて。身ふ赤松ふ攀登りて徐ふ櫻をを
縁下ㇾ堅削へ。そ来ㇾる那鐵の鹿杖を満ふ渡ㇾ近つ。来て件の櫻を受含ㇾく
舊処へ退く程ふ徳用へ携ㇾる太緒ふ携りて早く外面ふ下り来つ溝を渡ㇾて造化好
とのへまくあㇾる口をみづからそと摘夾て堅削ぐ書
感ぎるのㇾ則これを杁ふ代ㇾく件の櫻を荷ㇾ折。堅削へ。鐵と行嚢さへ勝附て両肩入れて。
先後ふ立つ卑りそく程ふ二十日あまりの月出て。路明けれぬ。追隊を怕れて。面を單ㇾ端を忍びて。

約束せふと。告るふ徳用點頭て。然べ汝ハ走一走守屋へゆきて那人々ハ立出すや否や
来よとのふ堅削あろ沼て走りて河原へ赴きて姑且ーてかゝ来ふ。然而徳用ハ告るふ。
咱等那里へ赴きて。守屋の光景を覗ひ那頭人なる賊兵をねて既ハ山路ハ入ふけん
人影ハ絶て寂寥すとのふ千葉作吾師平が頭人の首級を贈ーて伏家の兵毎共
倶ふ西陣へとく赴きる。其折間のるるれども。堅削も徳用も。其異変を知らねハ
毫も是を疑ふ。原来件の頭人ハ立出て我を待ろうん。疾赶跟んとのそが せバ堅削然ふ
と。心つ是よりー七錬砲の火素を附る山路の小心今下ー引提て却徳用と画肩をふ
抬る般若槎を。早ほく走る去向の吉凶知るや知らずや。白川の山路遠ハ登る程約莫
十町許ハーて見れバ路の傍ハ敗ふる一座の小堂あり。當下徳用聲を被て堅削
勅ハ重荷を置ふく峻嶂を登らんハ。脚疲労れて。要緊の折ハいふーく
十二分の神気をよくせんやとのふ堅削歩を住ふく寔ハ然ふ這槎ハ。堂内ハ

秘措。那人々と共倶ハ怨を復ーて。其後ふりそゝ
頭の准備をせふー欤と。向ハ堅削有有有咱等も勿論同腹中先実を入れて後ハそと
いひつゝ槎ハ附る行嚢を解下そふち開きて。両箇の割籠を。今ハ出せバ徳用左右ふく
会ふらぶ。我いともあれ病後の小姐が路まぎらふ槎ふうち竜ハ。竜られて患苦ハ堪まあらんぞふん權且
這里へ杖出て割ハ竜を羞めて慰んとのふを堅削うち笑ひて師父の嚮ハ孝順ふる哉の
談のるふまあて時を移さ万ふ。顔を相一相て又槎ハ藏ふく羽ハの宵ふらひ更ふち
戯れつ共倶ハ身を起ーつ。槎ハ携る太緒を早く解祛て蓋を開けバ徳用ハ両ハ拾る

逃去も遂さゞと思ひ定め持る錬杖今を直一縁ゟ内りと跳り出て虎を迎へ立向ふ構手
矢聲烈く修練を盡して數の果さゝ欲されども虎ハ進退疆りあく目今前ゐる
ゟ至れバ忽焉と如く徳用ゞ頭の上を飛越ると両三番蹴
棹る壞ゐ徳用ハ眼眩く精疲れく両三歩ゟ行程ゐ錬杖曳哩と反隕されて慌て
腰ゟ戒刀を抜んとけゟ右の腕を只一口ゐ噛斷捉られて一聲苦と叫びも果ず流る
鮮血ハ蘇枋の墻を敬けるゐ異ゟゞ倩る大傷の少遑も泳ゟべ況ゐおゝざまバ
醫居ゐ托地と脚空さるゐ背を撲して仆さけゟ介程ゐ雪吹姫ハ憂ゞ上ゟる昼來虎の
昼來虎ゐ徳用堅削ハ既ゐる脚を咥裂れて死活ハ知らず仆さゝを見る衆馬ゐ胸潰れて
兎ゟべくもあらぬ身の心神添ぎるりけを倩ゟる隨ゐ亂絶七黒白も分を做りの
ゐ立虎ハ二ゞ見もゟへらぎ人身ゟ高き枯草の中ゐ入ゟく忽然と那里とハなく去ゐケ
案下且説直塚紀二六ゐ鄙ゐ親兵備ゐ邏迫を祈早く政元の郎を退ゐ出く那

雪吹姫を出てやゝ推居れバ雪吹姫ハ悲さと又朽惜さ苦さゝ涙玉成を不測の窮阨
ゐもいれぬ狙鑓屠所の羊ゐ異ゟぬ身ハ背ゐ結杖られ眸ゐ額を推當て白い泣
沈ゞゝを徳用ハ後ゟ抱を起ゐ仰反て鬢蓬げる頬揚ゐく言舌甘く慰れバ堅
削焦燥も推禁ゑ噫師の坊の心鈍さよ連歌の附句ゟられども恋も無常も折ゑよゟん。
去嫌ひなく何ゐゟやゑよ疾腹を縒ふて去向を
繁き枯芒花の風欹あぬ颯耶々々と戰く音さへ
仇と見ゟれバ顕れ出來る那異虎金毛白額鏡成を眼の光凄く爪を張り尾を建て
走り蒐ゟる勢ひゐ徳用も亦胆を洗て姫を
身を構れバ堅削ハ錬砲を早く其方へ推向て両丸を發々々防ぐ虎ハ物ともせず堅削
いよ〳〵怕れ慌て縁ゟ揆と飛下て近く虎を錬砲ゑ打拂ひく逃んとするを虎ハ疾ゟ箭の
像く縦横無尋の堅削を駈悩突歴僵ーて片足を弗と噬斷す徳用ハ這光景ゐ

元禄二年申七月
悪窮テ逢ヒ虎害ヒ天罰豈ニ應ゼ慾ンヤ

まづ三條なる客店に赴給へ則代四郎は對面あて今日親兵衛が與る呼の納扇をそが供遣與あて親兵衛が與る呼の納扇をそが供遣與共侶が件の扇子を開き見るに背面に示さく細書ありその書の略は今日あも咱等左京兆の需に応て白川山なる靈虎を對治の爲に瞑昏より那里に造りて求獵さくしあの挙は那燕丹が烏の頭の白きと馬に角ある誓言に似て我邇る於時到れる於倘幸に七姫神の冥助あらんて成を事あらば既に京兆は約あらく徑に坂本の馳下りて峡嶋路を安房かうべ然がと雙仆の御て我が山獵する従ひそ旦裏は紀二六は預けさる管領家の木牌をもそ俱に幸崎の関を過り又坂本をもち過さく関の那方は我を待ね我倘不幸にして虎に遇とても及て其累命を殞まじ世の胡慮ふさんのみ然る時雙が道塚と親兵伴當其侶は疾稲村歸り参りて我上竟の箇様々々と両舘へ使え上ぐ便是忠と義ぐんはの意に違

怒とせん匆々不備とぞ示されける代四郎是を繰返し看く紀二六は悄語くやう那靈虎の事も世の風聲に咱なるも亦皆知ざるあるを一然が覚ある男士猶尸をも敢ず征ざるとぞ聞く及て命を喪ふ者あり避莫和子は神々ら性も質も丸夫はあらざ是は加るお仁の字の靈王あり又姫神の冥助あれ那虎不測の変化をも必對治せらるべ一然ばとく咱等這里は在ち其山獵を外は見て去て坂本の那方はなるんやよの芙什麼と談されば紀二六答く宴は介へ愚意も亦相似ず小父十一郎の代はきくまの地は留められるは徒る折の伴は立ざれば小父の與はは面伏はく素食の人はるふのこれども主の教あるは違は必怨られん那教はも背ざる於愚意をも今はの芙を做さば主の伴當は要るけれども和子の鎗と鎧櫃は遣して坂本の関の那方は主の来ぬるを待ち及へ又阿叟と小可は五個の雑兵と共はまの贋香とう立去く那山路は赴給へ庚跟は主の伴せ代せんと思ふは甚と問返さを代四郎皮つ點頭て其説宴はあらばー現伴當へ要るけれども和子の鎗と鎧櫃は

これおもえ。是隨身の武具ゐられば必ずくいあるべうぞ。鎧ハ山路の小ぶ和即預りてもちがまゐ鎧櫃ハ其奴隷一名を留めて駝せん。我又騎兵伴當們を皆召聚へく方僅親兵衛が紀二六をりそのハおもてくる事の趣固様々と具ぶ告て有徒れば騎兵五名ハまの贋ぶ昏ようと。又伴當們七八名今まの數店を立去て疾近江路ぶ赴ゐて坂本の関の那方ぶ留まりて主をゐれまの餘の支ハ徒々んとて木牌のるの鑓鎧櫃のる及辛崎坂本の関令が質一向ぶ固様々ぶ答へよをて言詳ぶ論一ぶ伴若黨奴隷毎ハ異誤ふく都てあろ汝果て共倡ぶの為ふ我們ぶ下司るれども敢命を惜むぶあらざを遮莫山路の伴ぶ立ても要ふらんと思われるバ幷ぶ左も右も仕らんと応をまれバ騎兵們ハ鎧櫃の故をもて其一人を残されんより我們代りてのそもべとの為ぶ我四郎欲ぶ餓ゐて却伴當們ぶ盤纏を今ぶせ又紀二六ぶ腰の帯ふる木牌を伴若當ぶ遞與しそのハふう汝ぶ北白河ふう辛崎越を致一ろバ路遠ふをも便宜るれども那虎の害怕あれバ膳所瀬田より湖邊ぶ出て早く那関を越よ今ハ未牌の時候ふ水路ぶ暮ろバ挙何ハせんいそげくと遣立れバ伴當們ハ思ひけるハ紀二六ぶも留りてまの地ぶ在を詮ろのミ幷を問ふ遣あらざれバ生ぶ別ある退ゐて猛ゐ行ハ壮衣せ各早く救立て皆共倡ぶ立出ゐ畢竟代四郎紀二六が伴當們を出ぶ遣て後の話説甚麼ぞを幷ぶ巻を更て且下の回ぶ解分を聴ね！

作者云是ふうの下ハ大江親兵衛が虎を對治の段まで又意思楮筆を費ゐ十數頁綴るみあらねバ其域ぶ至のぶふう既ぶ佳境ぶ入らまくまふうあゐ開板の書肆ぶ定例ありて前板ふう楮數のヲヌ為ぶ壹數るれバ這五巻を下帙の下の甲乙ハ則上梓發販をこぶ書肆の好ぶ儘一ふう餘巻結局續て出一ヲ水滸の頻卑ぶ做ふ百王國ぶ名虎ぶ出者三さバ仏語横城水滸伝新編金梅梅及本伝是已趣向孰も異ぶ七相犯ものみふう依着官先是を查ね

南總里見八犬傳第九輯巻之二十八終

○曲亭翁精編里見八犬傳第九輯下帙之下甲號五卷工匠目次

畫工 柳川重信 卷廿四 廿五 廿六 一頁
畫工 溪齋英泉 卷廿六 二頁 廿七 廿八
筆工 谷文晁 卷廿四 廿五 廿六 廿七 廿八上
筆工 淨書 白馬台音成 卷二十七 二十八下
剞劂 鐫 廉吉 卷廿四
剞劂 森田甲 卷廿五
剞劂 横田守 卷廿六
剞劂 森田甲 卷廿七
剞劂 常盤園 卷廿八

○著作堂新編國字稗史畧目 江戸 書林 文溪堂精刊

南總里見八犬傳第九輯下帙之下乙號 巻之廿九第百四十六回より結局大團圓の巻まで 椎の花刊刻来已後の早春發行遅滞なし

近世説美少年録第四輯 第一輯より第三輯 四輯三十回まで十五巻皇表紙刊布しく初る第四集まで二十巻脱稿刊布して開出でまます第五集第一集より第四集第四十一回以下五巻美少年録と共に刊初ちひかり

開巻驚奇俠客傳第五集

本傳第九輯下帙の下五巻春第百三十六回より第百四十五回まで至てのち結局團圓せまゐらせ下帙の下を又甲乙二板に分ちて今般先甲號五巻を刊行せしむ是より又下帙の下の乙號第百四十六回以下結局大團圓の巻をもて作者畧稿を續て鼓筆を輟ざる事内正に刊刻せしやく全本十二巻の完ちく欲まゐの書三十五ヶ年前文化甲戌の春作者肇て稿を起ぬ今茲天保戊申の春稿本全備の功を竣り益戊寅の夏文是一奇と呼ぶ戊戌夏首誌歟前百作者自識

○刊行所在江戸仙女香 一包代四十八文 黒油美女香 一包代四十八文 江戸京橋傳馬町三丁目中程 坂本氏

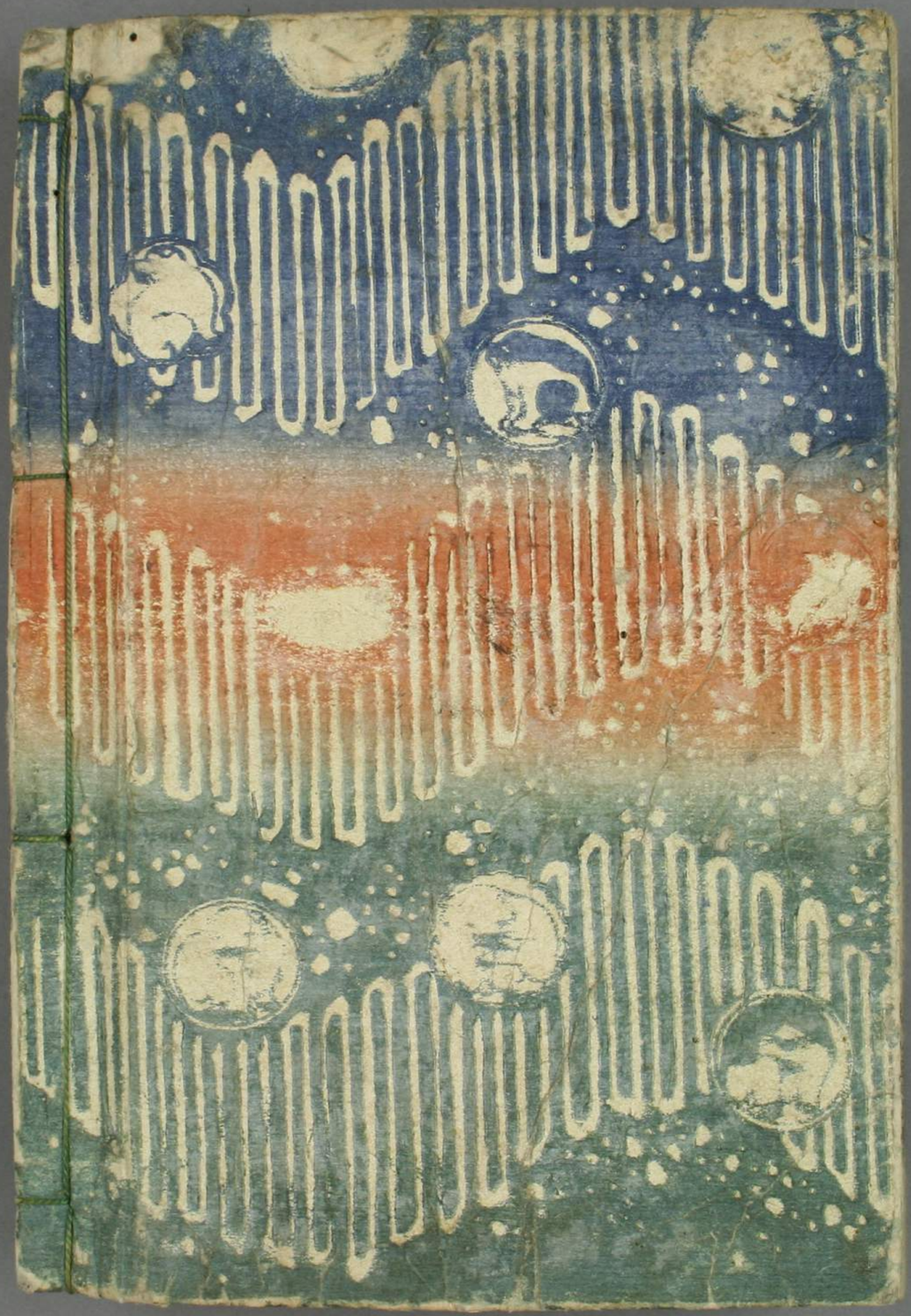
○家傳神女湯 一包代百銅

○精製奇應丸 大包代金貳朱 中包代金五十 小包代五十

○能膽黒梅子 一包代五十

○婦人宛の御薬 一包代金壹分

○金匱接命丸 本郷御弓町 林氏精製

天保十年己亥春正月吉日發行

書行 京都 大文字屋得五郎
大阪 河内屋長兵衛
大阪 河内屋茂兵衛
大阪 河内屋太助
江戸大傳馬町二丁目 丁子屋平兵衛板